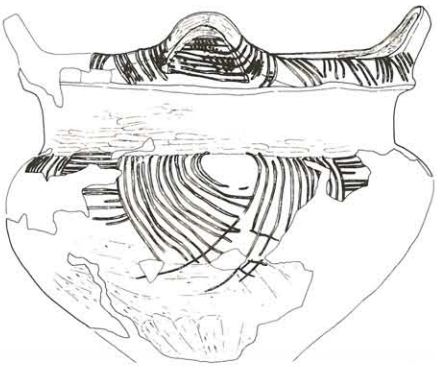
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

紀要
2004



2006年3月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（表紙）　津島岡大遺跡第17次調査（環境理工学部棟）出土の深鉢
（縄文時代後期）
（裏表紙）鹿田遺跡第14次調査（病棟）出土の木簡
（平安時代後半～末）

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2004

2006年3月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

2004（平成16）年度には、鹿田地区において医学部附属病院立体駐車場エレベーター設置にともなう発掘調査等をおこなうとともに、事務局本部棟および環境理工学部棟の新営にともなって実施した発掘調査の成果を報告書として刊行しました。

事務局本部棟の発掘調査は2001（平成13）年、環境理工学部棟のそれは1996（平成８）年と1999（平成11）年でしたから、ことに後者については成果の報告までにかなりの年月を費やしたことになります。これらの調査のあと他の発掘調査の実施が重なって整理作業が遅延したわけですが、文化庁では発掘調査のあと速やかに報告書の刊行をおこなうよう指導しており、本学でも報告書の積み残し解消のために鋭意整理作業を進めているところです。

今後は鹿田遺跡関係の調査報告書の刊行が主な課題となります。鹿田遺跡に関係し、本年報では医学部附属病院管理棟の調査で検出した12～13世紀の井戸枠の再検討結果を報告しています。昨年秋に新病棟ロビーで開催した「岡山大学発掘成果展」のために井戸枠を準備していたところ、板材に焼き付けられた刻印を確認し、これをきっかけにしてこれらの井戸枠の板材どうしが接合し、元は筏穴をもった角材として持ち込まれたらしいことが判明しました。古代の長岡京の井戸などで知られた製材と木材の運搬・利用システムの新たな類例を付け加えることとなったわけですが、このことは藤原摂関家の荘園に関係するかと推定されている鹿田遺跡の歴史的な位置づけを考えるうえでも意義がありそうです。発掘調査成果の整理作業を進めるにあたっては、迅速さとともに遺跡・遺物の内容を学術的に深く的確に把握し、歴史の豊かな内容を報告できるよう努めていきたいと考えています。

本年報の津島岡大遺跡調査研究に関しては、発掘資料の自然科学分析に関するこれまでの成果を集成しています。自然科学データの蓄積は、環境問題に強い関心が寄せられている今日、人間の歴史を解き明かすうえでますます重要な意義をもつといえるでしょう。本センター調査研究専門員の諸先生に研究を進めていただいた成果も含まれています。外部に委託している放射性炭素年代測定については、データ数が増えるにつれて問題点も多くなる一面があり、今後とも注意が必要です。

2004（平成16）年度から岡山大学は国立大学法人となり、本センターも新たな体制で事業に取り組んでいます。調査、研究、普及等の事業を推進するにあたっては本学内外の機関・各位から多大のご協力とご支援をいただきました。最後になりましたが、厚く御礼申しあげます。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長　（理事・事務局長）　阿　部　　健

副センター長（文化科学研究科教授）　稲　田　孝　司

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004

目　次

第１章　津島岡大遺跡の調査研究
第１節　立会調査の概要 …… 1
１．調査の実施状況 …… （光本順） 1
２．公共下水桝接続工事に伴う立会調査 …… （光本） 1
３．津島キャンパス環境整備に伴う立会調査 …… （光本） 2
第２節　津島岡大遺跡の研究 …… 7
１．構内遺跡における発掘調査資料の自然科学的分析 …… （山本悦世） 7

第２章　鹿田遺跡の調査研究
第１節　調査の概要 …… 18
１．鹿田遺跡第16次調査 …… （高田貫太） 18
第２節　立会調査の概要 …… （高田） 22
第３節　鹿田遺跡の研究 …… 25
１．鹿田遺跡第５次調査出土の井戸枠材に関する再検討－焼印と木材の規格－ …… （光本） 25

第３章　その他の地区の調査
第１節　試掘・確認調査の概要 …… 37
１．三朝宿泊所増築および高圧線・電話線切替工事に伴う試掘・確認調査 …… （野崎貴博） 37

第４章　調査資料の整理および公開・活用
第１節　調査資料の整理 …… （岩﨑志保） 40
１．調査資料の整理 …… 40
２．調査資料の分析 …… 40
３．調査資料の保存処理 …… 41
第２節　調査成果の公開・活用 …… （岩﨑） 42
１．公開・展示 …… 42
２．資料・施設等の利活用 …… 43
第３節　2004年度調査研究員の個別研究活動 …… 44
１．科学研究費採択状況 …… 44
２．論文・資料報告 …… 44
３．研究発表等 …… 45
４．資料収集・実態調査 …… 45

第５章　2004年度における調査・研究のまとめ …… （岩﨑） 46

付　編
岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項
１．岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの規程 …… 47
２．2004年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織 …… 49
３．岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項 …… 49

挿図目次

第1章

図1　調査区と土層断面位置 …… 1
図2　公共下水桝土層断面 …… 1
図3　調査区と土層断面位置 …… 2
図4　津島キャンパス環境整備土層断面 …… 3
図5　2004年度の調査地点【1】－津島地区－ …… 5～6
図6　津島岡大遺跡第7次調査 …… 10
図7　津島岡大遺跡第8次調査 …… 10
図8　津島岡大遺跡第27次調査 …… 10
図9　津島岡大遺跡第17次調査 …… 11
図10　津島岡大遺跡第15次調査 …… 12
図11　津島岡大遺跡第3次調査 …… 12
図12　津島岡大遺跡第23次調査 …… 12
図13　津島岡大遺跡における暦年較正年代 …… 14

第2章

図14　第16次調査地点位置図 …… 19
図15　第16次調査地点土層柱状図 …… 19
図16　第16次調査地点近世～近代遺構平面図 …… 21
図17　第16次調査地点土坑1断面図 …… 21
図18　第16次調査地点土坑2平・断面図 …… 22
図19　2004年度の調査地点【2】－鹿田地区－ …… 23
図20　調査8位置図 …… 24
図21　調査8土層柱状図 …… 24
図22　井戸6出土土器 …… 25
図23　井戸6平面図・断面図 …… 25
図24　縦板① …… 27
図25　縦板② …… 28
図26　縦板③ …… 29
図27　縦板④ …… 30
図28　縦板⑤ …… 31
図29　横桟・支木 …… 32
図30　焼印 …… 33
図31　縦板 …… 34
図32　縦板詳細① …… 35
図33　縦板詳細② …… 36

第3章

図34　宿泊所増築工事地点位置図 …… 37
図35　宿泊所増築工事地点土層柱状図 …… 38
図36　高圧線・電話線切替工事地点位置図 …… 39
図37　高圧線・電話線切替工事地点土層柱状図 …… 39
図38　2004年度の調査地点【3】－三朝地区－ …… 39

第4章

図39　津島キャンパス展示会風景 …… 42
図40　展示会アンケート結果 …… 42
図41　職場体験〈高松中学校〉 …… 43
図42　職場体験〈竜操中学校〉 …… 43

表目次

表1　2004年度津島地区調査一覧 …… 4
表2　試料別年代測定値一覧 …… 8
表3　自然科学的分析一覧 …… 16
表4　2004年度鹿田地区調査一覧 …… 23
表5　2004年度鹿田遺跡周辺調査一覧 …… 24
表6　接合材の法量 …… 26
表7　2004年度三朝地区調査一覧 …… 39
表8　放射性炭素年代測定資料一覧 …… 40
表9　樹種同定一覧 …… 41
表10　第6期保存処理工程 …… 41
表11　これまでの保存処理工程 …… 41
表12　外部委託による保存処理遺物一覧 …… 41

付表・付図

付表１　1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）…… 51
付表２　2003年度以前の構内主要調査（1983～2003年度）…… 51
付表３　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要…… 58
付表４　埋蔵文化財調査室刊行物…… 59
付表５　埋蔵文化財調査研究センター刊行物…… 59
付図１　津島地区全体図…… 61
付図２　2003年度までの調査地点【１】－津島地区－…… 63～64
付図３　2003年度までの調査地点【２】－鹿田地区－…… 65
付図４　2003年度までの調査地点【３】－三朝地区－…… 66
付図５　2003年度までの調査地点【４】－東山地区－…… 66
付図６　2003年度までの調査地点【５】－倉敷地区－…… 66

例　言

１．本紀要は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが岡山大学構内において2004年４月１日から2005年３月31日までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果及びセンターの活動についてまとめたものである。
２．本紀要において報告している津島岡大遺跡は岡山市津島中三丁目１－１、鹿田遺跡は岡山市鹿田町二丁目５－１に、福呂遺跡は、鳥取県東伯郡三朝町大字山田字福呂にそれぞれ所在する。
３．資料分析にあたっては、岡山大学文学部久野修義教授にご協力・ご助言を頂いた。記して感謝申し上げる。
４．本文は、岩崎志保・高田貫太・野崎貴博・光本順・山本悦世が分担執筆し、執筆者名は目次および文末に記した。
５．編集は稲田孝司副センター長の指導の元に岩崎が担当した。

凡　例

１．大学構内の埋蔵文化財の調査にあたっては、平成14年度（2002年）４月１日より施行された「測量法及び水路業務法の一部を改正する法律」に基づき、世界測地系を採用し、構内座標を次のように定めている
　１）津島地区では、国土座標第Ⅴ座標系（X＝－144,156.4617m、Y＝－37,246.7496m）を起点とし、真北を基軸とした構内座標を設定する。一辺50mの方形区画である。また、同地区では調査の便宜上、大きく津島北地区と、同南地区に二分する（付図１）。
　２）鹿田地区では、国土座標第Ⅴ座標系（X＝－149,456.3718m、Y＝－37,646.7700m）を起点とし、座標軸をN－15°－Eに振ったものを基軸とした構内座標を設定する。地区割りは一辺５mの方形を基準としている。
　３）本文中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は国土座標系の座標北を、他は磁北を用いている。
２．岡山大学構内の遺跡名は、周知の遺跡の場合はそのまま踏襲する。三朝地区の発掘調査地点は小字名をとり「福呂遺跡」と呼称する。他地区は任意の名称で仮称する。
３．調査名称は「発掘調査」に分類したものについては、各遺跡ごとに調査順に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」「立会調査」に分類したものについては、任意の名称を用いる。発掘調査のうち、小規模で確認調査から連続して調査したものは「試掘・確認調査」に分類する。
４．「発掘調査」についての記述は、いずれも現段階での概要報告であり、詳細な正式報告ではない。
５．表に記載した所属部は、原則として各学部の頭文字を略号として用いている。
６．付表２に記載した調査一覧については、掘削深度が中世層以下に達した調査を対象とし、その他については除外した。未掲載分も含め、全てのデータは、当センターにおいて管理している。
７．本文などで使用の調査番号は表と一致する。
８．本紀要に掲載の地形図（付図１）は、岡山市域図を複写したものである。

第１章　津島岡大遺跡の調査・研究

第１節　立会調査の概要

１．調査の実施状況

2004年度において津島地区で実施された立会調査は、事業数で15件を数える（表１、図５）。件数と調査期間は例年に比べてやや少なく、その多くは掘削深度が浅く造成土内あるいは近代層まで掘削がなされたものであった。そうした中で、以下で述べる公共下水桝接続工事（調査１）と津島キャンパス環境整備（調査６）については、掘削深度が深く、中世層以下の土層や遺構・遺物が確認され、それぞれに貴重な成果を得ることができた。ここでは、これら２件の立会調査に関する調査成果について述べる。

２．公共下水桝接続工事（留学生等宿泊施設）に伴う立会調査（津島南ＢＢ～ＢＤ26区）

ａ．調査区の位置と調査の経過（図１）

2003年度に引き続き、公共下水桝の接続工事が実施され、2004年度は留学生等宿泊施設付近において工事が実施された。本調査区は、津島南地区の西端部にあたる。立会調査は、９月１日～13日の期間中に実施した。宿泊施設の北側において２箇所（図１）、その南側（女子学生寮北側）において１箇所実施した。そのうち、包含層まで掘削が及んだのは第１地点・第２地点の桝部分である。

第２地点は地表面から122cmまで掘削し、近代層と近世層をそれぞれ一層確認した。一方、第１地点では掘削深度が深く、168cmまで掘り下げがなされ、中世までの土層を確認するとともに、現在の歩道下に流れている用水路に沿うかたちで、近世と近代の東西溝を確認した。以下では、第１地点における調査成果について概説する。

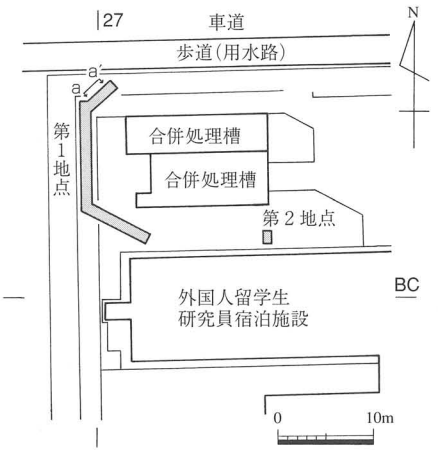


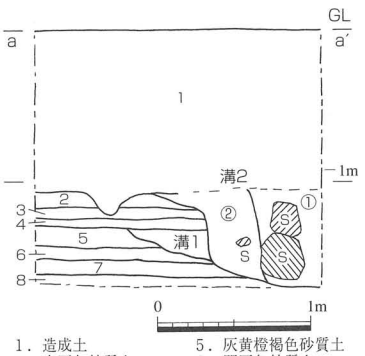
図１　調査区と土層断面図位置
（縮尺１/800）

ｂ．調査の概要

①　層序（図２）

検出された基本層序中からは、遺物の出土がみられなかったため、土層の時期については既往の津島岡大遺跡の土層堆積と対比した結果を述べる。

１層は、1907年（明治40年）の陸軍駐屯地造成以降の造成土である。２層は青灰色粘質土で、近代層と考えられる。２層の上面から、溝２が掘りこまれている。３～５層は近世層と考えられる層で、３層が明灰色砂質土、４層が明灰褐色粘質土、５層が灰黄橙褐色砂質土となる。いずれも鉄分やマンガンの沈着がみられ、耕作土と考えられる。５層の上面からは、溝１が掘削されている。６層は近世～中世層と考えられる明灰色粘質土である。７・８層は中世層と考えられる粘土層で、７層が明灰白色粘土、８層が灰白色粘土となる。



1．造成土　5．灰黄橙褐色砂質土
2．青灰色粘質土　6．明灰色粘質土
3．明灰色砂質土　7．明灰白色粘土
4．明灰褐色粘質土　8．灰白色粘土
溝1．明灰褐色弱粘質土　溝2．①暗青灰色粘土
②明青灰色粘土

図２　公共下水桝土層断面
（縮尺１/50）

② 地形と遺構

遺構としては、現在の東西に流れる用水路の前身といえる近代溝と近世溝を確認した。

近世溝（溝１）は、現存幅56cm、深さ20cm を測る。溝２によって半分以上の幅を切られている。埋土は明灰褐色弱粘質土となる。遺物は出土していない。

一方、近代溝（溝２）は、現存幅98cm、深さ62cm を測る。埋土は二層に大別される。１層は暗青灰色粘土で、２層は明青灰色粘土となる。１層の掘り方に沿うように、護岸用と思われる二段の石積みが施されている。この石積みよりも北側は、溝の埋土と考えられる。２層は裏込め土か、あるいは石積み構築以前の溝の掘り方であると考えられる。

津島岡大遺跡の調査研究に基づいた近世段階の条里の復元案[1]を参照すると、これらの東西溝は条里の区画に則っとるものではない。近世段階には、道路向かいに位置する座主川が東西の条里のラインと考えられている。この座主川は、大学構内を東西に貫流するものであり、中世段階まで遡る可能性があることが第25次調査（農学部散水施設）によって確認されている。

一方、明治時代に作成された地籍図には、本調査区で確認された東西溝が記載されている。今回の調査成果は、地籍図に記載されているこの東西溝による区画が、近世段階にまで遡る可能性が浮かび上がったものといえる。

註（１）野崎貴博　2003「津島岡大遺跡における近世の条里遺構について」『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.142－148

3　津島キャンパス環境整備(留学生センター西)に伴う立会調査（津島南ＢＢ09・10区）

a．調査区の位置と調査の経過（図３）

本調査区は、津島南地区の留学生センターの西に位置する。長方形の池を有する盛土の施された緑地が、調査対象地点である。津島キャンパス内の環境整備の一環で、外灯の設置や雨水用の排水工事、樹木の移植が実施されることとなった。調査期間は樹木移植が2004年９月24日、他は2004年10月５日～11月４日であり、調査は断続的に実施された。

調査区より東40～50m ほどに位置する保健環境センター（旧保健管理センター）地点は、津島岡大遺跡第10次調査として1993年に発掘調査が実施されており、すでに報告書も刊行されている[1]。第10次調査地点は河道の自然堤防にあたり、弥生時代後期の土坑群や古墳時代初頭・後期の集落がひろがっていたことが明らかにされている。津島岡大遺跡において当該期の遺構が密集する地点は第10次調査地点のみであり、本調査区はそのひろがりに関する知見を得られることが調査前から予想された。

調査が必要な工事掘削は、外灯設置箇所（第１・３地点）、雨水排水桝・管埋設箇所（第２地点）、樹木移植箇所においてなされた（図３）。そのうち、包含層を確認したのは第１～３地点である。第３地点については、道路面から50cm の深さを掘削し、中～近世層を確認した。一方、第１地点では道路面より115cm、第２地点では112cm の深さの掘削がなされ、弥生時代後期の土層と基盤層を確認した。第１地点では、包含層中に

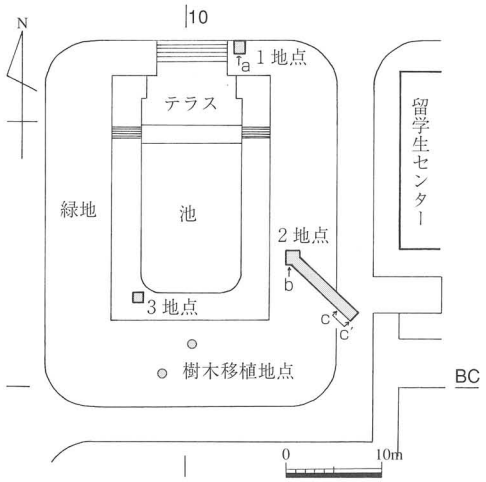
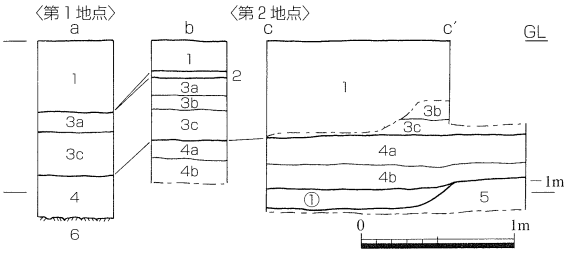


図３　調査区と土層断面の位置
（縮尺１/800）

弥生時代後期の小片が多く含まれ、第２地点においては同時期の遺構の可能性がある溝状の土層を確認した。



1．造成土
2．青灰色砂質土
3a．暗茶褐色砂質土（小礫）
3b．暗茶褐色砂質土（白色微砂）
3c．暗茶褐色砂質土（小礫、白色微砂）
4a．黒褐色砂質土（小礫、土器）
4b．黒褐色砂質土（小礫多）
5．暗黄褐色砂質土
6．黄灰褐色砂混じり礫層
①　黒褐色砂質土（礫多）

図４　津島キャンパス環境整備土層断面（縮尺１/50）

ｂ．調査の概要

①　層序（図４）

第１～３地点ともに、共通した土層を確認したため、ここでは層名を統一して呼称する。層序を図示したのは、掘削深度が深かった第１地点（ａ断面）と、第２地点の桝部分（ｂ・ｃ断面）である。

１層は陸軍駐屯地造成以降の造成土である。２層は、第２地点のｂ断面でのみ確認した青灰色砂質土で、近代の耕作土と考えられる土層である。３層は、３つの地点でいずれも確認している暗茶褐色砂質土で、包含物よりａ～ｃ層に細分した。小礫や白色微砂を含む層で、津島岡大遺跡の基本土層とは様相を異にするものである。鉄分やマンガンがみられず、耕作土の可能性は低い。近代以降の再堆積土である可能性も含めて検討したが、ｂ断面において近代の耕作土と考えられる２層が上部に確認されたため、現状では包含層と認識している。道路や何らかの土盛り等の造成用の土である可能性もある。３層の時期については、遺物がみられなかったため不明であるが、土層の堆積順序と第10次調査の土層の堆積状況から考えれば、中世～近世のものと考えられる。なお、第３地点における掘削は、本層中で収まっている。４層は、第１・２地点において確認した黒褐色砂質土であり、４ａ・ｂ層に分層した。第１地点において、弥生時代後期の土器小片を多く含んでいた土層である。５層は、暗黄褐色砂質土で、第２地点において認められた基盤層である。６層は、黄灰褐色砂混じり礫層で、５層と同様に基盤層と考えられる。

土質や色調から、近接する第10次調査地点の土層との対応が想定されるのは、２層と４層、５・６層である。まず２層は、土層の特徴から考えれば第10次調査における近代層の２層に該当するだろう。ただし、本調査区における３層の存在によって、２層上面の標高が第10次調査地点よりも約40cm 高くなることは注意を要する。４層は、10次地点の弥生時代・古墳時代の土層である７層（黒褐色砂質土）にほぼ該当するだろう。５・６層は、第10次調査地点の基盤層である９層に相当する。５層が９ａ層（淡黄灰色細砂）、６層が９ｂ層（灰色礫）に該当するものと考えられる。一方、本調査区において特徴的に認められた３層に該当する土層は、10次地点において見出すことができない。

津島岡大遺跡の鍵層となっている、突帯文土器や弥生時代前期土器を包含する「黒色土」は、第10次調査地点と同様に本調査区においても認められなかった。

②　地形と遺構・遺物

本調査区の地形については、「黒色土」が認められず、かつ基盤層までの包含層の厚さが薄いことから考えて、第10次調査地点と同様に自然堤防上に位置することが想定される。第10次調査区北側の土層の標高が第１地点の土層の標高とほぼ対応するものと考えられるため、本調査区の微高地は第10次調査地点と一連の微高地である可能性がある。

微地形については、第10次調査地点において弥生時代から古代までは北側が高い地形となっていたことが明らかにされている。今回の調査区においては、調査地点が限られているため確実な微地形の復元は行い得ない。ただし、現状の調査成果からは南側の第２地点の方が北側の第１地点よりも土層が上がっているように見受けられるため、南～南東に向けて微高地が高くなる可能性も存在する。

本調査区では、弥生時代後期と中～近世という二時期の遺構・遺物を確認した。まず、弥生時代後期段階の遺

構としては、第２地点のｃ断面にみられる溝状の遺構が挙げられる。現存幅123cm、深さ15cmを測る。埋土は、礫を多く含む黒褐色砂質土であり、４層に類似する。したがって、この溝状遺構は弥生時代後期段階の所産と考えられる。また、包含層である４層については、第１地点において弥生時代後期の土器小片を多く含んでおり、第２地点においてもわずかであるが小片が出土している。こうした包含層の状況は、第10次地点において検出された遺構群のひろがりを想起させるものである。ただし、土器が小片であることから考えれば、本調査区は集落の中心とは考えがたく、第10次調査地点と同様に集落の縁辺部にあたるであろう。

次に中～近世と考えられる段階については、３層の堆積に注目することができる。この土層の性格については、今回の調査だけではにわかに判断しがたいが、いくつかの可能性について検討してみよう(2)。先に道路用の造成土の可能性を述べたが、南北方向の道路であると仮定するならば、10ラインを北に延長した場所に位置する第19次調査地点（コラボレーションセンター）において、近世段階の南北の道路状遺構が検出されていることに注目することができる。ただし、この道路状遺構の上面は削平を受けているものと考えられるが、そのようにみた場合においても、検出面よりも３層上面が不自然に高くなるという問題は依然のこされる。あるいは視点を少し変えて、調査区付近の旧地形との関連についても注意しておく必要がある。岡山大学津島キャンパスが構築される以前の土地利用の様子がわかる明治時代に作成された地籍図を参照すると、調査区付近は周囲の田畑の長方形を呈する区画とは異なり、逆台形状の区画の東辺にあたる。こうした区画の乱れは、旧地形を反映したものである可能性がある。そのように考えるならば、旧地形に規定されたかたちで、中～近世段階の何らかの造成が本調査区においてなされた可能性が考えられる。いずれにせよ、今後の調査において継続的に検討する必要がある。

以上のように、本調査によっていくつかの貴重な知見を得ることができた。まとめると、まず本調査区は10次地点と同様に自然堤防上に位置することが判明した。このことは、津島岡大遺跡の地形復元を検討する上でも重要な成果となった。また同地点で確認された弥生時代後期段階の集落が、本調査区までひろがることが判明し、当該期の集落のひろがりについて知見が得られた。中～近世の段階については、造成土かと思われる土層を確認し、今後の調査における新たな課題を得ることができたものといえよう。　（光本　順）

註（１）山本悦世・岩崎志保編　2003『津島岡大遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（２）検討にあたっては山本悦世氏から有益なご教示をいただいた。

表１　2004年度津島地区調査一覧

番号	種類	調査地区	構内座標	所属	調査名称	調査期間	掘削深度(GL-m)	内容
1	立会	津島南	BB～BD26	事	公共下水桝接続工事　留学生等宿泊施設	9.1～13	1.22～1.68	中世層まで掘削
2	立会	津島北	AX16	文法経	文・法・経動物実験施設ガス漏れ補修工事	9.2	0.6	既掘内
3	立会	津島南	BB～BD09・10	事	津島キャンパス環境整備　一般教育棟樹木移植	9.24	0.5～0.7	造成土内
4	立会	津島北	AX03	教	教育学部ガス配管切り替え工事	9.27、10.1	0.82～1.18	造成土内
5	立会	津島南	BI15	事	南宿舎駐車場整備	10.4	1.15	近代層まで掘削
6	立会	津島南	BB９・10	事	津島キャンパス環境整備　留学生センター西	10.5、11.4	0.5～1.15	弥生後期包含層・遺構・礫層確認
7	立会	津島北	AU03	工	津島構内道路等改修工事　工学部駐車場	10.22	0.7	造成土内
8	立会	津島北	AU・AV06	工	工学部12号館前ガス漏れ補修・ガス配管工事	10.22、11.17	0.8～1.00	既掘内、造成土内
9	立会	津島北	AW11	工	工学部本館西ガス漏れ補修工事	11.1	1.25	既設内
10	立会	津島南	BF・BG 02・03、BG10～12	事	津島キャンパス環境整備　東団地境界	1.11・17・18・31	0.7～1.2	西地点は造成土内、東地点は近代層まで掘削した箇所あり
11	立会	津島北	AU05	工	有機廃液保管庫新営電気設備工事	1.27	0.8～1.0	造成土内
12	立会	津島北	AY・AZ12・13、BA13	事	津島キャンパス環境整備　北団地理学部本館前	2.14、3.1・4・16	0.85～1.3	一部で近代層確認、他は造成土内
13	立会	津島北	AV12	図	中央図書館非常階段整備	2.14	1.0	造成土内
14	立会	津島北	AV05	工	工学部排水工事	3.4	0.6	造成土内
15	立会	津島南	BC・BD05	事	野球場内路面改修その他工事	3.10	0.9	造成土内

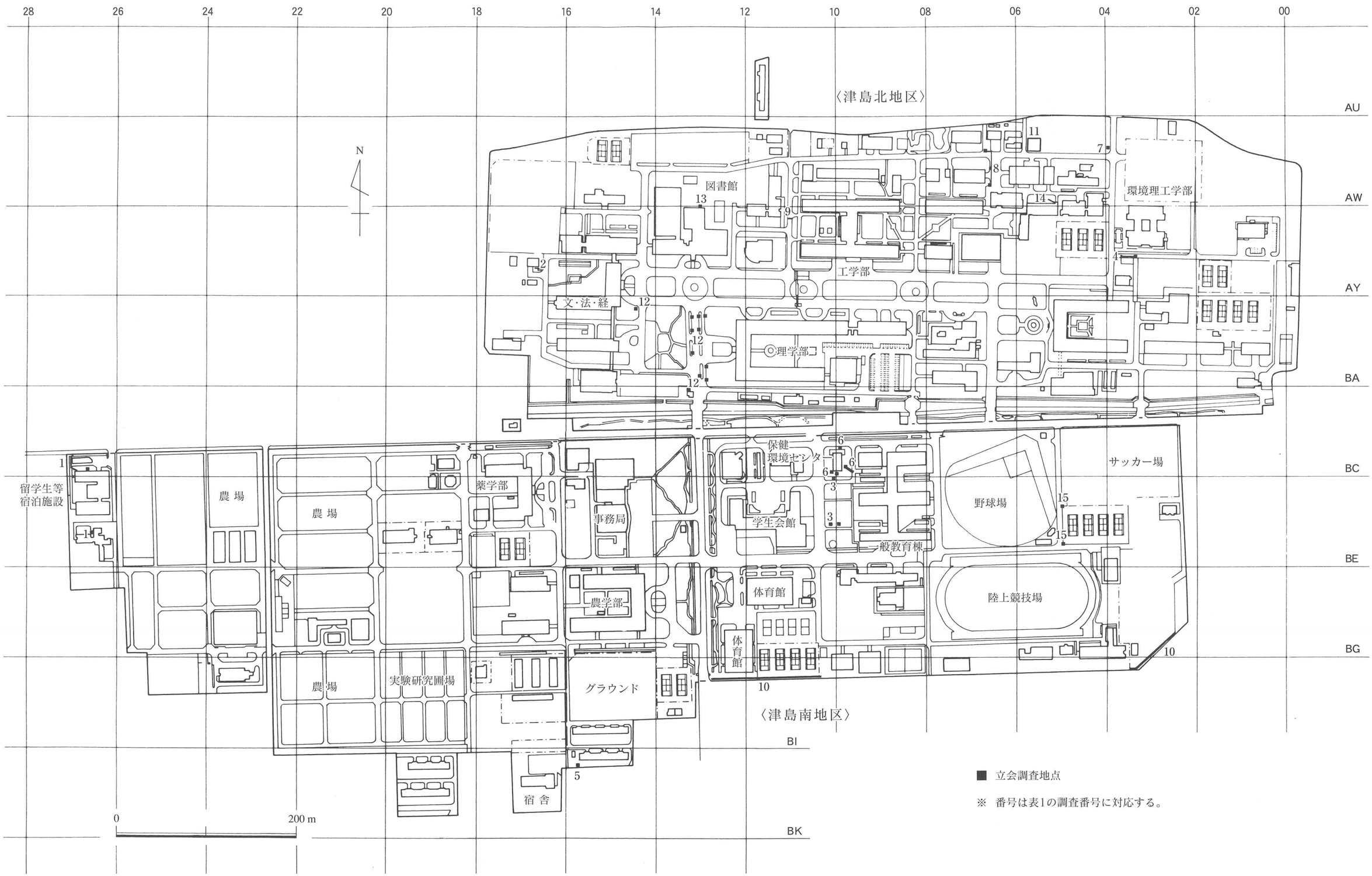


図５　2004年度の調査地点【１】－津島地区－（縮尺１/4000）

第２節　津島岡大遺跡の研究

１．構内遺跡における発掘調査資料の自然科学的分析

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターでは、構内遺跡の発掘調査資料に関して、必要に応じて自然科学的な分析を行っている。分析の内容は、年代測定・植物珪酸体分析・花粉分析・植物遺存体の分析（炭化植物・種子など）・樹種同定・動物遺存体の同定・石材同定を中心とし、その他に様々な分析（ガラス滓・赤色顔料・金属・鉄滓・火薬・粒度組成など）を含む。こうした分析の一覧は文末に掲載した（表３）。ただし、肉眼同定のものは多岐にわたるために省略した(1)。

なかでも、津島岡大遺跡では年代測定・植物珪酸体分析、花粉分析、植物遺存体の分析あるいは樹種同定について、特に系統的な分析を継続している。今回は、その中から放射性炭素年代測定結果について、その成果を報告する。

ａ．対象とした試料

放射性炭素年代測定を行ったのは、津島岡大遺跡の11箇所の調査地点においてである。試料点数は合計33点で、その内訳は土器外面に付着した炭化物８点、貯蔵穴出土の堅果類５点、杭および利用木材７点、遺構に伴う炭化材あるいは炭化物10点、基本土層中の炭化物３点である（表３Ａ）。

ここでは、同遺跡を理解する上で重要となる縄文時代～弥生時代前期にあたる試料について、本センターが中心として分析測定機関に依頼して実施した年代分析のデータに関してまとめることとする。対象となる試料は、正式報告が既刊の調査に加え、今年度刊行する第23次調査までを含めて、９箇所の調査地点から抽出した計25点である（表２）。試料の内訳は、縄文時代後期の土器を共伴するかあるいはその可能性が高い炉・土坑から炭化物を６点（第17・27次調査）と貯蔵穴から堅果類１点（第15次調査）、縄文時代後期河道内の杭４点（第23次調査）、縄文時代の面で検出されたが遺物を伴わない遺構内の炭化物４点（第７・８次調査）、そして、土器外面に付着した炭化物を突帯文土器３点（第３・23次調査）と弥生時代前期の甕１点（第23次調査）から、突帯文土器を共伴する貯蔵穴から堅果類１点（第３次調査）、弥生時代前期の土器を伴う河道内の堰構成材２点（第23次調査）のほかに、弥生時代早期～前期の土層と判断している「黒色土」、あるいはその直下の土層という基本土層からの３点（第22次調査・試掘調査）である。

分析方法は、加速器質量分析法（AMS法）が中心であるが、樹木など一部でβ線計算法が選択されている。

ｂ．個別試料の内容

分析対象とした試料の年代測定値は表２・図13に示した。まず、分析を行った個別試料について、発掘調査から得られた内容を説明しておこう。

試料１（図６）：試料は第７次調査地点の炉１内に残された炭化材である。同遺構は平面規模が直径30～35cm、深さは約30cmを測る。壁面から検出面の肩部にかけて焼土化した被熱痕が顕著に残る。炭化材は、その壁面に張り付くように検出された。炉に伴う遺物は皆無であるため、炉の時期は確定できない。

同炉の検出面では、その他に炉１基と焼土・炭化物集中ピットなどが広がり、少量の土器が出土している。その時期は縄文時代後期中葉を中心とし、中期に遡る可能性のあるものはごく僅かである。

試料２・３・10（図７）：第８次調査地点の土坑３基に伴う試料である。同遺構検出面では土坑10基と小溝５条が確認されているが、いずれの遺構からも出土遺物は皆無であり時期の確定はできない。ただし、検出面あるい

表２　試料別年代測定値一覧

試料番号	調査次	出土遺構・土層	試料の種類	測定法	^{14}C 年代	σ^{13}C (‰)	補正^{14}C 年代	暦年較正年代	測定機関番号	共伴・関連土器の型式・時期	報告
1	第７次	炉１	炭化材		5030±90B.P〈3080±90B.C.〉				Gak－16160	－	報告９
2	第８次	土坑Ｋ１－炭層	炭化物		4960±110B.P〈3010B.C.〉				Gak－16416	－	報告８
3	第８次	土坑Ｋ６－炭層	炭化物		4490±130B.P〈2540B.C.〉				Gak－16418	－	報告８
4	第27次	炉１	炭化材	β線計数法	3960±60	－27.3	3920±60	交点：cal BC2450 1σ：cal BC2480～2310 2σ：cal BC2570～2210	Beta－172000	《中津式》	報告18：分析番号No１
5	第27次	炉２	炭化物	β線計数法	3930±60	－26.7	3910±60	交点：cal BC2450 1σ：cal BC2470～2300 2σ：cal BC2570～2520, 2500～2210	Beta－172001	中津式	報告18：分析番号No２
6	第17次	土坑９－１層	炭化物	AMS法	3900±40	－25.7	3890±40	交点：cal BC2400, 2380, 2360 1σ：cal BC2460～2300 2σ：cal BC2470～2220	Beta－194639	福田ＫⅡ式～縁帯文土器成立段階	報告21：分析番号No４
7	第17次	土坑９－３層	炭化物	AMS法	3870±40	－26.1	3850±40	交点：cal BC2300 1σ：cal BC2400～2380, 2360～2220 2σ：cal BC2460～2200	Beta－194640	福田ＫⅡ式～縁帯文土器成立段階	報告21：分析番号No５
8	第15次	貯蔵穴SP16	堅果類	AMS法	3890±50	－27.7	3850±50	交点：calBC2300 1σ：calBC2430～2210 2σ：calBC2465～2145	Beta－134021	《福田ＫⅡ式～縁帯文土器成立段階》	報告19：分析番号No２
9	第17次	住居1－炉1	炭化物	AMS法	3740±40	－23.4	3770±40	交点：cal BC2200 1σ：cal BC2270～2260, 2220～2140 2σ：cal BC2300～2120, 2100～2040	Beta－195251	縁帯文土器成立段階	報告21：分析番号No.６
10	第８次	土坑Ｋ５－炭層	炭化物		3880±130B.P〈1930B.C〉				Gak－16417	－	報告８
11	第23次	河道１杭群	杭	β線計数法	3670±40	－27.5	3630±40	交点：cal BC1970 1σ：cal BC2030～1940 2σ：cal BC2130～2080, 2060～1890	Beta－206670	《中津式～福田ＫⅡ式》	報告22:杭No.184、分析番号No.10－2005年
12	第23次	河道１杭群	杭	β線計数法	3650±70	－30.6	3560±70	交点：cal BC1900 1σ：cal BC1970～1770 2σ：cal BC2120～2090, 2050～1720	Beta－146335	《中津式～福田ＫⅡ式》	報告22：杭No.55、分析番号No.１－2000年
13	第23次	河道１杭群	杭	β線計数法	3520±40	－27.7	3480±40	交点：cal BC1760 1σ：cal BC1880～1740 2σ：cal BC1900～1690	Beta－206671	《中津式～福田ＫⅡ式》	報告22：分析番号No.11－2005年
14	第23次	河道１杭群	杭	β線計数法	3250±70	－28	3210±70	交点：cal BC1490 1σ：cal BC1530～1410 2σ：cal BC1630～1380	Beta－172002	《中津式～福田ＫⅡ式》	報告22：分析番号No.１－2002年
15	第17次	竪穴住居状遺構1－炉3	炭化物	AMS法	2930±50	－23.8	2950±50	交点：calBC1140 1σ：calBC1260～1055 2σ：calBC1305～1000	Beta－134022	縁帯文土器成立段階	報告21：分析番号No.３
16	試掘(T37)	Ｔ６－「黒色土」の下層	炭化物	β線計数法	2800±60	－23	2840±60	交点：cal BC1000 1σ：cal BC1060～920 2σ：cal BC1190～840	Beta－146336	－	年報18
17	第22次	第２地点－15層(「黒色土」の下層)	炭化物	AMS法	2690±50	－23	2720±50	交点：calBC840 1σ：calBC910～820 2σ：calBC975～805	Beta－134019	－	報告21：分析番号No.２
18	第23次	河道３、堰	木材	β線計数法	2700±50	－28.5	2640±50	交点：cal BC810 1σ：cal BC820～790 2σ：cal BC880～780	Beta－206669	《弥生前期中葉～後葉》	報告22：支保材2,分析番号No９－2005年
19	第23次	河道３、堰	杭	β線計数法	2660±60	－29.6	2590±60	交点：cal BC790 1σ：cal BC810～780 2σ：cal BC830～750, 700～540	Beta－206668	《弥生前期中葉～後葉》	報告22：W35(杭3)、分析番号No.８－2005年
20	第３次	13層	土器付着炭化物	AMS法	2580±40	－26.1	2560±40	交点：cal BC790 1σ：cal BC800～770 2σ：cal BC810～760, 680～550	Beta－206666	突帯文土器	報告５：図49－207、測定値は本紀要
21	第３次	貯蔵穴SP1	堅果類	AMS法	2620±40	－28.4	2560±40	交点：calBC785 1σ：calBC795～770 2σ：calBC810～755, BC680～550	Beta－134020	突帯文土器	報告５、測定値は報告19、分析番号No.１
22	第３次	13層	土器付着炭化物	AMS法	2570±40	－26.1	2550±40	交点：cal BC780 1σ：cal BC790～770 2σ：cal BC800～750, 700～540	Beta－206667	突帯文土器	報告５：図40－36、測定値は本紀要
23	第23次	河道２	土器付着炭化物	AMS法	2550±40	－26.6	2520±40	交点：cal BC770 1σ：cal BC790～760, 680～550 2σ：cal BC800～520	Beta－206942	突帯文土器	報告22：図38－４、分析番号No.１－2005年
24	第23次	河道３	土器付着炭化物	AMS法	2510±50	－26.4	2490±50	交点：cal BC760, 640, 560 1σ：cal BC780～520 2σ：cal BC790～410	Beta－206943	弥生前期中葉～後葉土器	報告22：図52－36、分析番号No.２－2005年
25	第22次	第２地点－13層(「黒色土」)	炭化物	AMS法	2490±60	－22.3	2530±60	交点：calBC775 1σ：calBC795～750, calBC695～540 2σ：calBC810～415	Beta－134018	－	報告21：分析番号No.１

「黒色土」：津島地区に堆積する突帯文土器～弥生前期土器を包含する鍵層的な土層

（1σ：68％確率　2σ：95％確率）

《　》：周辺出土土器で関連性が高いもの

報告：岡山大学構内遺跡発掘調査報告

Gak：学習院大学、Beta：ベータ社

はそれを覆う土層には福田ＫⅡ式の土器片がわずかに含まれることから、縄文時代後期の時期を想定した報告を行った。

試料２は土坑Ｋ１内の炭化物である。同遺構は平面規模が95×85cm、深さ32cm を有す。内部には焼土あるいは炭化物の堆積土層が確認される（図７－ｂ）。分析を行った試料は、土坑使用段階に形成された木炭である。

試料３は土坑６内の炭化物塊である。同遺構は平面規模72×52cm が復元され、深さは17cm を測る。埋土は、前述の土坑Ｋ１とはやや異なり、堆積土層全体に炭化物が多く含まれ、被熱した大形の角礫が認められる。土坑Ｋ１・Ｋ５とはそれぞれ７ｍ程度の距離を有する。

試料10は土坑Ｋ５内の木炭である。同遺構は平面規模が165×121cm、深さ25cm を測り、内部には多量の焼土と木炭塊が堆積するなど、土坑Ｋ１との類似性が高い。同土坑とは約10m 程度の距離をもつ。

試料４・５（図８）：第27次調査の炉１・２に伴う試料である。両炉の検出面では、他に炉１基・焼土と炭の集中箇所数カ所のほか土坑３基が検出された（図８－ａ）。同面で出土する遺物は少量であるが、縄文時代後期初頭の中津式に属する土器のほかに、やや下層からは中期に遡る土器がわずかに確認されている。

試料４は炉１の内部から出土した炭化材である。炉１は、４ｍ前後の範囲に窪み部と被熱痕を残す張り出し部で構成され、焼土塊や炭化物の集中堆積が認められる。試料は、その焼土あるいは炭化物の堆積層間に位置する。炉内からの出土遺物は皆無であるが、ごく周辺の検出面において遺物が集中的に分布する。これらの土器（図８－ｂ）は中津式にあたり、炉１周辺以外では出土遺物が極めて少ないことから、同遺構との共伴関係が想定される。

試料５は、炉１とは４～５ｍの間隔をもつ炉２の上層に集中的に包含された炭化物である。炉２は４ｍ前後の範囲に窪み部と張り出し部を有し、被熱痕あるいは焼土・炭化物の包含などの点で炉１と共通した特徴を示す。試料をサンプリングした土層中からは、中津式の土器（図８－ｃ）がまとまって出土している。

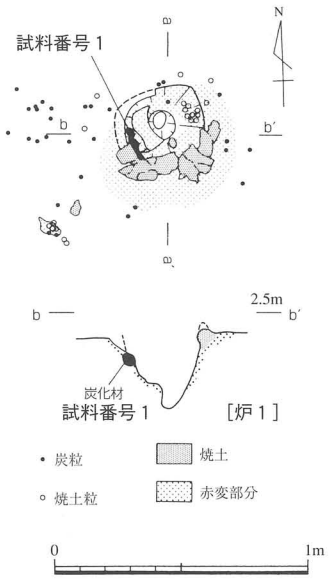
試料６・７（図９－ａ・ｂ）：第17次調査で検出された土坑９の試料である。同土坑は平面規模が2.6×2.3m、深さ50cm を測り、埋土は黒色土に近い上層と黄色系の色調を示す下層とに大別される（図９－ａ）。土質の明瞭な差異に加えて、両層間には出土遺物量あるいは土層堆積状況などの点で堆積環境の違いが窺われた。

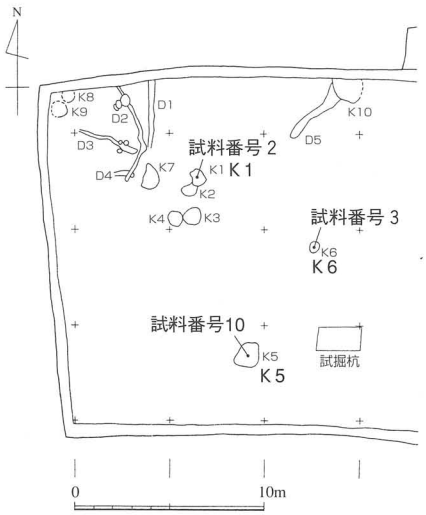
試料６は上層にあたる１層の土壌に含まれる炭化物である。上層からは福田ＫⅡ式～縁帯文土器成立段階を中心とした土器（図９－ｂ）が集中的に出土する。試料７は下層にあたる３層の土壌に含まれる炭化物である。土器の出土量は非常に少なく、縄文時代後期と判断されるのみである。

試料８（図10）：第15次調査地点の貯蔵穴 SP16内に残された堅果類（カシ類）である。試料は上層（２層）から出土しており、貯蔵されていた堅果類と判断される。その採集時期は貯蔵穴使用時期に一致すると考えられるが、明確な時期を示す共伴遺物は認められない。参考となる土器は、同一面に広がる貯蔵穴から出土した福田ＫⅡ式の土器、そして、同遺構が河道斜面下端付近に構築されているという点から、河道内に豊富に包含される福田ＫⅡ式～縁帯文土器成立段階を中心とする土器があげられる。その他に、河道内からは里木Ⅱ式・縄文時代中期末段階・中津式・縁帯文土器がわずかに出土する。

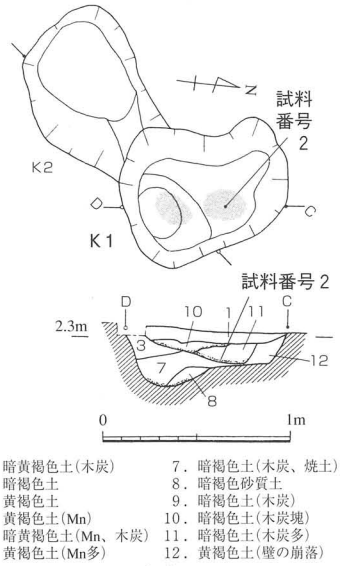
試料９・15（図９－ｃ・ｄ）：第17次調査で調査された竪穴住居状遺構１に伴う炉址２・３からの試料である。土壌サンプルとして採集した炭化物について２回にわたる分析を行った。試料15が2000年の分析試料であり、試料９は2002年に同じ土壌サンプルから試料を再度採集した２回目の分析試料である。

分析対象とした３層は、炉２から炉３へと炉が再構築されるなかで形成された土層であり、炉３の使用に伴う被熱壁面を構成する。その上面には炉３に伴う１個体の深鉢（図９－ｄ：土器２）が張り付いて出土し、炉２上面にはその深鉢に続いて別の深鉢片（同：土器１）が残る。この土器の特徴は縁帯文土器成立段階を示しており、竪穴住居状遺構の床面出土土器の時期とも一致する。覆土には福田ＫⅡ式～津雲Ａ式の土器を含むが、分析試料の形成に最も関わりが強い炉２・３の時期は、縁帯文土器成立段階と考えている。





a．遺構配置図



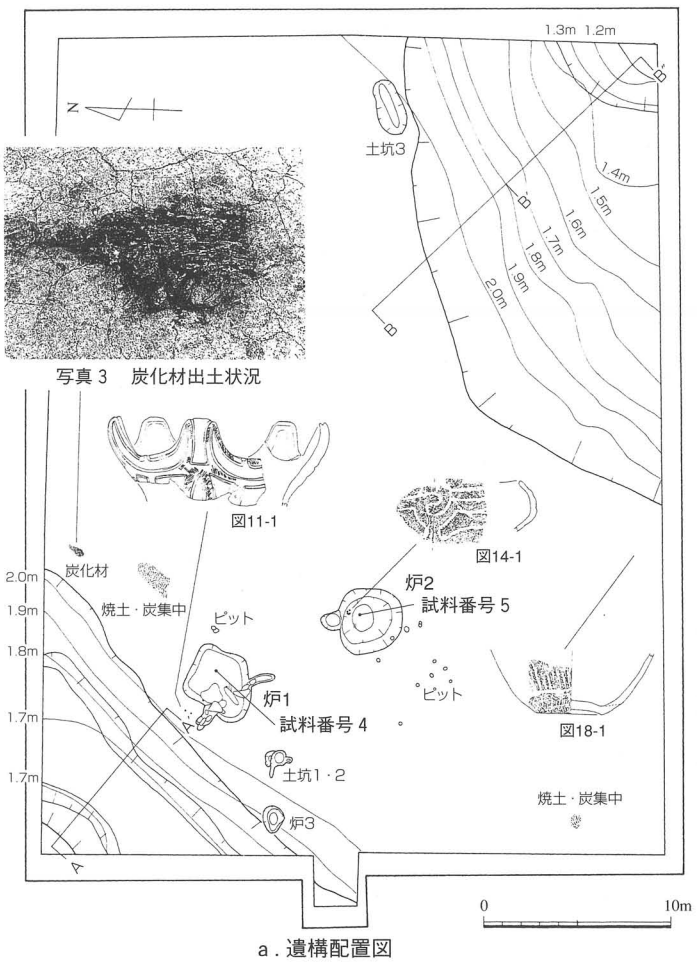
1．暗黄褐色土(木炭)
2．暗褐色土
3．黄褐色土
4．黄褐色土(Mn)
5．暗黄褐色土(Mn、木炭)
6．黄褐色土(Mn多)
7．暗褐色土(木炭、焼土)
8．暗褐色砂質土
9．暗褐色土(木炭)
10．暗褐色土(木炭塊)
11．暗褐色土(木炭多)
12．黄褐色土(壁の崩落)

b．土坑Ｋ１

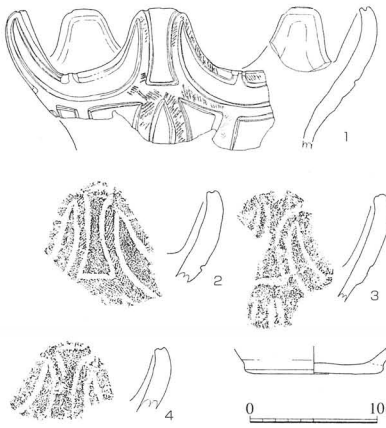
図６　津島岡大遺跡第７次調査

図７　津島岡大遺跡第８次調査

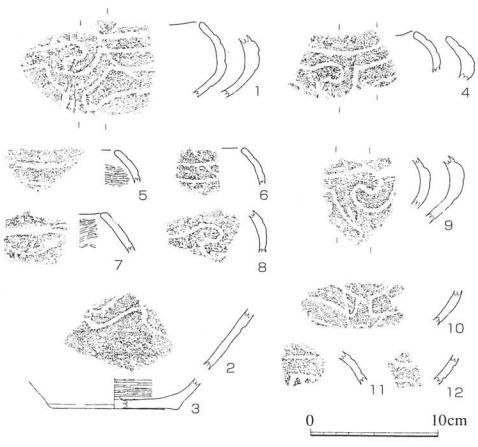
写真３　炭化材出土状況



a．遺構配置図

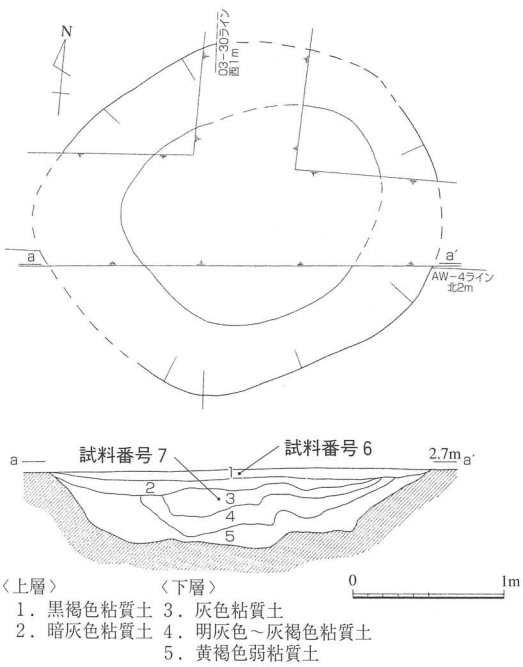


b．炉１周辺出土土器

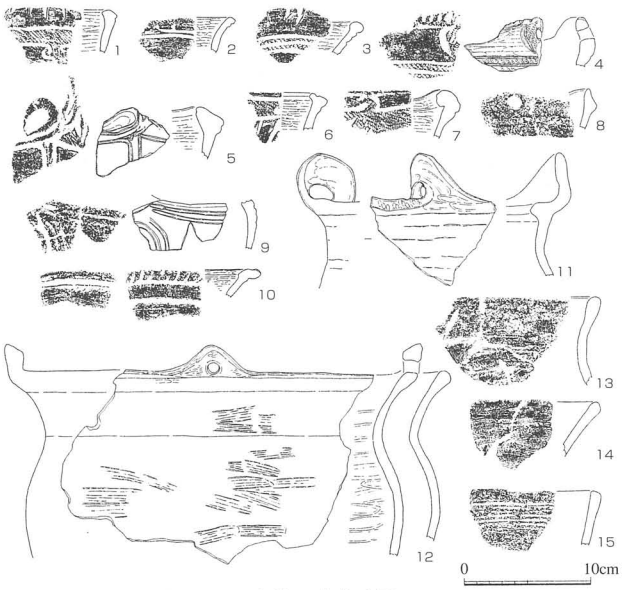


c．炉２出土土器

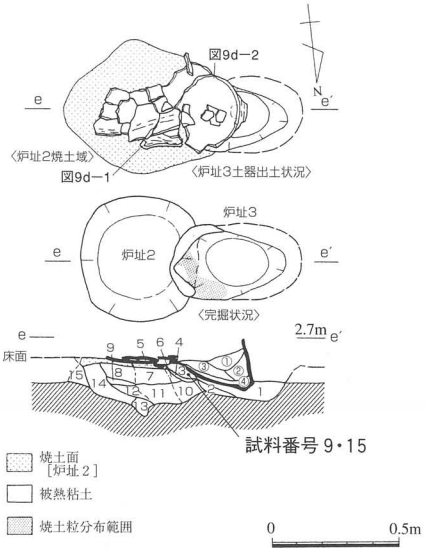
図８　津島岡大遺跡第27次調査



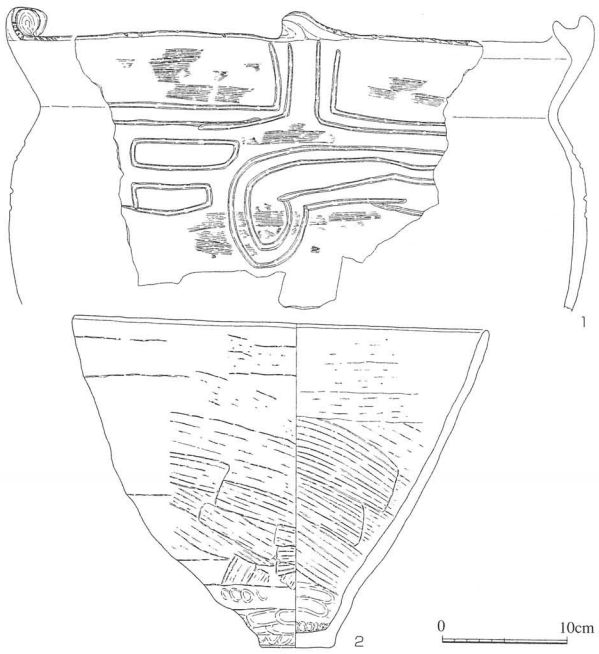
a．土坑９



b．土坑９出土土器



c．竪穴住居状遺構１内炉２・３



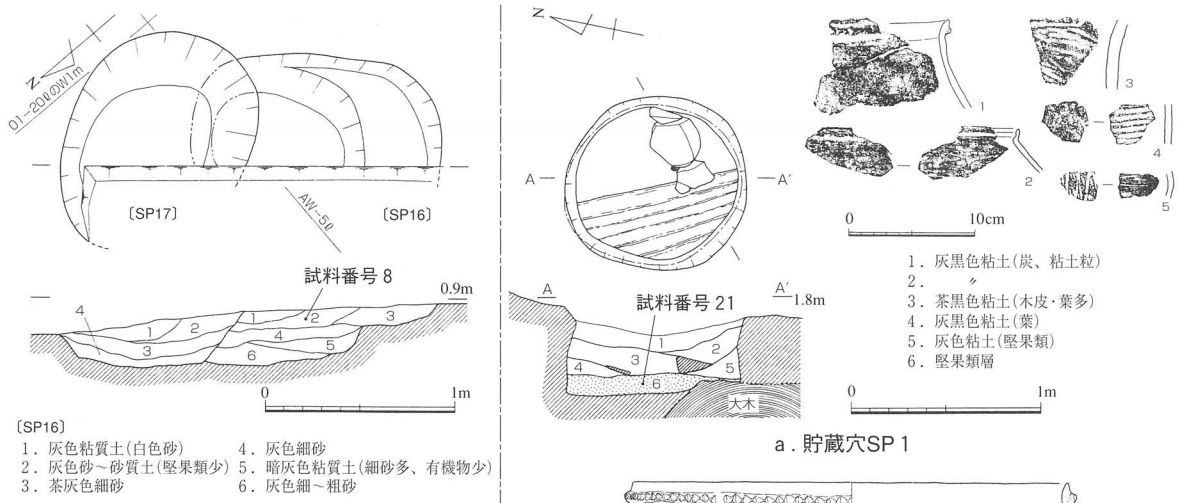
d．竪穴住居状遺構１内炉２・３出土土器

図９　津島岡大遺跡第17次調査

試料11～14：試料は第23次調査において河道１内に打ち込まれた杭群の中の４点である。200本以上の杭で構成される杭群には複数の機能が想定されているが、その利用に関しては一連のものと捉えられている。河道内からは、縄文後期初頭～前葉（中津式・福田ＫⅡ式）を中心とした土器が出土する。後期中葉のものは小片であり数点が含まれるのみである。

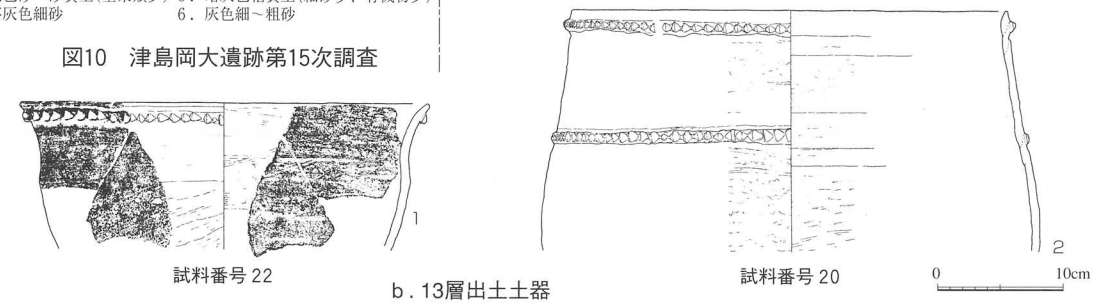
試料の杭は、いずれも先端を炭化させており、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。樹皮は試料14を除く試料11～13で残っている。試料11は直径３cm、残存長45cm、試料12は直径2.7cm、残存長34.1cm、試料13は直径2.6cm、残存長19.4cm、試料14は直径３cm、残存長20.4cm を測る。

試料16：試料は第17次調査地点の南側で実施した試掘調査において採集した土層中の炭化物である。分析対象と



a．貯蔵穴SP１

図10　津島岡大遺跡第15次調査



b．13層出土土器

図11　津島岡大遺跡第３次調査

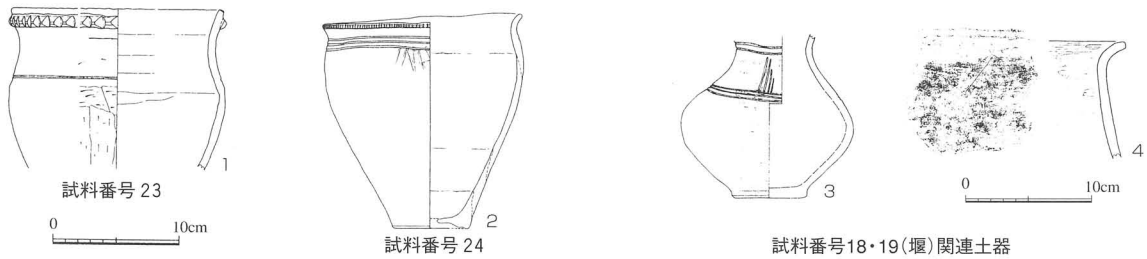


図12　津島岡大遺跡第23次調査

した土層は、津島岡大遺跡において「黒色土」として鍵層になっている土層である。ただし、同地点においては、通常の「黒色土」と比べると、土層の厚さが非常に薄く下層との境が不明瞭で漸移的な状態にあった点は注意しなければならない。津島岡大遺跡ではこの「黒色土」から突帯文土器あるいは弥生前期土器が出土する場合が多いが、サンプリングを行った同地点では遺物は出土していない。

試料17・25：両試料は第22次調査において採集した堆積土中の炭化物である。試料17は「黒色土」の直下に堆積する15層（第17・22次調査基本土層）に、試料25は「黒色土」にあたる13層（同基本土層）に、それぞれ含まれる。いずれも時期を示す遺物は出土していない。

試料18・19（図12）：試料は、第23次調査の河道３内に構築された堰の構成部材２点である。同河道は、前述した試料11～14が位置する縄文時代後期の河道上部に重複する。堰は杭７本と支保材３点などで構成される。

試料18は３本の支保材の中央に位置し、189.4cm の長さをもつ丸木材で、樹種はコナラ属コナラ節である。

試料19は７本で構成される杭列の西から３番目に位置し（報告：杭３）、中心的部材として堰を構成する。直径は11.2×10.6cm を測る丸木材で、長さは44.8cm が残る。樹種はコナラ属クヌギ節である。両試料は、その位置関係から一連の構造物を成すことは明らかであり、使用時期はほぼ一致する可能性が高い。時期を考える上

で参考になるのは、堰に絡み合うように出土した弥生時代前期中葉の土器（図12：土器４）あるいは同堰から溝への取水口にあたる位置に置かれた弥生前期中葉～後葉の壺（同：土器３）があげられる。また、同河道からは、後述する試料24（同：土器２）が出土している。

試料20・22（図11－ｂ）：試料20（図11－ｂ：土器２）と試料22（同：土器１）は、第３次調査において13層（同調査基本土層）から出土した突帯文土器の外面に付着した炭化物である。河道斜面に堆積する同層からは、突帯文土器を中心とした多量の土器が集中して出土した。土器の特徴から縄文時代晩期の前池式と沢田式の間に位置する土器群として報告している。

試料21（図11－ａ）：試料は、第３次調査地点において河道斜面下端に構築された貯蔵穴ＳＰ１の最下層（４層）に貯蔵された状態で堆積した堅果類（カシ類）である。河道斜面には、前述の試料20・22を含む土器群が貯蔵穴直上を覆っており、同貯蔵穴内から出土した突帯文土器とともに、その埋没時期を窺わせる。

試料23（図12）：試料は、第23次調査の河道２から出土した突帯文土器（図12：土器１）の外面に付着した炭化物である。同河道からは突帯文土器がまとまって出土し、弥生土器を伴わない。

試料24（図12）：試料は、第23次調査の河道３から出土した弥生時代前期の甕（図12：土器２）の外面に付着した炭化物である。前述したように同河道は試料18・19にあたる堰が設置された河道である。土器は３条の沈線などから前期中葉～後葉に属すると判断される。

ｃ．考古学的成果と分析結果との関係

ここまで、試料１～25について考古学的資料からその内容を説明した。次に、発掘調査から年代を推し量った試料に関して、放射性炭素測定値（表２・図13）との関係を整理しておこう。

まず、縄文時代後期の土器が直接的あるいは間接的に共伴する試料４～９・11～15について確認しよう。試料４・５では中津式、試料６～８では福田ＫⅡ式～縁帯文土器成立段階、試料９・15では縁帯文土器成立段階、試料11～14では中津式～福田ＫⅡ式が主体をなす。それに対して分析から得られる数値は、試料４・５では交点ＢＣ2450（１σ：ＢＣ2480～2310、２σ：ＢＣ2570～2210）と交点ＢＣ2450（１σ：ＢＣ2470～2300、２σ：ＢＣ2570～2520・2500～2210）であり、交点あるいは２σでほとんど一致する。一方、試料６～８でも、その数値は、例えば試料６（１σ：ＢＣ2460～2300、２σ：ＢＣ2470～2220）をみてもわかるように、試料４・５の数値とかなりの部分で重複する。交点では、試料６・７・８はＢＣ2400・2380・2360、ＢＣ2300、ＢＣ2300をそれぞれ示し、試料４・５よりは若干新しい値となるが、数値域の多くが重複する点は見過ごせないであろう。

さらに、考古学的見地とは明らかに一致しない場合が指摘される。試料６・７に関して分析数値を比較してみよう。両試料は同一土坑の上層（試料６）と下層（試料７）にあたる。当然、試料６は試料７よりは新しい数値が予想されるが、分析数値は２σでは重複しつつ交点では下層にあたる試料７の値の方が新しい。その差は100年～60年の幅を見せており、堆積順序とは逆転することとなる。その他に、試料９と試料15にも、サンプル位置がごく近い試料間にもかかわらず、大きな数値の差が認められる。両試料は同一の土壌サンプルから抽出した試料であり、共伴土器は縁帯文土器成立段階の土器である。それにもかかわらず、例えば試料９の２σでは全体でＢＣ2300～2040、試料15ではＢＣ1305～1000年を示し、1000年前後という大きな差が生じている。確かに、試料９だけを取り上げると、交点あるいは２σの値は試料６～８よりもやや新しい傾向を示す点から、両試料間に認められる土器型式の関係と相容れないわけではない。しかし、２σが示す数値域の一部で、異なる土器型式を伴う試料６・７と重複する点はやはり注意しておく必要があろうし、また、試料15の数値を否定する根拠も求められないことは言うまでもない。

試料11～14についてはどうであろうか。同試料は縄文時代後期の河道内に打ち込まれた杭で、使用段階に強い関連性を有する構成材と評価される。そして、同河道内出土の土器は中津式～福田ＫⅡ式が大半である。それに

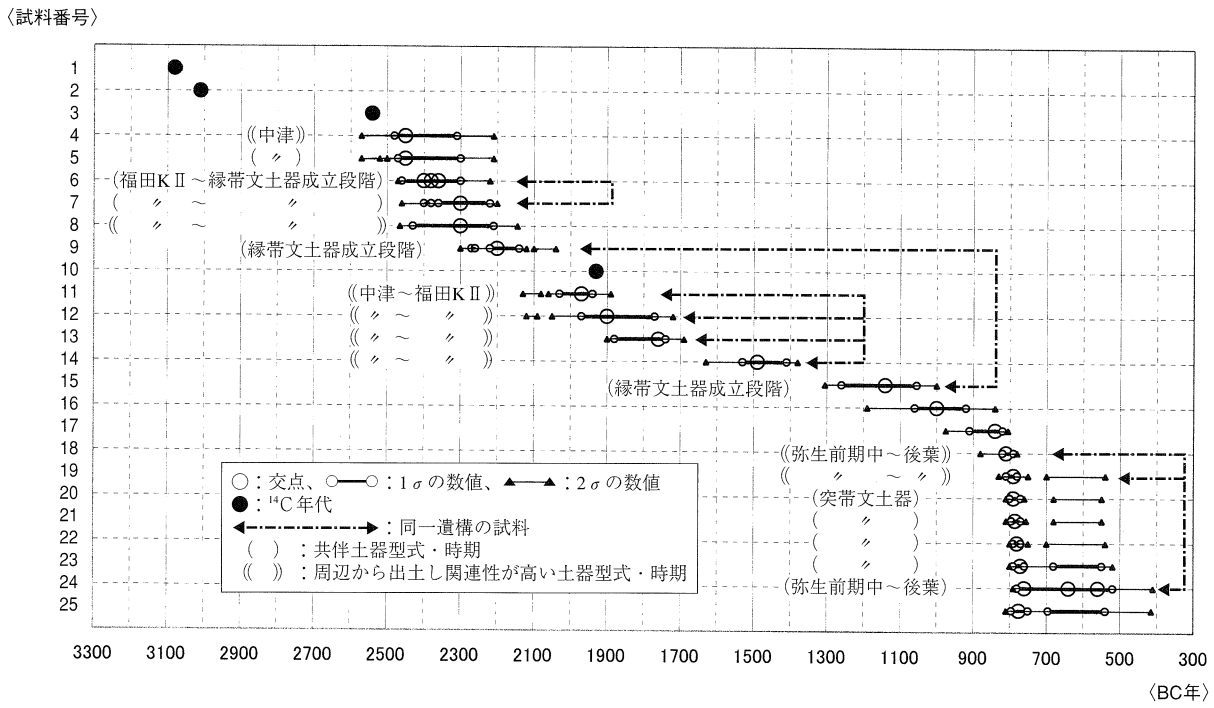


図13　津島岡大遺跡における暦年較正年代

対して、各杭の分析から得られた数値は、交点でＢＣ1970・1900・1760・1490、２σ全体ではＢＣ2130～1890、ＢＣ2120～1720、ＢＣ1900～1690、ＢＣ1630～1380というバラツキを示す上、出土土器の編年観とは大きな開きを見せる。これは、中津式にあたる試料４、同５の数値（交点：ＢＣ2450、2450）あるいは福田ＫⅡ式～縁帯文土器成立段階の試料６～８（交点：Ｂ2400・2380・2360、2300、2300）との比較でも明らかである。

次に、突帯文土器あるいは弥生土器を共伴する試料18・19・20～24を検討しよう。

まず、試料18・19は、前述の試料11～14と同様に、河道内に設けられた堰を構成する部材であり、各部材間の利用時期に大きな差は認めがたい。分析で得られた数値は、試料18と19は交点でＢＣ810とＢＣ790、１σの範囲でＢＣ820～790とＢＣ810～780と、非常に近い数値を示すが、２σ（試料18：ＢＣ880～780、試料19：ＢＣ830～750、700～540）では試料18に古い数値域そして試料19に新しい数値域が現れる。試料19のこの数値を他の試料と比較すると、試料20～23に近似し、試料24ともかなり重複する。

ここで、試料20～24の状況を確認してみよう。試料20・22・23は突帯文土器、試料21は突帯文土器を共伴する堅果類、試料24は弥生時代前期中葉～後葉の土器からの炭化物である。試料20～22の分析数値は交点・１σ・２σ数値に関して非常に近似した値を示す。こうした関係は、試料21を伴う貯蔵穴の直上に試料20・22を含む堆積層が覆う状況や出土土器の特徴が共通するという発掘調査成果と矛盾しない。一方、２σの値を比較すると、試料20～24の上限はすべてＢＣ810～790の中に収まり、下限では試料20～23でＢＣ550・540あるいは520、試料24でＢＣ410となる。つまり、これらの試料に対応する突帯文土器と弥生前期中葉～後葉の土器に関しては、測定値幅の多くの部分で重複することとなり、土器の編年観とは必ずしも一致しない。

再び、試料18・19に立ち返ると、発掘調査からは弥生時代前期中葉あるいは中葉～後葉の土器が同試料に伴う可能性が高いのに対して、２σの数値は、試料24（弥生時代前期中葉～後葉の土器）と重複しつつ、試料20～22（突帯文土器）により近い値を示す結果となっている。このように、試料18・19についても、分析数値と共伴土器の年代観に関して試料20～24と同様の問題が指摘される。

最後に、縄文時代とした試料の中で、共伴土器が認められず時期が不明な遺構の試料１～３・10[(2)]について

は、縄文後期の可能性が報告されている。それに対して、分析数値は試料１・２が縄文時代中期に、試料３・10は同後期にあたる値を示すと考えられるが、これらの分析数値に関しては、^{14}C 年代にとどまっており、その評価については参考資料としておきたい。

ｄ．成果と問題点

各試料に関して考古学的な評価と放射性炭素測定法によって得られた数値との関係を確認すると、両者が一致した方向を示す場合と明らかに矛盾を生じている場合とが存在することがわかる。

縄文時代後期の土器編年については、後期初頭に位置づけられ中津式と併行関係にある称名寺式の年代が2470calBC ころ（2500～2450calBC）とされている(3)点と比較すると、中津式土器を共伴する試料４・５の数値（交点 calBC2450）あるいは、それに続く試料６～８などとの関係は、比較的良好な対応関係を保つと評価できるかもしれない。しかし、実際の年代は数値域の幅の中の一時期にあたることを考慮すると、これらが必ずしも同時性あるいは時期的な差を現しているとは言い難い点は注意しなければならない。また、同一土坑内での上下層での数値の逆転（試料６・７）、同一サンプル内での数値の違い（試料９・15）、あるいは河道内の杭（試料11～14、試料18・19）に認められるような共伴土器との齟齬、突帯文土器と弥生土器の重複（試料20～24）のように、考古学的評価とは異なる数値が同時に存在することも事実である。イレギュラーと感じられる数値に対して、様々な解釈を行うことは可能であろう。しかし、データを取捨選択する明確な根拠を考古学的な解釈から認めることは困難な場合が多い。炭素14年代測定法に対して全く否定するものではないが、実際の遺跡・遺構を評価する場合、分析で得られた数値をどのように解釈するかという点で、慎重であるべきだと考える。

先後関係に関して比較的矛盾を見せない縄文時代後期においても、接近する型式間レベルの問題では、かなりの重複関係を示すこれらの試料を見る限り、数量的な裏付けなしに論じることは危険であることも明らかである。考古学的な十分な検証を踏まえた上で、データの蓄積を進めることが必要であることは言うまでもないだろう。今後、考古学的検証を十分に踏まえた試料を蓄積することによって、こうした分析データを実態に沿ったものへとつなげていくことが重要であり、そうした作業のなかで、暦年代の問題も考えていくこととしたい。

（山本悦世）

なお、試料12・14・16の年代測定には、平成12年度～平成13年度科学研究費補助金（研究代表：山本悦世　基盤研究(C)(2)）〈課題番号12610414〉および平成14年度～平成15年度科学研究費補助金（研究代表：山本悦世　基盤研究(C)(2)）〈課題番号14510427〉の成果の一部を含む。

註（１）石材同定あるいは動物遺体の同定あるいは樹種同定の一部が肉眼同定で行われている。
（２）第７次・８次調査の分析データは1995年の分析である。
（３）小林謙一2004『縄紋社会研究の新視点－炭素14年代測定の利用－』六一書房　106頁

参考文献

中村俊夫2003「放射性炭素年代測定法と暦年代較正」『環境考古学マニュアル』同成社
春成秀爾2004「近畿・中国の実年代」『弥生時代の実年代』同成社
小林謙一2004『縄紋社会研究の新視点－炭素14年代測定の利用－』六一書房

挿図出典

図６～12：津島岡大遺跡の各調査地点の発掘調査報告からの引用、一部加筆
第23次調査以外の発掘調査報告は59頁付表５に掲載
津島岡大遺跡第23次調査：野崎貴博ほか2006『津島岡大遺跡17』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

表３．自然科学的分析一覧

Ａ．年代測定関係

遺跡名	調査次	種　類	点数	分析方法	測定値の報告	本稿掲載試料番号	分析機関・分析者
津島岡大	第３次調査	貯蔵穴内堅果類	1	放射性炭素年代測定	報告19	21	㈱古環境研究所（Beta 社）
津島岡大	第３次調査	貯蔵穴内堅果類	1	放射性炭素年代測定	－		国立歴史民俗博物館
津島岡大	第３次調査	土器付着炭	2	放射性炭素年代測定	本紀要	20・22	㈱古環境研究所（Beta 社）
津島岡大	第３次調査	土器付着炭	1	放射性炭素年代測定	－		国立歴史民俗博物館・㈱古環境研究所(Beta 社)
津島岡大	第５次調査	土器付着炭	1	放射性炭素年代測定	－		国立歴史民俗博物館・㈱古環境研究所(Beta 社)
津島岡大	第７次調査	炉内炭化物	1	放射性炭素年代測定	報告９	1	学習院大学　木越邦彦
津島岡大	第８次調査	土坑内炭化物	3	放射性炭素年代測定	報告８	２・３・10	学習院大学　木越邦彦
津島岡大	第15次調査	貯蔵穴内堅果類	1	放射性炭素年代測定	報告19	８	㈱古環境研究所（Beta 社）
津島岡大	第15次調査	貯蔵穴内堅果類	2	放射性炭素年代測定	－		国立歴史民俗博物館
津島岡大	第15次調査	土器付着炭	2	放射性炭素年代測定	－		国立歴史民俗博物館・㈱古環境研究所(Beta 社)
津島岡大	第17次調査	住居内炉の炭化物	2	放射性炭素年代測定	報告21	９・15	㈱古環境研究所（Beta 社）
津島岡大	第17次調査	土坑内炭化物	2	放射性炭素年代測定	報告21	６・７	㈱古環境研究所（Beta 社）
津島岡大	第22次調査	土壌内炭化物	2	放射性炭素年代測定	報告21	17・25	㈱古環境研究所（Beta 社）
津島岡大	第23次調査	土器付着炭	2	放射性炭素年代測定	報告22	23・24	㈱古環境研究所（Beta 社）
津島岡大	第23次調査	杭	1	放射性炭素年代測定	紀要2001・報告22	12	㈱古環境研究所（Beta 社）
津島岡大	第23次調査	杭・木材	5	放射性炭素年代測定	報告22	11・13・14・18・19	㈱古環境研究所（Beta 社）
津島岡大	第27次調査	炉内炭化材/炭化物	2	放射性炭素年代測定	報告18	４・５	㈱古環境研究所（Beta 社）
津島岡大	第28次調査	杭	1	放射性炭素年代測定	－		㈱古環境研究所（Beta 社）
津島岡大	試掘（T37）	土壌内炭化物	1	放射性炭素年代測定	報告18	16	㈱古環境研究所（Beta 社）
津島岡大	第７次調査	炉内炭化材	1	熱残留磁気測定	報告９		島根大学　時枝克安

Ｂ．植物珪酸体分析

遺跡名	調査次	種類	報告	分析機関、分析者
津島岡大	第２次調査	土壌	報告２	大分短期大学　佐々木章
津島岡大	第５次調査	土器胎土	報告７	宮崎大学　藤原宏志
津島岡大	第17・22次調査	土壌	報告21	（株）古環境研究所
津島岡大	第23次調査	土壌	報告22	（株）古環境研究所
津島岡大	第27次調査	土壌	報告18	（株）古環境研究所
津島岡大	第28次調査	土壌	－	（株）古環境研究所
津島岡大	試掘（T37）	土壌	－	（株）古環境研究所
鹿田	第13次調査	土壌	－	（株）古環境研究所

〈表３の凡例〉
報告：岡山大学構内遺跡発掘調査報告
分析者：分析依頼を行った時点の所属を示す。

Ｃ．花粉分析

遺跡名	調査次	種類	報告	分析機関、分析者
津島岡大	第２次調査	土壌	報告２	岡山理科大学　三好教夫
津島岡大	第６次調査	土壌	報告９	岡山理科大学　三好教夫
津島岡大	第８次調査	土壌	報告８	岡山理科大学　三好教夫
津島岡大	第23次調査	土壌	報告22	（株）古環境研究所
津島岡大	第27次調査	土壌	報告18	（株）古環境研究所
津島岡大	第28次調査	土壌	－	（株）古環境研究所
津島岡大	試掘（T37）	土壌	－	（株）古環境研究所
鹿田	第13次調査	土壌	－	（株）古環境研究所

Ｄ１．植物遺存体１

遺跡名	調査次	試料		分析方法	報告	分析機関・分析者	成果
		遺構・遺物	種類				
鹿田	第１次調査	井戸27	灰	灰像分析	年報12	東京大学　松谷暁子	イネ籾・藁
鹿田	第１次調査	住居19炉	炭化物（灰）	灰像分析	年報12	東京大学　松谷暁子	イネ科
鹿田	第３次調査	井戸２	炭化物（灰）	灰像分析	報告４	東京大学　松谷暁子	イネ籾・藁
鹿田	第５次調査	井戸４	灰	灰像分析	年報12	東京大学　松谷暁子	イネ籾・藁
津島岡大	第７次調査	炉１	炭化物を含む土	灰像分析	年報12	東京大学　松谷暁子	未検出
津島岡大	第３次調査	縄文土器	炭化植物	走査顕微鏡観察	報告５	東京大学　松谷暁子	不明
津島岡大	第５次調査	縄文土器	炭化植物	走査顕微鏡観察	報告７	東京大学　松谷暁子	ユリ科ネギ属（ノビルの断定はできない）

D２．植物遺存体２〈種子〉※正式報告を行ったもののみを掲載

遺跡名	調査次	試料採集遺構	分析方法	報告	分析機関・分析者
鹿田	第３次調査	井戸２	実体顕微鏡観察	報告４	東京大学　松谷暁子
鹿田	第１次調査	井戸１	実体顕微鏡観察	報告３	大阪府立大学　藤下典之
鹿田	第５次調査	土坑15	実体顕微鏡観察	紀要2002	元九州大学　小西猛
鹿田	第１次調査	井戸	実体顕微鏡観察	報告３	元岡山大学　笠原安夫・武田満子
鹿田	第３次調査	井戸	実体顕微鏡観察	報告４	大阪府千代田短期大学　粉川昭平
鹿田	第５次調査	井戸・土坑	実体顕微鏡観察	報告６	大阪府千代田短期大学　粉川昭平
鹿田	第６次調査	井戸	実体顕微鏡観察	年報14	岡山大学　沖陽子
津島岡大	第３次調査	貯蔵穴	実体顕微鏡観察	報告５	大阪府千代田短期大学　粉川昭平
津島岡大	第５次調査	貯蔵穴	実体顕微鏡観察	報告７	岡山大学　沖陽子
津島岡大	第６次調査	貯蔵穴	実体顕微鏡観察	報告９ 年報13	大阪府千代田短期大学　粉川昭平 岡山大学　沖陽子

E．動物遺存体（報告書刊行分）

遺跡名	調査次	試料採集遺構	種　類	報告	分析機関・分析者
鹿田	第１次調査	井戸	骨（ウマ）	報告３	岡山大学　鳥海徹
鹿田	第１次調査	土器棺	歯（ヒト）	報告３	岡山大学　小田嶋悟郎
鹿田	第１・２次調査	井戸	貝	報告３	比治山女子短期大学　稲葉明彦
鹿田	第１次調査	柱穴	歯・骨（ヒト）	－	岡山大学　小田嶋悟郎
鹿田	第３・４次調査	河道	骨（ウシ、イヌ、ニホンジカ）	報告４	奈良国立文化財研究所　松井章
鹿田	第５次調査	井戸	骨	報告６	奈良国立文化財研究所　松井章
鹿田	第５次調査	土壙墓	歯・骨（ヒト）	報告６	岡山大学　小田嶋悟郎
津島岡大	第９次調査	溝	骨（ウシ、ウマ、シカ）	報告14	奈良国立文化財研究所　松井章

F．樹種同定

遺跡名	調査次	分析方法	報　告	分析機関・分析者
鹿田	第１次調査	肉眼観察	報告３（報告６，年報10に再録）	岡山大学　畔柳鎮
鹿田	第２次調査	肉眼観察	報告６（年報10に再録）	岡山大学　畔柳鎮
鹿田	第１次調査	顕微鏡観察	年報10	森林総合研究所　能城修一
鹿田	第２次調査	顕微鏡観察	年報10	森林総合研究所　能城修一
鹿田	第３次調査	顕微鏡観察	報告４（報告６冊，年報10に再録）	森林総合研究所　能城修一
鹿田	第５次調査	顕微鏡観察	報告６（年報10に再録）	森林総合研究所　能城修一
津島岡大	第３次調査	顕微鏡観察	報告５（報告９冊，年報10に再録）	森林総合研究所　能城修一
津島岡大	第５次調査	顕微鏡観察	報告９（年報10に再録）	森林総合研究所　能城修一
津島岡大	第６次調査	顕微鏡観察	報告９（年報10に再録）	森林総合研究所　能城修一
津島岡大	第９次調査	顕微鏡観察	報告14	森林総合研究所　能城修一
津島岡大	第12次調査	顕微鏡観察	報告14（報告16に再録）	森林総合研究所　能城修一
津島岡大	第10次調査	顕微鏡観察	報告16	森林総合研究所　能城修一
津島岡大	第15次調査	顕微鏡観察	報告19	森林総合研究所　能城修一
津島岡大	第17次調査	顕微鏡観察	報告21	森林総合研究所　能城修一
津島岡大	第19次調査	顕微鏡観察	報告17	森林総合研究所　能城修一
津島岡大	第22次調査	顕微鏡観察	報告21	森林総合研究所　能城修一
津島岡大	第26次調査	顕微鏡観察	報告20	森林総合研究所　能城修一
津島岡大	第27次調査	顕微鏡観察	報告18	（株）古環境研究所

G．その他

遺跡名	調査次	試料の種類	目的・方法	報告	分析機関・分析者
津島岡大	第19次調査	土壌	粒度組成分析	報告17	岡山大学　鈴木茂之
津島岡大	第19次調査	土器胎土（縄文）	粒度組成分析	報告７	帝京大学　川西学
福呂	第１次調査	黒曜石・安山岩	石器産地同定	報告15	岡山理科大学　白石純
鹿田	第１次調査	ガラス滓	成分分析	報告３	東京国立文化財研究所　三浦定俊 株式会社ニコン　苅谷道郎
鹿田	第１次調査	土壌中の赤色顔料	成分分析（ベンガラ）	報告３	岡山大学　逸見千代子
津島岡大	第12次調査	棒火矢	火薬成分分析	紀要2003	岡山大学　松田敏彦
津島岡大	第12次調査	棒火矢	金属・定量分析	報告16	岡山大学　柴田次夫
津島岡大	第10次調査	鉄滓	成分分析	紀要2003	川鉄テクノリサーチ
津島岡大	第19次調査	鉄滓	成分分析	紀要2003	川鉄テクノリサーチ
津島岡大	第28次調査	土壌（黒色土）	成分分析	紀要2003	岡山理科大学　白石純
鹿田	第12次調査	漆塗り椀	漆分析	－	㈶元興寺文化財研究所
津島岡大	第５次調査	漆塗り竪櫛	赤色顔料成分分析（辰砂）	年報11	㈶京都埋蔵文化財研究所　岡田文男
津島岡大	第５次調査	赤色顔料塗布耳栓	赤色顔料成分分析（水銀朱）	報告５	徳島県立博物館　魚島純一

第２章　鹿田遺跡の調査研究

第１節　調査の概要

本年度は１件の発掘調査と、試掘・確認調査２件、立会調査７件を実施した（図19・表４）。発掘調査・試掘・確認調査は、医学部附属病院立体駐車場の新営に伴うものであり、一括して報告を行うこととする。また立会調査のうち、医病構内支障ガス管配管替工事に伴う調査（調査３）と医病構内支障給水管配管替工事に伴う調査（調査５）についても、その位置が第16次調査地点と近接し基本的な層序も一致することから、下記にあわせて報告している。その他の調査（調査２・４・６・７）はいずれも近代～近世土層で掘削が終了したものである。

また鹿田遺跡周辺の調査として、調査８を次節に掲載している。

１．鹿田遺跡第16次調査（立体駐車場エレベーター設置：鹿田ＡＨ～ＡＩ６・７区、ＡＦ12・13区、ＡＮ～ＡＯ４区）

ａ．調査の成果

本調査地点は鹿田地区のほぼ北東隅にあたる。今回の調査では、近世～近代の畦畔や畝、中世の土坑、弥生～古墳時代後期頃と考えられる河道などを確認した。これまで鹿田地区の北東部分は、発掘調査が行なわれていなかったため状況が不明確であったが、周辺地形の変遷状況を概観できるようになった。

調査期間：2004（平成16）年10月21日～11月８日
調査地点と面積：３ヶ所、総面積：49.15m^2
発掘調査地点１ヶ所：40.15m^2、エレベーターピット範囲（鹿田ＡＨ～ＡＩ６・７区）
試掘・確認調査地点２ヶ所：５m^2（第１地点　ＡＦ12・13区）、４m^2（第２地点　ＡＮ～ＡＯ4区）
調査担当：高田貫太
主な遺構：近世～近代の畦畔・畝・溝・土坑１基、中世の土坑１基

ｂ．調査の経過

岡山大学鹿田地区では、2004年度に立体駐車場を新営することとなり、そこにエレベーターが設置されることとなった。エレベーター設置には、7.1m×5.1m の範囲を現地表面から2.65m の深さで掘削する必要があり、エレベーターピット範囲について発掘調査を実施することとなった。また、歯学部棟の北東に隣接する立体駐車場新営予定地とその周辺は、これまで発掘調査が行なわれておらず、近世～弥生時代の状況が不明確であったため、発掘調査に先立ち、２ヶ所において試掘調査を実施することとした。

エレベーターピット範囲の発掘調査の実施に先立ち、10月21、22日そして25日に試掘・確認調査を実施した。発掘調査は10月27日から開始し、近世～近代、中世の遺構面、弥生～古墳時代後期の自然河道を調査したうえで、11月８日に終了した。

また、試掘・確認・発掘調査と併行してガス管・水道管の切換に伴う立会調査も行なっている（表４　調査３・５）。基本的な層序は一致し、遺跡形成を考えるうえで重要であり、ここでは２ヶ所の立会調査地点もあわせて、調査成果を報告することにする。

c．調査の概要

① 位置（図14）

本調査地点は岡山大学鹿田地区の北東隅にあたる。調査開始前は駐車場として利用されていた。西側には医学部附属病院正門があり、南西側に歯学部棟が建つ。

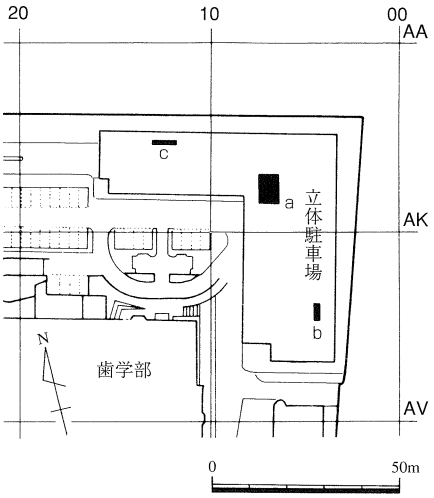
② 層序（図15）

土層の説明、対応関係は発掘調査地点のものを基準とした。

1層：大正時代から現代までの造成土である。現地表面から約0.8～1m下位まで堆積している。現地表面の標高は、約2.5～2.8mである。

2層：橙灰褐色粘質土である。灰色粘土ブロックを多く含み、近代に形成された土層である。

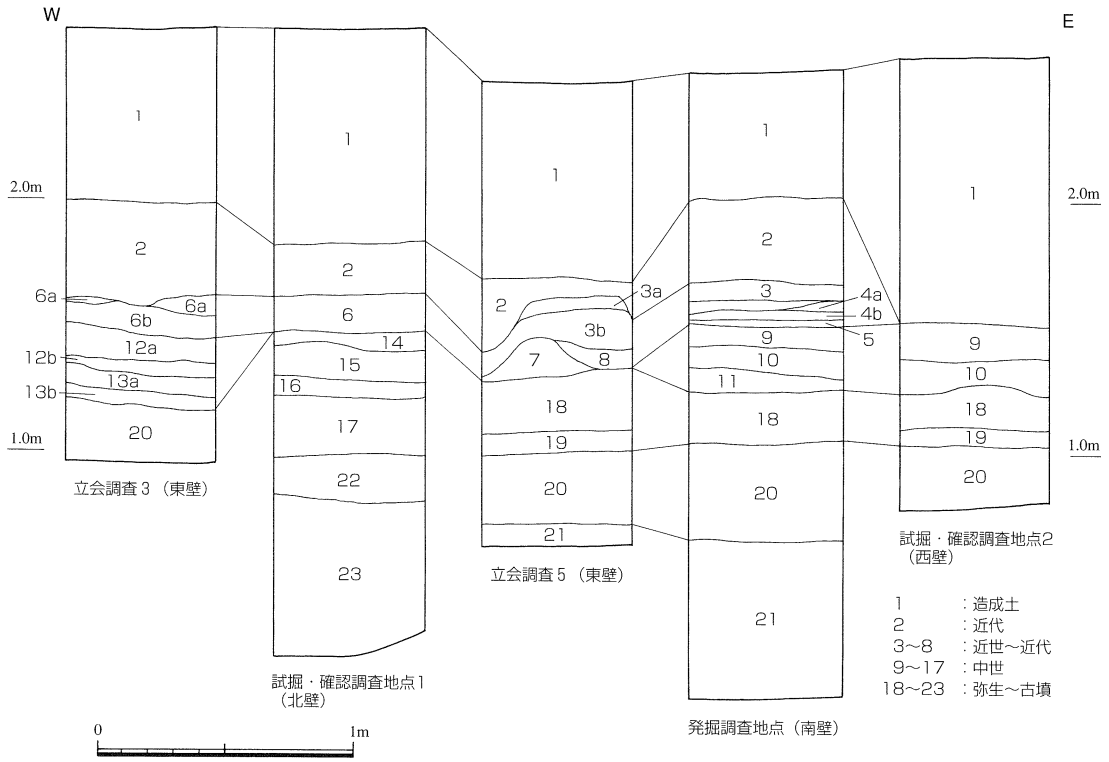
3層：淡青灰色粘質土で、近世～近代の耕作土である。色調によって細分も可能である。鉄分、マンガンを多く含み、下層には鉄分の沈着が認められる。発掘調査地点において、畦畔・畝とそれに伴う溝を確認した。



a．発掘調査地点（エレベーターピット範囲）
b．試掘・確認調査地点１
c．試掘・確認調査地点２

図14　第16次調査地点位置図

4層：茶灰色粘質土で、色調から上下２層に区分できる。鉄分、マンガンを多く含み、下層には鉄分の沈着が確



1．造成土　2．橙灰褐色粘質土（Fe・Mn）　3a．淡青灰色粘質土（Fe・Mn）　3b．暗青灰色粘質土　4a．茶灰色粘質土　4b．暗茶灰色粘質土
5．黄茶褐色砂質土　6a．灰褐色粘質土層（Fe・Mn）　6b．灰褐色粘質土（Fe多い・Mn）　7．茶褐色砂質土　8．灰褐色砂質土
9．灰褐色粘質土（Fe・Mn多い）　10．橙茶褐色砂質土（炭化物）　11．暗茶褐色砂質土（炭化物）　12a．淡橙褐色砂質土（Fe・Mn多い）
12b．橙褐色砂質土（Fe・Mn多い）　13a．橙褐色砂質土　13b．橙黄褐色砂質土　14．橙褐色粘質土　15．橙茶褐色粘質土　16．茶灰褐色粘質土
17．橙茶褐色粘質土　18．茶褐色砂質土　19．茶褐色砂質土　20．淡黄灰色粗砂　21．淡灰色細砂　22．灰褐色粘質土　23．暗青灰色粘質土

図15　第16次調査地点土層柱状図（縮尺１/30）

認できる。４ａ層は茶灰褐色で、発掘調査区ではその上面において不定形なたわみと土坑１基を確認した。４ｂ層は暗茶灰色粘質土である。近世の耕作土である。

５層：黄茶褐色砂質土で、発掘調査区で部分的に確認された土層で、砂質度が強い。４層が形成される以前に洪水などの要因によって短期間で堆積した土層と考えられる。

６層：灰褐色粘質土である。６ｂは６ａに比べて茶色砂が混じる。鉄分、マンガンを多く含み、近世の耕作土と考えられる。立会調査３地点では、畦畔状の高まりを確認している。

７層：茶褐色砂質土である。立会調査５地点で確認した畦畔状の高まりを形成する土層である。鉄分、マンガンを含む。

８層：灰褐色砂質土である。鉄分を多く含み、近世の耕作土と考えられる。

９層：橙茶灰色粘質土層である。鉄分、マンガンを多く含む。中世土器片がまばらに出土しており、中世の耕作土と考えられる。

10層：橙茶褐色砂質土である。鉄分、マンガンを多く含む。中世土器片がまばらに出土している。中世の耕作土と考えられる。

11層：暗茶褐色砂質土である。中世土器片を含む。発掘調査地点では上面で土坑１基を確認している。中世の堆積層であるが、中世土器片がまばらに出土し、鉄分、マンガンを多く含むことから、耕作土として利用されていた可能性が高い。

12層：淡橙褐色砂質土層である。鉄分、マンガンを多く含む。色調により上下２層に区分できる。12ｂ層は12ａ層に比べて鉄分の沈着のためか黄色味が強い。立会調査３地点で、畦畔状の高まりを確認しており、中世段階の耕作土と判断される。

13層：橙褐色砂質土である。鉄分、マンガンを含む。色調により上下２層に区分でき、13ｂは13ａに比べて鉄分の沈着のためか黄色味が強い。中世段階の耕作土と判断される。

14～17層：橙茶褐色の色調を示す土層である。試掘地点１においてのみ確認される層序であるが、他地点における同じレベルの土層に比べて粘質が強く、鉄分やマンガンをあまり含まない。また、16・17層はそれぞれ色調によって上下２層に区分することも可能である。いずれも下層の黄色味が強い。遺物は出土していない。

18・19層：いずれも茶褐色砂質土で、18層がやや暗い色調である。砂質感が強い。中世の耕作土（９～13層）が形成される以前の自然河道による堆積層と考えられる。

20・21層：粗砂あるいは細砂である。上面のレベルは、標高1.0～1.2m を測る。発掘調査区では、標高30cm まで調査を行った。その後、重機によってさらに掘削し、標高約0.1m で湧水地点を確認した。弥生～古墳時代後期の土器が比較的豊富に出土し、また流木も検出された。自然河道による堆積層である。

22層：明灰色粘質土である。試掘・確認調査地点１でのみ確認された土層である。粘質が非常に強く、鉄分、マンガンを含む。

23層：明青灰色粘質土である。試掘・確認調査地点１でのみ確認された土層である。上面のレベルは標高0.8m である。この層の掘削の結果、標高0.2m で湧水地点を確認し、そこでは流木も検出された。

③　遺構・遺物

発掘調査地点において、近世～近代、中世の遺構面を確認した。

〈近世～近代〉（図16・17）

３層上面で、調査区南半分で畦畔とそれに伴う溝、北半分で畝を検出した。畦畔は東西方向にのびる１条（幅1.9m）とそこから南北にのびる１条（幅１m）を検出した。削平により高さ３cm 程が残存している。畝は３条確認し、幅1.2～1.4m 程である。

４層上面で、たわみと土坑１基を検出した。たわみは不定形ではあるが、検出範囲の北半部では畦畔状の高ま

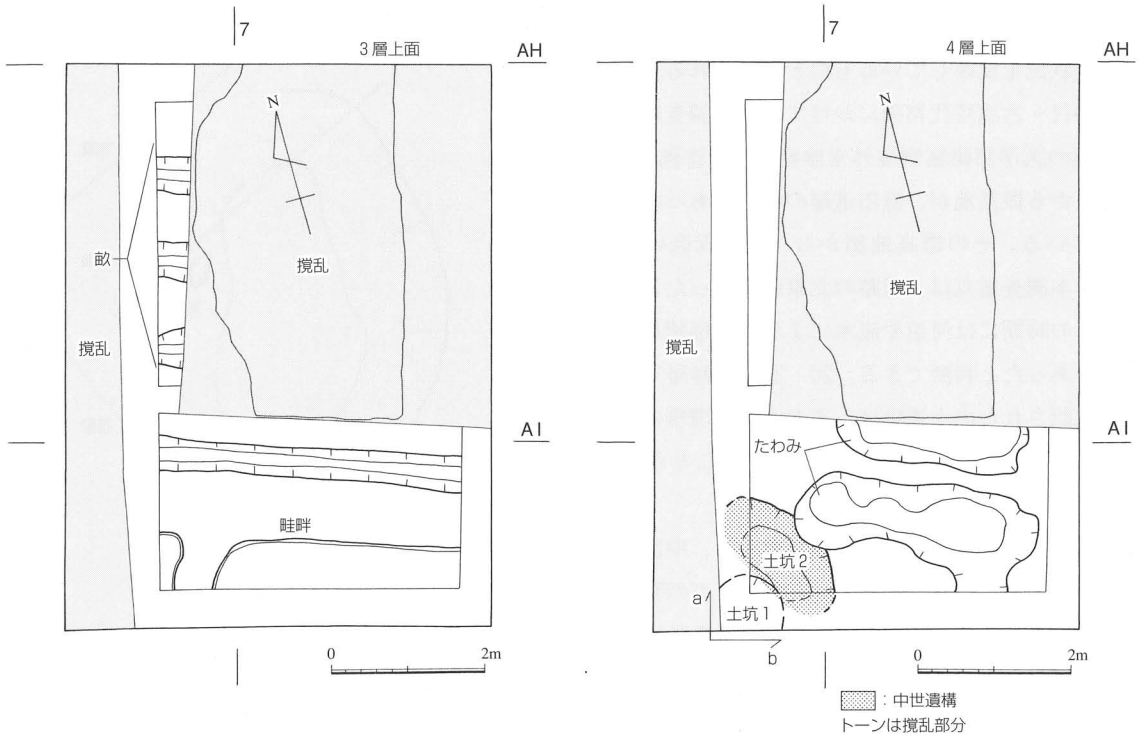


図16　近世～近代遺構平面図（縮尺１/100）

り部分が確認できる点や４層に鉄分やマンガンが多く含まれる点、たわみの落ち込み部分の埋土が灰褐色粘質土で鉄分やマンガンを含む点などから耕作に関連するものと考えている。土坑は調査区南西隅の側溝壁面で確認した（図17）。平面形状は不明であるが、断面形状から、径130～140cm程の円もしくは楕円形を呈するものと推定される。深さ67cmで、底面は砂層（20層）に達する。埋土は灰色粘土ブロックを多く含み、砂質度が強い。

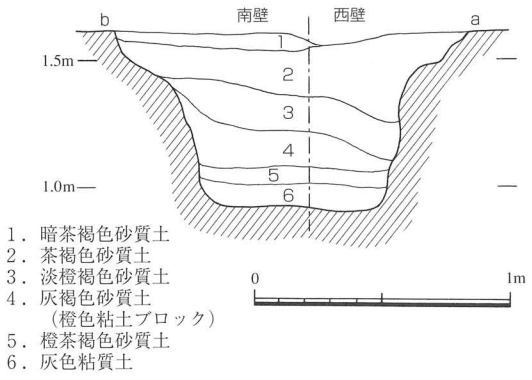


図17　土坑１断面図（縮尺１/30）

〈中　世〉（図18）

11層上面で土坑１基を検出した。土坑２は調査区南西隅の側溝付近で確認され、長径190cm、短径116cmの平面楕円形を呈し、残存深さは23cmである。底面で拳大の割石１点が確認された。埋土はほぼ水平な堆積で砂質度が強い。埋土中から中世土器片が出土している。

④　鹿田地区北東部の地形の変遷について

今回の調査によって、鹿田遺跡の北東限周辺の環境をある程度概観できるようになった。以下、その概要を記す。まず、弥生～古墳時代後期頃には自然河道が通っていたと考えられる。河道による堆積層と判断される20・21層（砂層）が調査地点周辺の広範囲に広がる状況が明らかとなった。このような状況は、本調査地点から50m程西へ位置する正面玄関前の駐車場付近における試掘調査（1985年度）においても確認されている[(1)]。この点を考慮すると、発掘調査地点付近では、河道は大きく見て東西方向に流れていた可能性がある。

一方で、試掘・確認調査地点１周辺の当時の状況はやや異なる。他地点で確認された20・21層のような砂層が確認されず、代わりにそれと同様のレベルで青灰色の粘質土層（22・23層）が確認された点、14～17層のような粘質が非常に強い層が厚く堆積している点などを考慮すると、試掘・確認調査地点１の周辺は弥生時代から中世

まで低湿地のような状態であったことが想定でき、河岸付近の状況を反映しているものと判断される。

弥生時代～古墳時代初頭にかけては、本調査地点より南西側の医学部附属病院外来診療棟[2]や管理棟[3]の周辺に広がる微高地が、鹿田遺跡の中心であったと考えられている。その微高地部から、１ｍ程低い位置に当たる本調査地点は、遺跡の北東限であったと判断され、この時期には河道や流水による砂の堆積が著しい環境であったと判断できる。20・21層（砂層）の下半部で確認された出土遺物は、そのような環境の中で流れ込んだものであった可能性を考えることができる。

その後、河道による土砂の堆積が進行し、中世に比定される10・11・13層の段階で耕作地としての利用が本格的に開始されたものと判断される。外来診療棟や管理棟の周辺に広がる微高地には中世においても集落が形成されており、そのような生活域に対応する耕作域が本調査地点周辺に広がっていた可能性が高い。以後、近世～近代においても基本的には耕作地としての利用が継続したようである。３層上面では、畦畔と畝があわせて検出されたが、当時の二毛作の状況を反映しているとも評価できよう。　　（高田貫太）

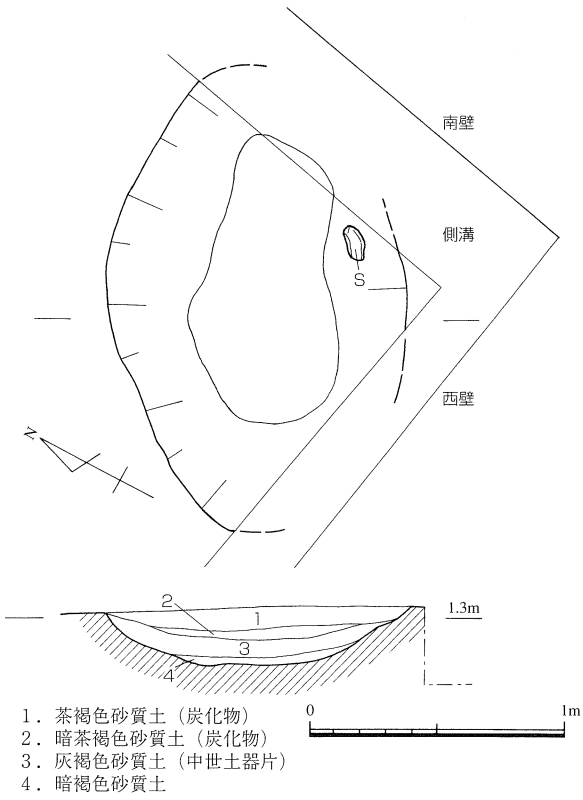


図18　土坑２平・断面図（縮尺１/30）

註（１）山本悦世1987「医学部附属病院基幹環境整備工事に先立つ範囲確認調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』３　1985年度　岡山大学埋蔵文化財調査室　14～15頁
（２）吉留秀敏・山本悦世編1988『鹿田遺跡Ⅰ』　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第３冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
（３）松木武彦・山本悦世編1993『鹿田遺跡３』　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第６冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

表４　2004年度鹿田地区調査一覧

番号	種類	構内座標	所属	調　査　名　称	調査期間	掘削深度（GL-m）	内　　容
1	発掘	AH～AI６・７ AF12・13、 AN～AO４	医病	立体駐車場新営工事（エレベーターピット）	10.21～11.8	2.5m	調査面積49.15m²（発掘調査地点１、試掘調査地点２）近世～近代の畦畔・溝・畝・土坑、中世の土坑、弥生～古墳の河道〈鹿田遺跡第16次調査〉
2	立会	DG・DH31 DH33・34	医・歯病	職員集会所撤去並びに南庭樹木抜根作業	9.9	0.6～1.2m	近代層確認（GL－1.2m）
3	立会	AF16、AF～AJ17 AJ９～16	医病	医病構内支障ガス管配管替工事	10.21～ 10.25	1.0～1.9m	接続部で近世～近代の水田層、中世の畦畔を確認。また、弥生～古墳の河道と推定される砂層を確認した箇所あり。
4	立会	CY26・27、CZ26	医	保健学科棟西側排水管取替工事	10.22	1.15m	造成土内
5	立会	AE４～16 AF～AI16 AI９～15 AJ～AO09	医病	医病構内支障給水管配管替工事	10.27～ 11.8・19	0.9～1.9m	桝で中世？～近代の畦畔確認。また、弥生～古墳の河道と推定される砂層を確認した箇所あり。
6	立会	BX12、BZ・CA12 CC12、CI12、CI10 CL10・11	医病	病棟Ⅱ期新営工事（パネルゲート・電柱設営）	05.3.1・2	0.8～0.9m	造成土内、電柱部分では近代層確認
7	立会	CO13・14	医病	病棟Ⅱ期新営工事に伴う移設工事（PL鋼管など）	5.3.14	1.5～1.7m	近世～近代層確認（GL－1.5m）

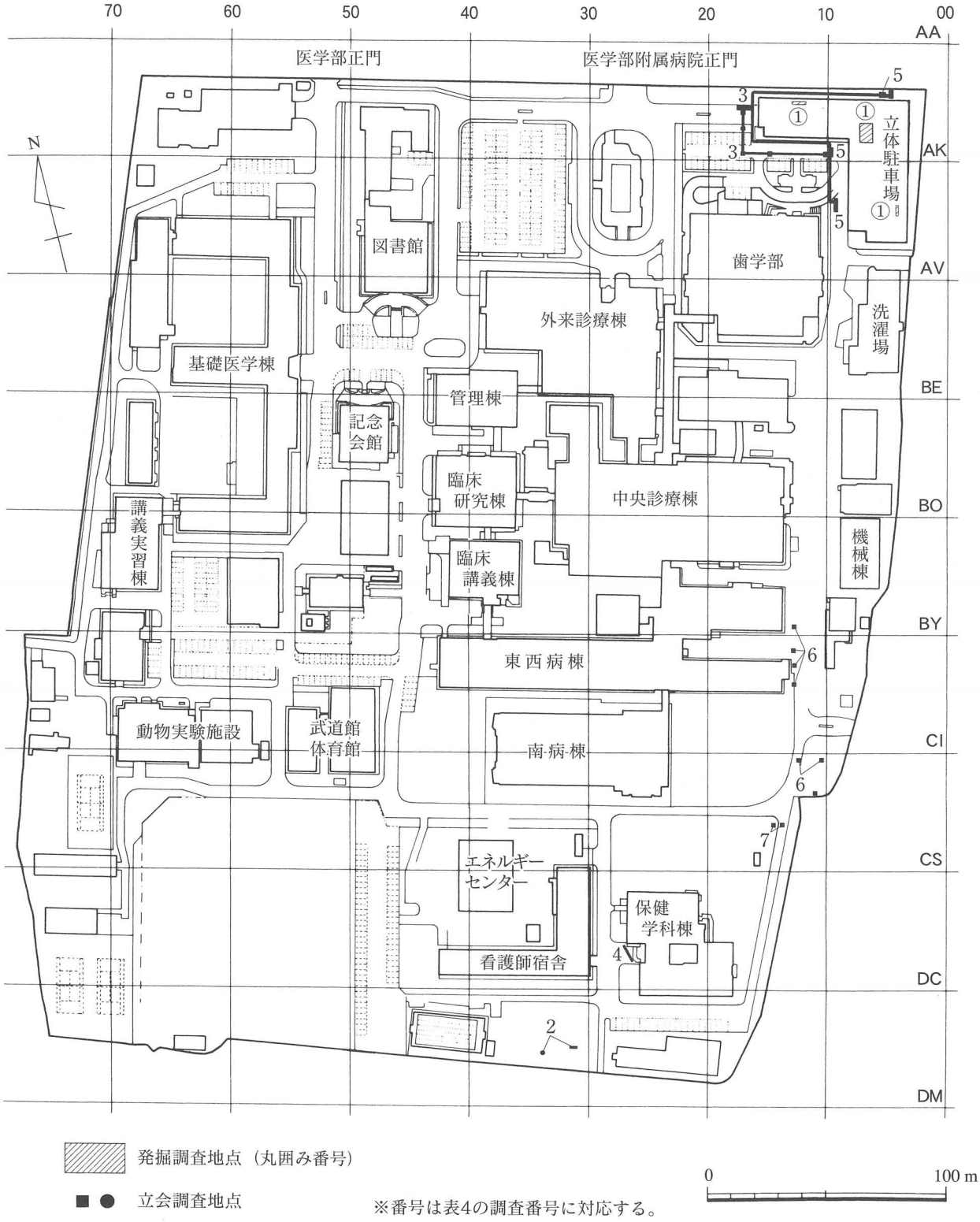


図19　2004年度の調査地点【２】ー鹿田地区ー（縮尺１/2500）

第２節　鹿田遺跡周辺の調査

2005年２月に、岡山大学が岡山市大供に所有する土地を民間に貸与して「岡山画像診断センター」を設置することとなった。対象地に対して岡山市教育委員会が試掘・確認調査を実施した。調査地点は、鹿田遺跡の北西約0.3kmにあたる（図20）。鹿田遺跡の旧地形を考える上でも有益な情報が得られており、岡山市教育委員会より図面・所見の提供を受け、ここに掲載した。

試掘・確認調査は新営予定地内の南北二箇所に試掘坑を設け、深さ2.2～2.3mまで掘削し、堆積状況を確認した（図21）。

岡山市教育委員会の調査所見では造成土以下、近代～古代相当と考えられる耕作土の堆積が認められ、両試掘坑ともに、GL－2.05mより下位は、低湿地堆積層と考えられる白色砂をラミナ状に含む灰色シルト層に達した。以上の結果より、本地点では埋蔵文化財包蔵層は認められず、試掘坑２からごく少量の土器片の出土がみられることから、古代以降は集落に近接した水田のひろがる地域、それ以前は低湿地や河道跡の状況と考えられている。

（岩崎）

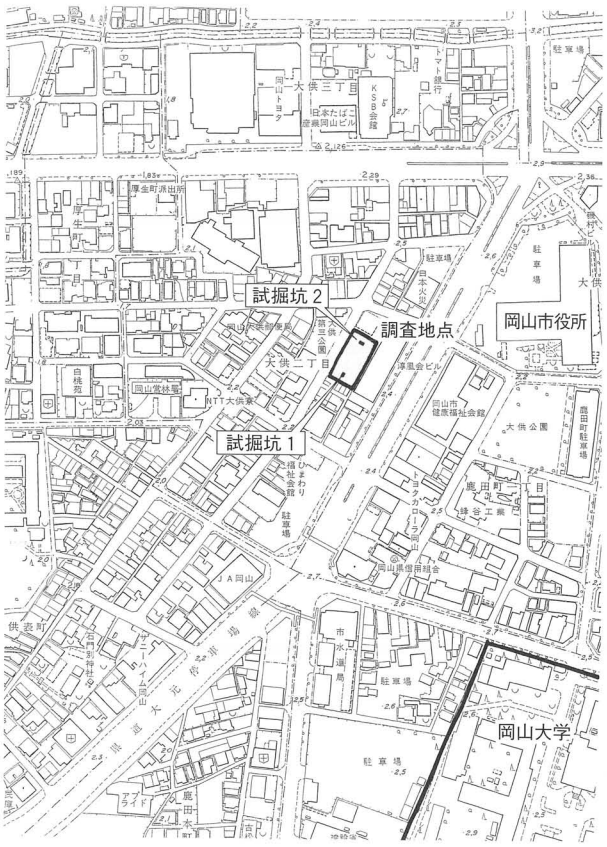


図20　調査８位置図（縮尺１/6250）

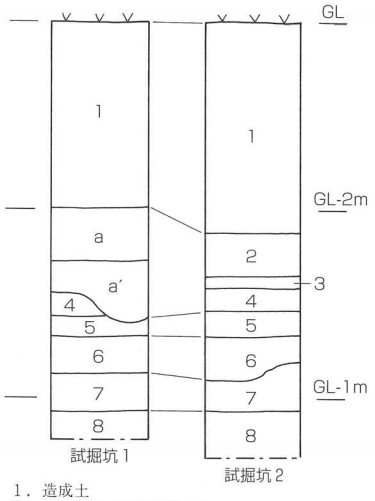


図21　調査８土層柱状図（岡山市教委提供）（縮尺１/40）

表５　2004年度鹿田遺跡周辺調査一覧

番号	種類	調査主体	調　査　名　称	調査期間	掘削深度（GL-m）	内　　容
8	試掘・確認	岡山市教育委員会	岡山画像診断センター新営に伴う試掘・確認調査	05.2.14	2.2～2.3m	造成土以下、近代～古代相当の耕作土の堆積状況を確認。

第３節　鹿田遺跡の研究

１．鹿田遺跡第５次調査出土の井戸枠材に関する再検討－焼印と木材の規格－

ａ．はじめに

今回再検討する井戸枠材は、1987・88年度に発掘調査がなされた鹿田遺跡第５次調査（管理棟）において発見されたものである。この井戸は、すでに刊行がなされた報告書において、「井戸６」として報告がなされている（松木・山本編1993、以下『報告』と略す）。井戸６は、３段（上段・中段・下段）の横桟を有する縦板組構造の井戸である（図23）。近代の建物基礎の下から検出されたため、調査には困難を伴ったが、井戸の底面中央部からウシの頭骨が、四隅からは土師器皿が出土し、当時の井戸祭祀を考える上で注目すべき遺構となった。出土土器から、井戸の時期は12世紀代～13世紀初頭という年代が与えられている（図22）。一方『報告』においては、遺存状態の良好な中段・下段の横桟と、両者の間に設置された支木４点の実測図が示されたのみであり、紙幅等の関係から縦板の詳細を含めた枠木材の全体像については言及がなされていなかった。

さて、2005年度の展示会開催のために本井戸の枠木を取り出した際、縦板に焼印が２点の縦板と支木１点に、合計３箇所存在することが新たに判明した。近年、榑（くれ）と呼ばれる建築素材の規格品と、それに付された焼印に関する研究が、岡田文男と鐘方正樹によって進展している（岡田2002・2004、鐘方2003）。岡田と鐘方は、見解の相違もみられるが、刻印や焼印が生産・流通時に付与された属性であることを詳細に論じている。また岡田は、実際の長岡京から出土した井戸枠材の接合作業の結果、長さ376cm（約１丈２尺）、幅16cm、（５寸）、厚さ12cm（４寸）の原材を復元し、それが文献に記載された榑に相当することを論証した。実際に、今回報告する縦板についても、板どうしが接合する状況を確認することができた。

本論では、保存処理による幾分の変形も予想されるが、未発表であった枠木や焼印に関する実測図と観察結果について報告する。そして、鹿田遺跡における材木の生産・流通の具体相を探るための基礎的研究を提示したい。

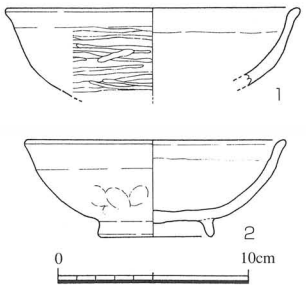


図22　井戸６出土土器（縮尺１/４）

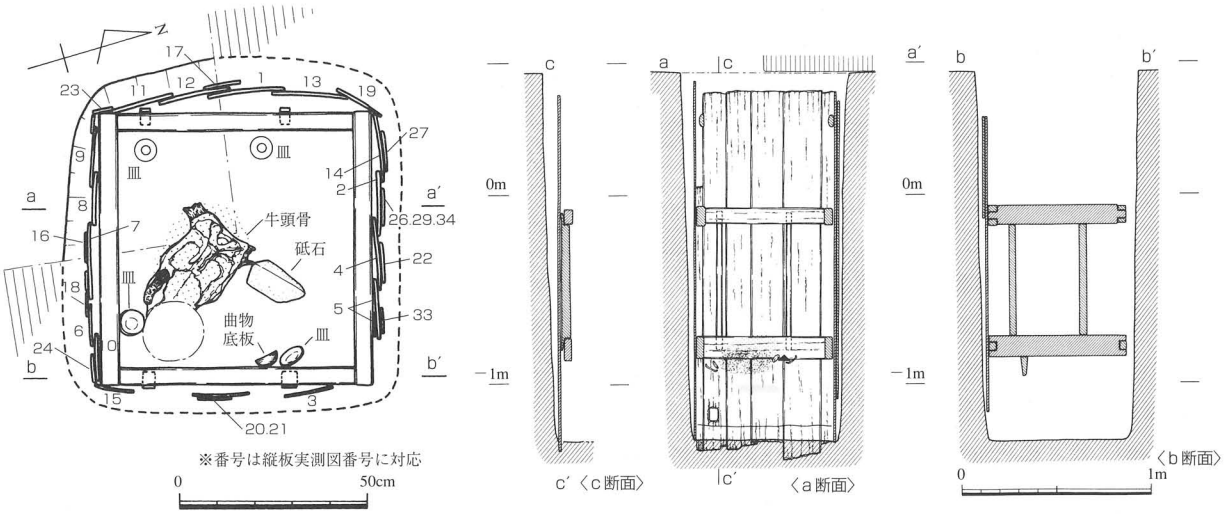


図23　井戸６平面図（縮尺１/20）・断面図（縮尺１/40）

ｂ．井戸枠木材に関する検討

①　縦板（図24～28、30～33）

縦板は38点出土している。そのうち、小片を除く34点について図化した。実測図は木裏面を図化し、材の天地は井戸構築時の設置状態を基準とした。

縦板はいずれも割り裂き材である。縦板の分類と接合作業の結果、ａ～ｅ類という５組の接合材を確認した。接合関係の認められない材については、幅が狭く下端部付近に穿孔を有する一群をまず抽出することができる。残りの穿孔を有さない縦板は、幅広の大型のものから幅の狭い小型のものまでバリエーションが認められる。

ｉ）接合材（図24～26－Ｗ１～12、表６）

接合材ｂ～ｅ類は、下端部の加工痕（筏穴を含む）が一致することで接合が判明したものである。したがって、これらの加工は原材の割り裂き前に施された属性といえる。接合材は、木表幅が15～18cm（５～６寸）となることや、割り裂き材であること、焼印を有するものがあることから、樽に該当するものと考えられる。

ａ類（図24－Ｗ１・２）　２枚の材が接合した。Ｗ１は木口面が平滑となる。Ｗ２は、割り裂きが元の材の木口まで到達することなく、剥ぎ取られたものである。

ｂ類（図24－Ｗ３～５）　３枚の材が接合した。木口が木裏から木表にかけて斜めに切断されているため、下端の長さは木表側の板ほど短くなっている。下端部両側には加工が施される。両側とも３単位の加工を基本とする(1)。また、中央付近の右長側面（下端を基点としてみた方向、以下同様）には、何かが押し当てられた際に付いたと思われる、幅2.4～4.3cmの窪み状の痕跡が認められる（図32－６）。この痕跡は、接合した状況で３枚の板にまたがって認められることから、割り裂き前に形成されたものといえる。原材を縄で縛った際等に付いた痕跡の可能性がある。この痕跡は反対側の長側面にはみられない。

ｃ類（図25－Ｗ６・７）　２枚の材が接合した。下端部右側に４つの単位の加工が施される。加工には材の長軸に対して斜め急角度となるものと、ほぼ平行する方向のものがあり、Ｗ７では両者の交点に幅2.8cmの抉りが残る。抉りの存在から、次のｄ類も同様であるが、この下端部加工は運搬に関連するものと考えられる。

ｄ類（図25－Ｗ８～10）　３枚の材が接合した。下端部右側には、５つの単位の加工が施される。その平面的形状はｃ類に類似する。長軸に対し斜め方向と平行になされる加工の交点には、幅2.3cmの抉りが作られる。この接合材のみに認められる特徴として、いずれの板も割り裂き後に、下端部の木裏面にハツリがなされることが挙げられる。これは、井戸構築時に縦板を地中に突き刺すことを容易にするための加工と考えられる。

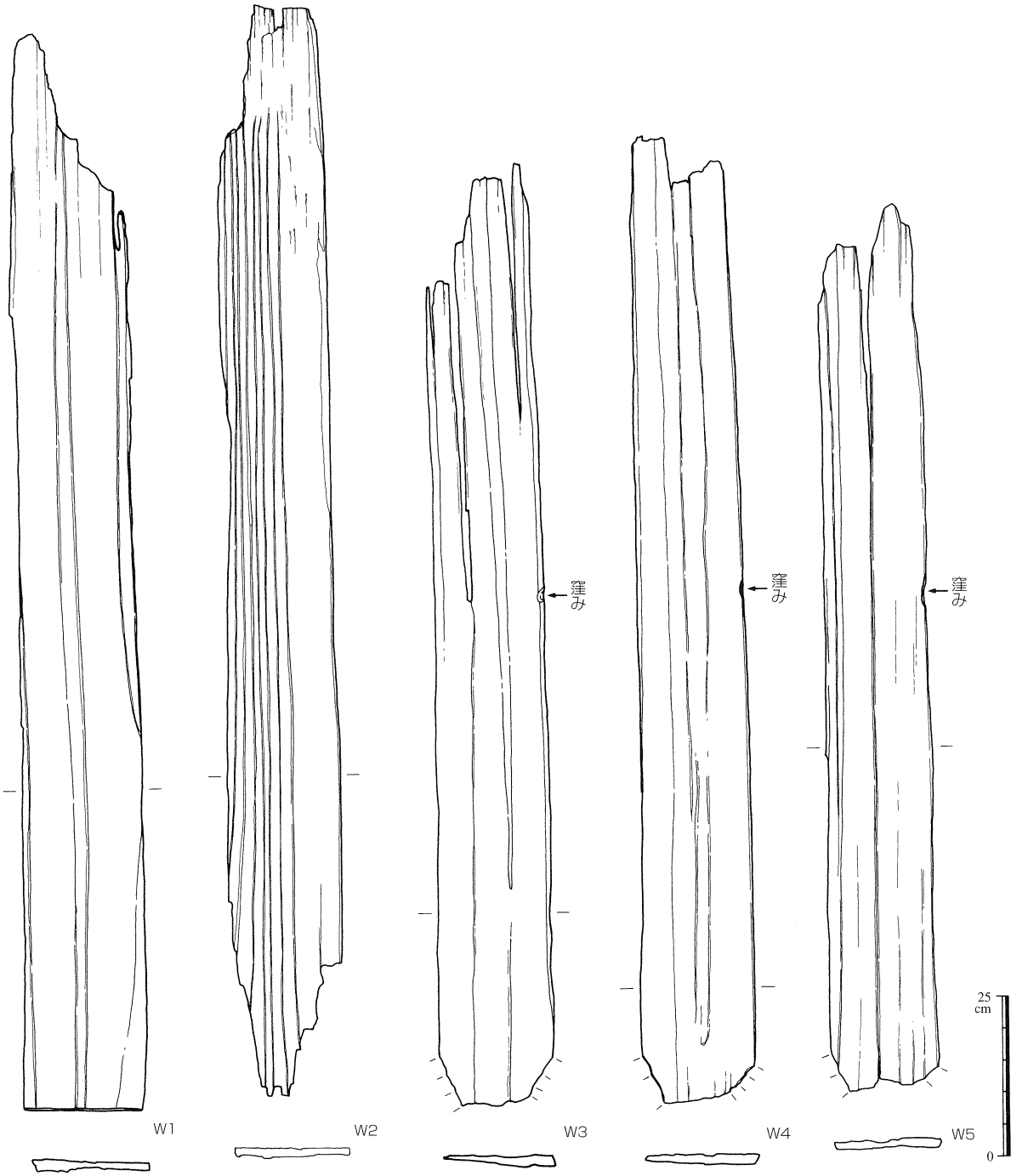
ｅ類（図26－Ｗ11・12）　２枚の材が接合した。筏穴を有すること、最も全長の長い接合材であること、焼印を有することを特徴とする。筏穴は一段目の板から下段にかけて、材の木裏面に対して垂直ではなく斜めに工具が入れられている。Ｗ11には、下端部付近の木裏に一箇所の焼印が施されている。

表６　接合材の法量

接合材	接合枚数	現存長(cm)	木表幅(cm)	木裏幅(cm)	最大厚(cm)	樹　種	特　　徴
a	2	174.0	17.9	18.4	3.2	スギ	下端部加工なし、木口平滑
b	3	150.8	16.8	16.5	4.7	スギ	下端部の両側縁を加工
c	2	169.7	16.0	15.5	2.6	スギ	下端部の右側面を加工
d	3	168.5	15.0	12.4	4.2	スギ	下端部の右側面を加工
e	2	187.4	18.0	14.9	4.1	スギ	筏穴、木裏に焼印１箇所

ii）その他の縦板（図26～28－Ｗ13～34）

穿孔を有さない縦板（図26～28－Ｗ13～25、33・34）　形状・規模については、上記の接合材と同規模のものから、小型のものまで多様である。Ｗ13は、下端部に加工が施され、かつ木裏に焼印を有する縦板である。下端部は、両長側面に抉りが作られ、木口の両隅も長軸に対して斜めに加工されている。特に左側の抉りにおいて明瞭であるが、抉りの内部にさらに幅1.2cmの抉りが作られている。抉りは縄をくくりつけるためのものであろう。抉りよりも下位の木裏には、直線で長軸に直交ないしは斜交する傷状の痕跡が約10箇所みられるが、これがどのような意味をもつかは判然としない。中央付近の右長側面には、ｂ類接合材と類似した幅3.5cmの半円状

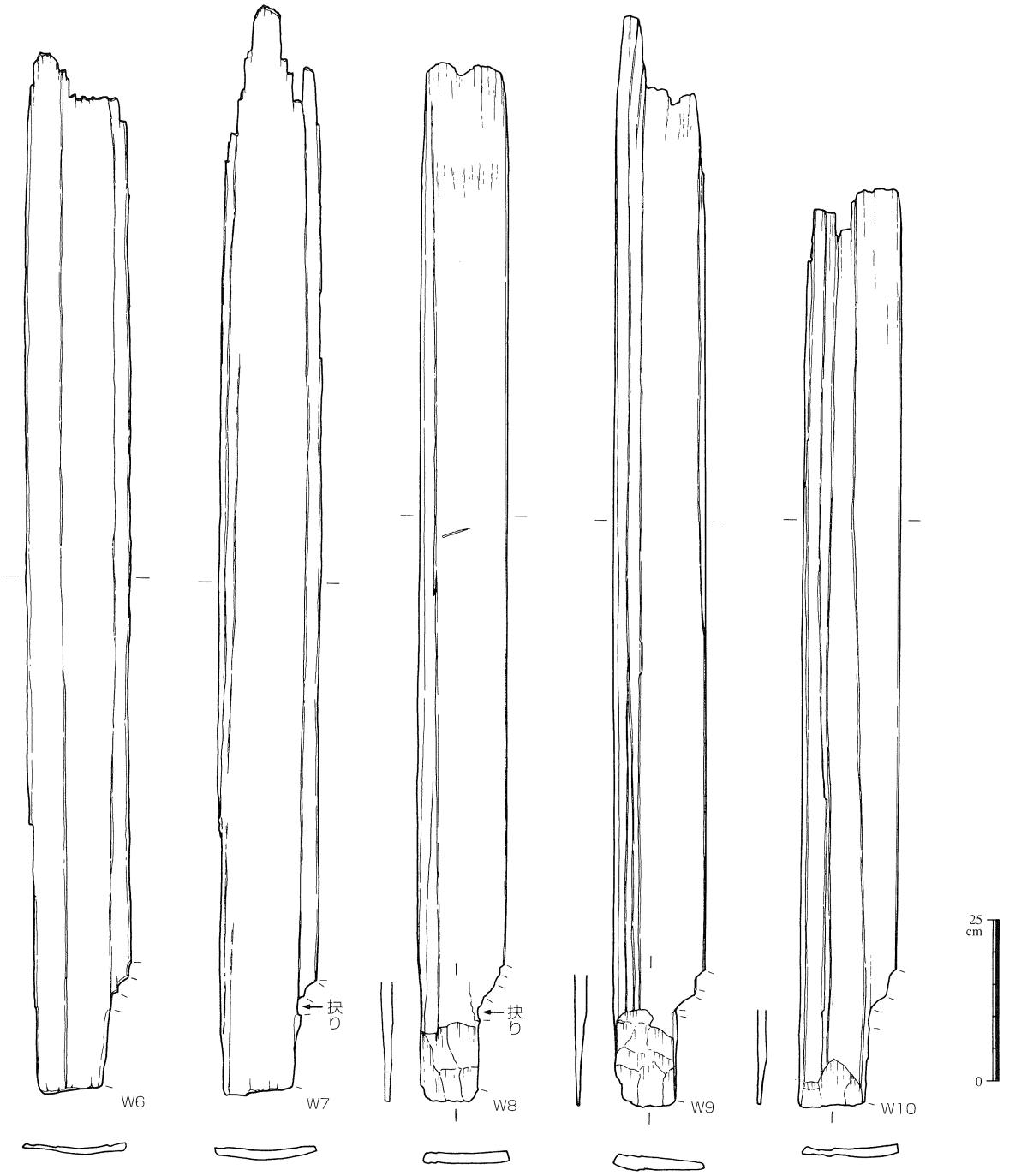


番号	製品名	部位	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	木取り	接合	樹種	特　　徴
W１	縦板	西側	167.9	18.4	2.0	追柾目	a－１段	スギ	木口平滑
W２	縦板	北側	170.2	17.9	1.5	追柾目	a－２段	スギ	原材の木口まで分割が及ぶことなく、剥ぎとられた材
W３	縦板	東側	146.0	18.0	1.6	板目	b－１段	スギ	下端両側を加工（両側とも４単位）、右長側面に窪み（幅2.4cm）
W４	縦板	北側	150.8	17.6	1.6	板目	b－２段	スギ	下端両側を加工（両側とも４単位）、右長側面に窪み（幅3.0cm）
W５	縦板	北側	138.2	17.1	1.5	板目	b－３段	スギ	下端両側を加工(右側１単位、左側２単位)、右長側面に窪み(幅3.0cm)､木表側に湾曲

図24　縦板①（縮尺１/10）

の痕跡が認められる。W17は右長側面に幅3.5cmの窪みがみられ、その木表には刻印の可能性もある線刻が認められる。

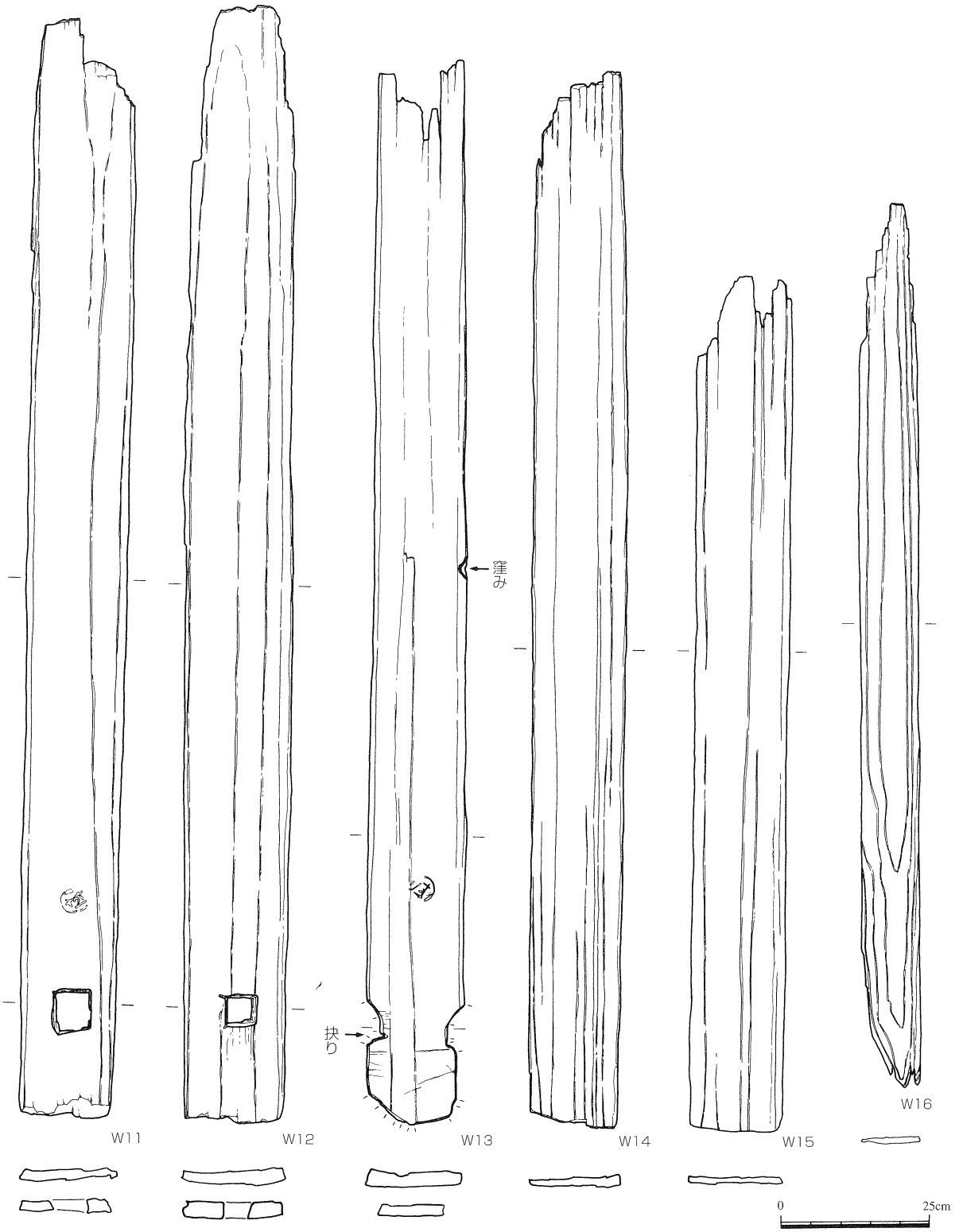
穿孔を有する縦板（図28－W26～32）　穿孔がなされた縦板は７点確認された。これらの材は、幅が９～12cm前後で、薄手の板が穿孔の対象となっている。いずれの孔の内側にも焦げが認められるため、穿孔は焼成によっ



番号	製品名	部位	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	木取り	接合	樹種	特　徴
W６	縦板	南側	161.6	16.0	1.3	板目	c－１段	スギ	下端右側を加工（４単位）
W７	縦板	南側	169.4	16.0	1.5	板目	c－２段	スギ	下端右側を加工（４単位）
W８	縦板	南側	160.4	13.2	1.8	板目	d－１段	スギ	下端右側を加工（５単位）、下端の木裏面をハツリ加工、木裏中央に長さ3.8cmの工具痕？
W９	縦板	南側	164.5	14.2	1.8	板目	d－２段	スギ	下端右側を加工（５単位）、下端の木裏面をハツリ加工
W10	縦板	南側	153.0	15.0	1.2	板目	d－３段	スギ	下端右側を加工（４単位）、下端の木裏面をハツリ加工

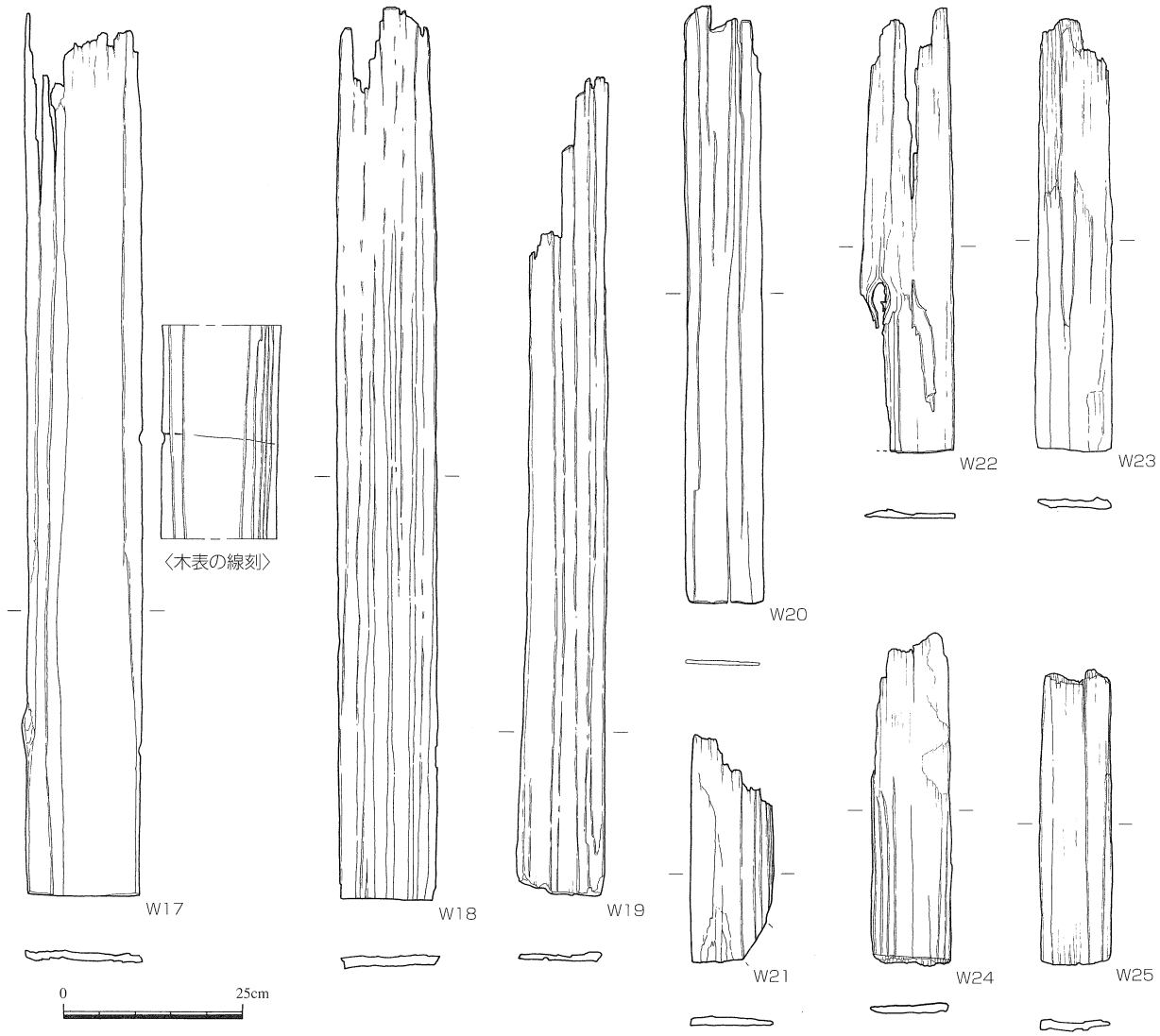
図25　縦板②（縮尺１/10）

てなされていることがわかる。したがって、割り裂き後に穿孔がなされたものと考えられる。穿孔には、図33－10のように十分に貫通しないものも認められる。こうした穿孔が、井戸の構造と直接かかわるものと想定することは困難だろう。穿孔を有する材は、接合関係が認められないことからも、槽と認識した縦板とは異なる経緯で製作されたものが、井戸構築にあたって転用された可能性が考えられる。



番号	製品名	部位	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	木取り	接合	樹種	特　　徴
W11	縦板	西側	184.2	17.0	2.2	板目	e－１段	スギ	筏穴（長さ8.6cm、幅5.4cm）、木裏に焼印１箇所
W12	縦板	西側	187.4	18.0	2.6	板目	e－２段	スギ	筏穴（長さ5.3cm、幅5.3cm）
W13	縦板	西側	177.2	16.2	3.0	板目	－	スギ	木裏に焼印１箇所
W14	縦板	北側	176.6	16.0	1.8	板目	－	スギ	木口は段をなす
W15	縦板	東側	141.4	15.2	1.1	板目	－	スギ	木口平滑
W16	縦板	南側	147.5	10.1	1.0	板目	－	スギ	原材の木口まで分割が及ぶことなく、剥ぎとられた材

図26　縦板③（縮尺１/10）

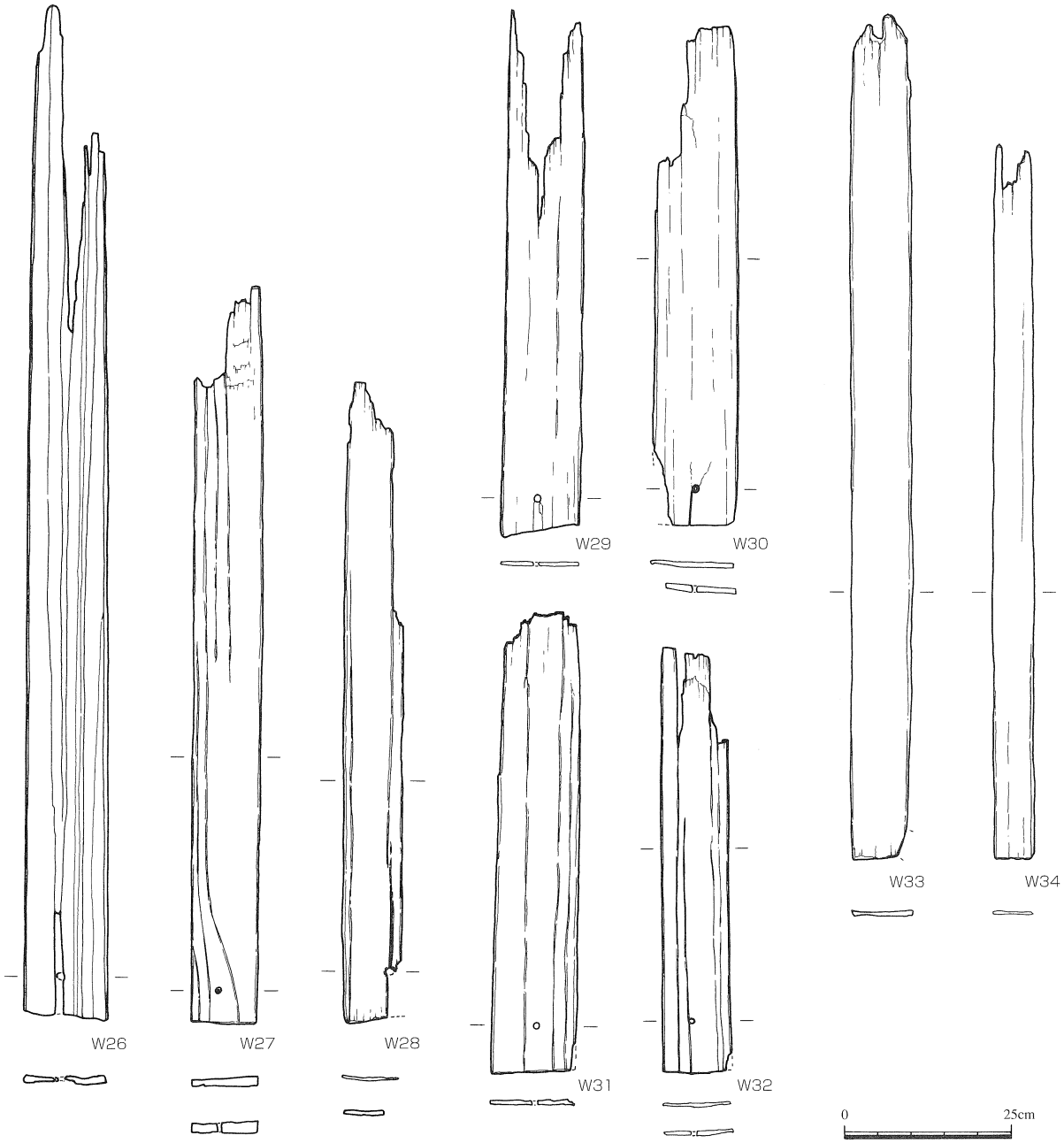


番号	製品名	部位	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	木取り	接合	樹種	特　　徴
W17	縦板	西側	121.8	16.5	1.8	板目	－	－	木口平滑、中央側面に抉り状痕跡と木表に工具による線刻あり
W18	縦板	南側	126.0	13.8	1.4	板目	－	－	木口平滑
W19	縦板	西側	113.2	12.3	1.3	板目	－	－	木口は段をなす
W20	縦板	東側	84.0	10.8	0.6	板目	－	スギ？	木口は段をなす
W21	縦板	東側	25.9	9.1	1.0	板目	－	スギ？	下端右側を加工（１単位）
W22	縦板	北側	62.8	12.2	1.0	板目	－	スギ	木口平滑
W23	縦板	西側	61.5	10.0	1.5	板目	－	スギ	木口平滑
W24	縦板	南側	47.1	10.8	1.3	板目	－	スギ	木口は折り取りによるものか
W25	縦板	－	41.9	9.7	1.2	板目	－	スギ	木口は細かな段をなす、上端は折れ

図27　縦板④（縮尺１/10）

iii）縦板の種類と井戸における使用箇所の関係（図23）

まず縦板の接合関係と、井戸における使用箇所の関係をみてみよう。ａ類となる２枚の板については、西側辺と北側辺に配置されるが、ｂ～ｄ類については井戸の特定の辺に使用されている。類似する下端部加工がなされたｃ・ｄ類は南側辺、ｅ類は西側辺となる。またｂ類は、北側に２枚、東側に１枚配置されるが、これらは井戸北東隅付近に配置されたものである。こうした接合材と使用箇所との対応関係は、運びこまれた素材が、井戸の設計・構築にあたって割り裂かれた状況を示唆する。穿孔を有する板材を含む小型の材（W16～34）の多くは、内側の大型の縦板の背後、掘り方と縦板との隙間に挿入される。

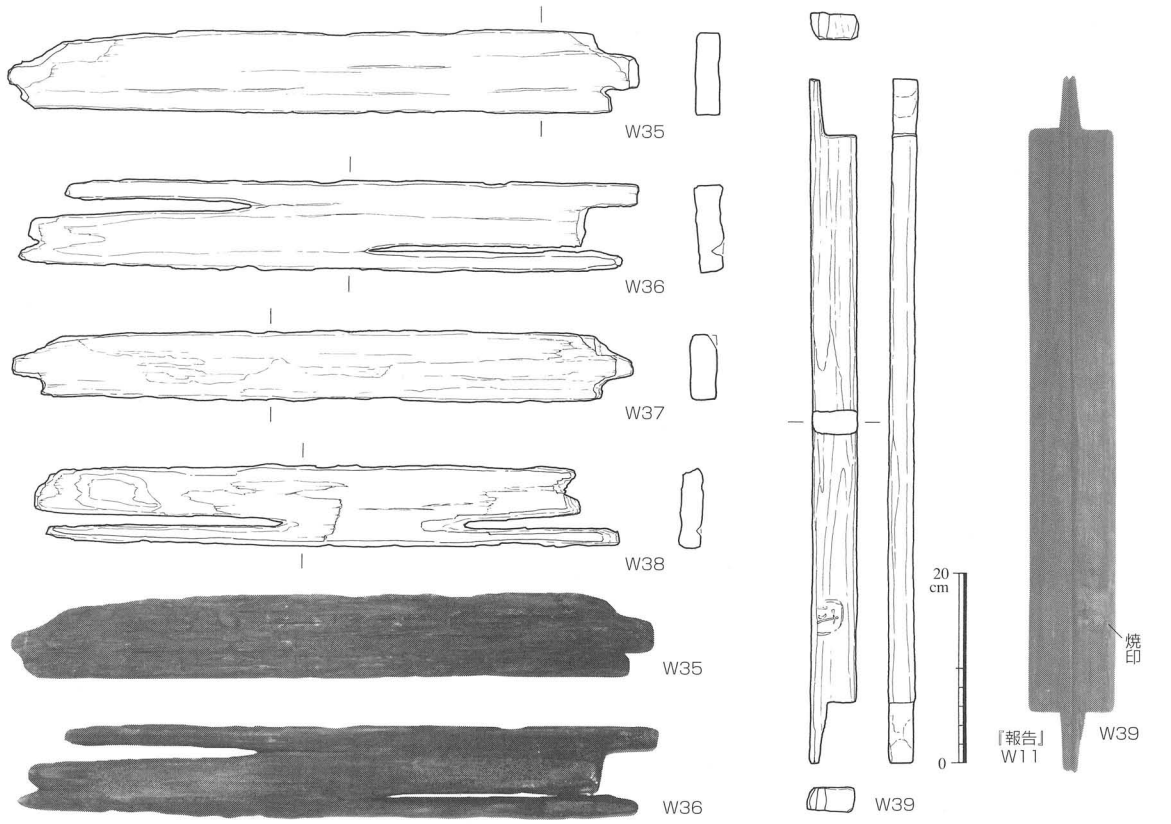


番号	製品名	部位	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	木取り	接合	樹種	特　　徴
W26	縦板	北側	152.0	12.5	1.2	板目	－	スギ？	穿孔（径不明）
W27	縦板	北側	110.4	9.9	1.8	板目	－	スギ	穿孔（径0.9cm、木裏から木表へ）
W28	縦板	西側	96.4	(8.7)	0.55	板目	－	スギ？	穿孔（径1.5cm）
W29	縦板	北側	79.0	11.8	0.8	板目	－	スギ？	穿孔（径0.9cm）
W30	縦板	西側	74.4	12.3	0.8	板目	－	スギ	穿孔（径1.0cm、両面から穿孔された可能性あり）
W31	縦板	西側	69.2	12.6	0.7	板目	－	スギ？	穿孔（径0.8cm、木裏から木表へ）
W32	縦板	西側	63.9	10.2	0.7	板目	－	スギ？	穿孔（径0.8cm）
W33	縦板	北側	126.4	9.1	0.9	板目	－	－	下端片側を加工
W34	縦板	北側	107.1	6.0	0.5	板目	－	スギ？	木口平滑

図28　縦板⑤（縮尺１/10）

ｃ．横桟・支木（図29）

遺存状態の良好な中段と下段の横桟については、『報告』においてすでに実測図が示されているが、今回は未報告であった上段の横桟の図化を行った。上段の横桟は、井戸の上部から出土したため風化が著しく、正確な大きさや加工については不明である。その一方で、中段・下段の材の長さが72.9cm 前後となるのに対し、上段の長さは両端の凸部・凹部を比較の基準とすればいくぶん短く、両者に違いがある。なお、幅は中段が8.5～10.2



番号	製品名	部位	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	木取り	樹種	特　　徴
W35	横桟	上段北側	66.9	8.7	2.6	板目	スギ	右側凸部は本来の形状をおおむね留める
W36	横桟	上段東側	65.8	9.5	3.0	板目	スギ	右側凹部は本来の形状をおおむね留める
W37	横桟	上段南側	65.8	7.5	2.8	板目	スギ	両端とも凸部の形状をなすが、風化が激しい
W38	横桟	上段西側	62.1	8.5	2.5	板目	スギ	右側に凹部の一部残存
W39	縦支木	西側南	72.5	4.7	2.6	板目	スギ	『鹿田遺跡３』W12に該当、同W11と接合、焼印１箇所

図29　横桟・支木（縮尺１/８）

cm、下段が11.3～12.1cm、厚さは中段が4.4～4.9cm、下段が3.8～4.2cmとなる。

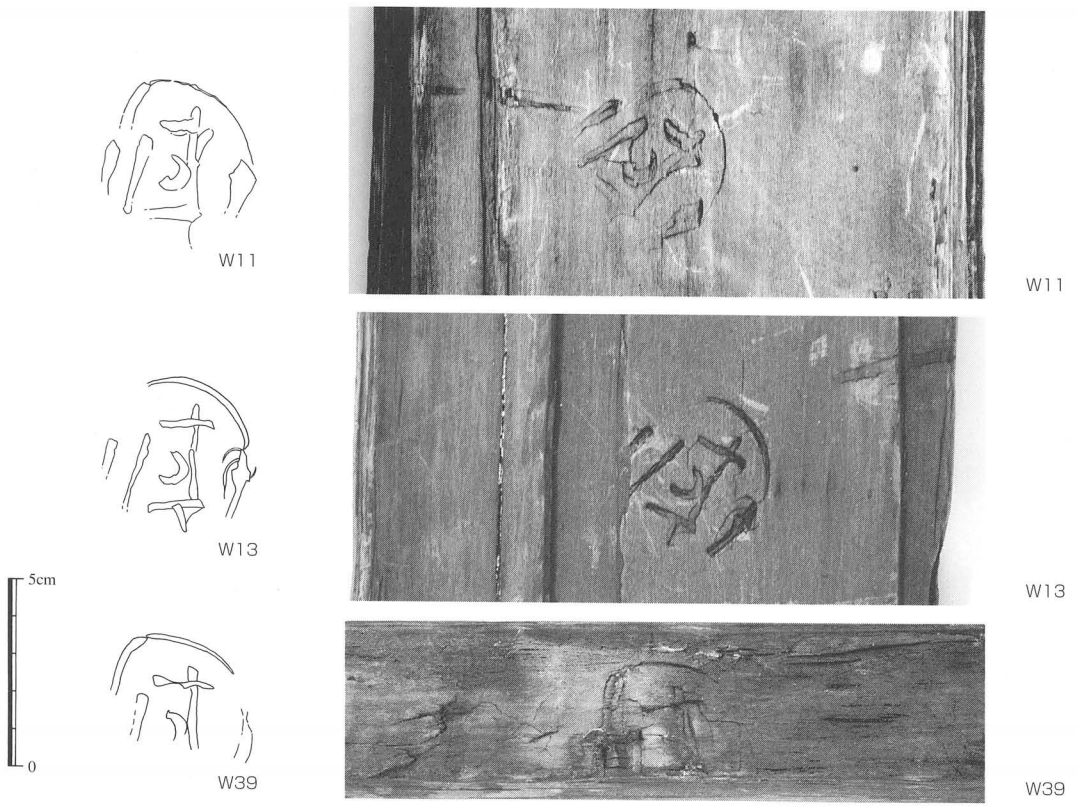
一方、出土した４点の支木については、『報告』においてすでに実測図が掲載されていたが、今回新たに次の二つの様相が明らかとなった。まず、４点の支木のひとつ（図29－W39、『報告』W12）に、縦板と同様の焼印が１箇所確認された。第二に、この支木と同様の規格の支木（『報告』W11）どうしが、長側面で接合することが判明した（図29接合写真）。接合材は、長さ72.6cm、幅9.1cm、厚さ2.6cmを測る。この法量は、横桟の法量に近い。長さについては中段・下段、幅については上段・中段、厚さについては上段の横桟に近い数値となる。材を二分した後に、分割面の縁が丸みを帯びるように加工がなされている。W39の焼印が、もう一方の材にまで及んでいないのは、こうした加工によって焼印の残り部分が失われたためと考えられる。

規格の上で類似する横桟と支木は、幅と厚さから考えるならば角材を素材とした可能性が高いだろう。

ｄ．焼印（図30）

井戸枠材からは、表面に焦げ目が認められる３点の焼印が確認された。焼印は２枚の縦板（W11・13）と１点の支木（W39）に対して、それぞれに１箇所施されていた。縦板における焼印の位置は、W11で下端から33cm、W13で下端から37cmとなり、ほぼ類似した位置にある。ただし、両者では焼印の向きが約180度異なる。

３点の焼印は、押し方や原体の熱し方等によるためか、形状がいくぶん異なるものの、同様の大きさ・形状をなすことから、同一の原体から押印されたものである可能性が高い。焼印は、不整円形の外縁部分（外区）と文字状の部分（内区）からなる。外区の形状については、４つの単位の線分が確認される。内区は、中央の三日月



番号	焼印全長(cm)	焼印全体幅(cm)	特　　徴
W11	4.4	4.1	線の太さ2～3mm 主体、外区右隅の線の太さ7mm（W13･39より全体的に線が太い）、外区の全体的形状がわかる、外区は下側にまで及ばない
W13	4.1	4.1	線の太さ１～2.5mm 主体（W11・39より全体的に線が細い）
W39	(3.3)	3.8	下半は材の分割と加工により不明、線の太さ２～３mm 主体

図30　焼印（縮尺１/２）

状の文様と、それを囲むような台形状の直線からなる。内区の形状は、文字を図案化したものの可能性が高いが、その文字の内容については判読できない(2)。線の形状については、内区・外区ともに縁が深くなり、縁より内側はわずかに隆起する。

縦板と支木に同様の焼印が付与されていたことは、支木と同じ規格となる横桟も含めて、材の生産場所が同じであったことを示唆する。

ｅ．まとめ

紙幅の関係で簡略な記述にとどまったものの、井戸枠材の図化を今回試みることによって、従来明らかにされてきた奈良・平安時代の都城関係の井戸枠材とは異なる、中世でかつ地方における井戸枠材の規格や焼印に関する基礎資料を提示することができた。今後は、鹿田遺跡における他の井戸についても検討を拡大し、個々の井戸における材の生産・流通、井戸の構築過程を復元していきたい。それによって、古代・中世の木材生産・流通・使用に関する検討を深めていきたい。

（光本　順）

註（１）ｂ類の下端部は本来、W13のような左右の抉りの形状を呈していた可能性がある。ｂ類の木口は、割り裂き前に上段から下段にかけて斜めに切断される。

（２）焼印については本学文学部教授の久野修義氏に観察していただき、貴重なご教示をいただいた。

引用文献

岡田文男2002「長岡京の井戸の側板に用いられた古代の樽について」『田辺昭三先生古稀記念論文集』　pp.411－422
岡田文男2004「林業－樽の生産と流通」『列島の古代史　ひと・もの・こと　２』暮らしと生業　岩波書店　pp.303－320
鐘方正樹2003『井戸の考古学』同成社
松木武彦・山本悦世編1993『鹿田遺跡３』岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第６冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

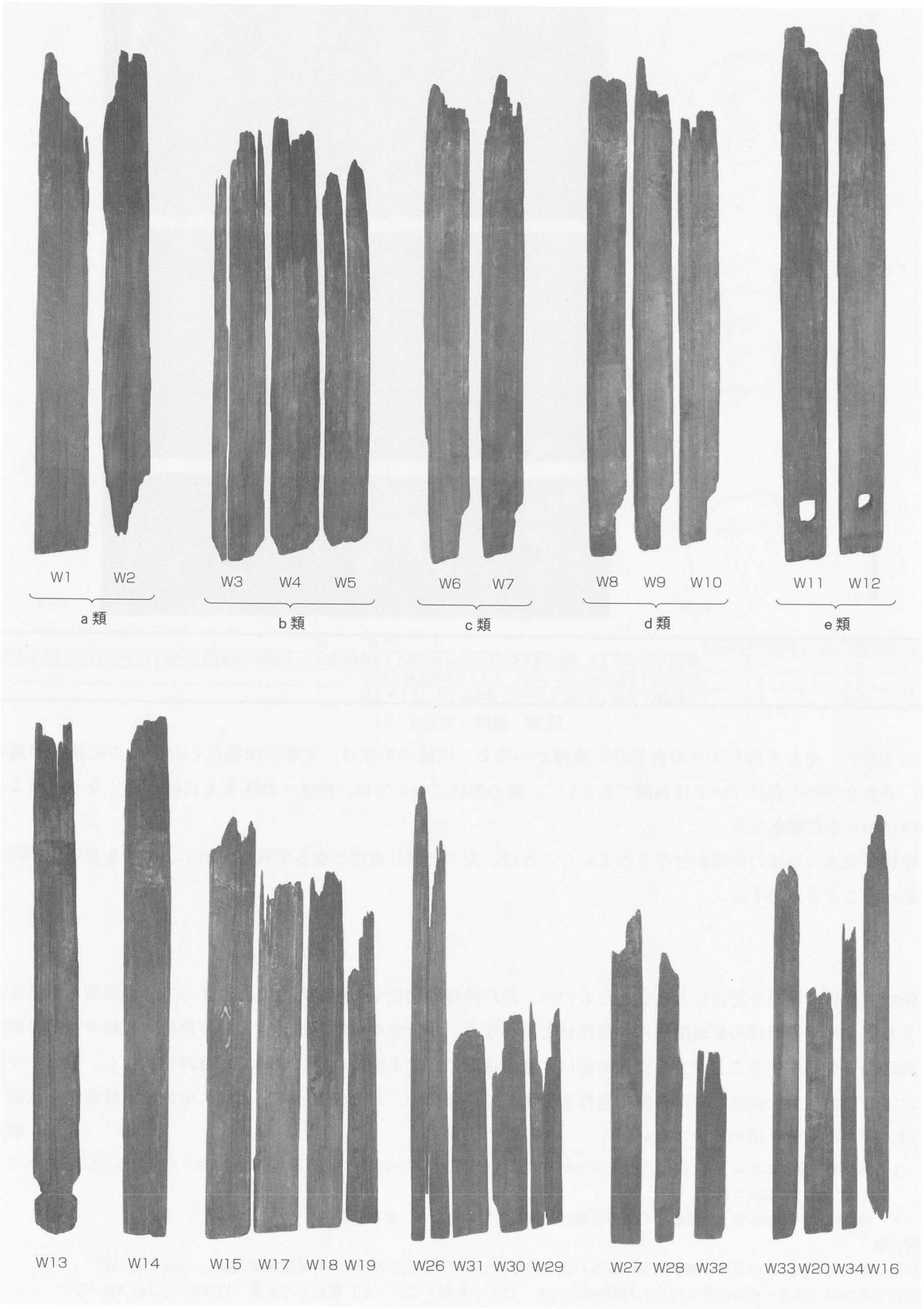
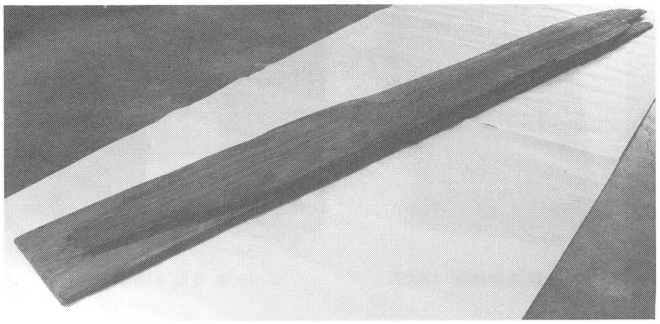
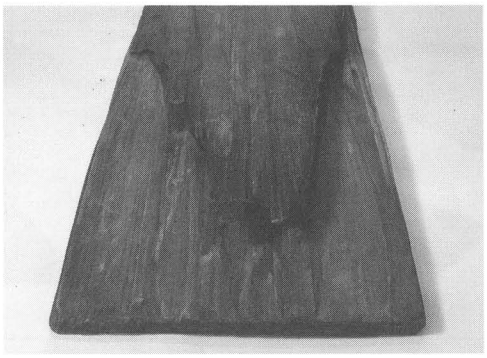

W1
W2
a類
W3
W4
W5
b類
W6
W7
c類
W8
W9
W10
d類
W11
W12
e類
W13
W14
W15
W17
W18
W19
W26
W31
W30
W29
W27
W28
W32
W33
W20
W34
W16

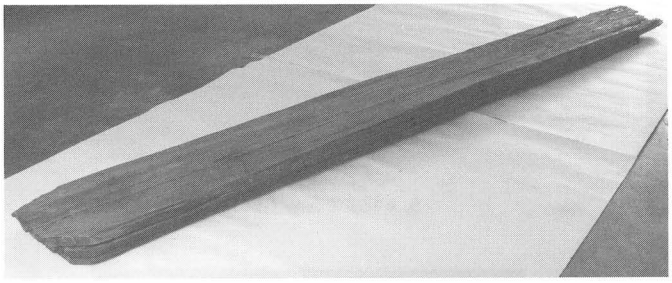
図31　縦板（縮尺１/20）



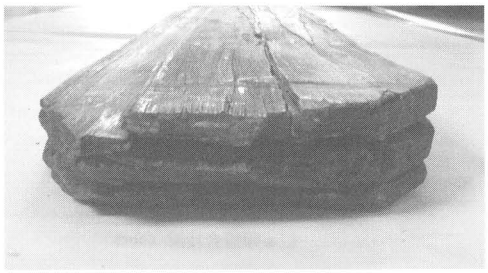
1. a 類接合状況（全体）



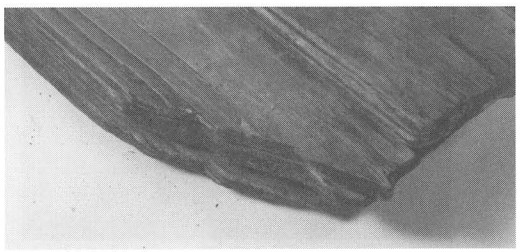
2. a 類接合状況（木口）



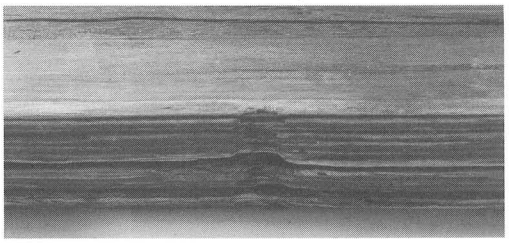
3. b 類接合状況（全体）



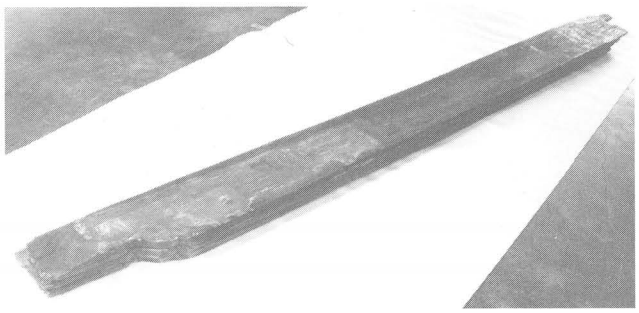
4. b 類接合状況（木口）



5. b 類木口加工

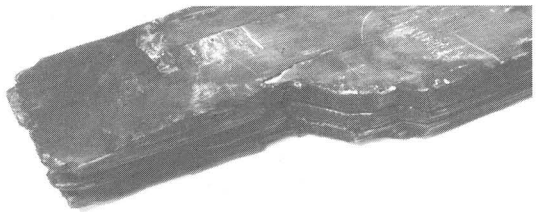


6. b 類長側面

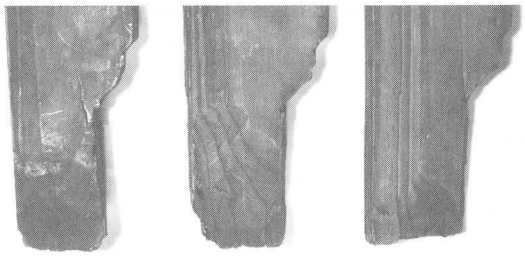


7. c 類接合状況（全体）

8. c 類接合状況（木口）

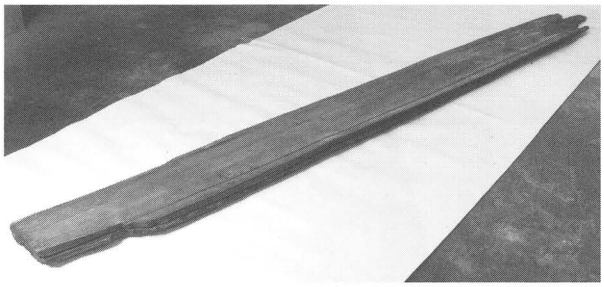


9. c 類接合状況（加工部分）



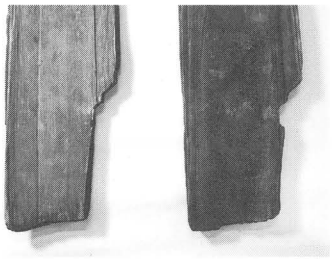
10. c 類下端部

図32　縦板詳細①

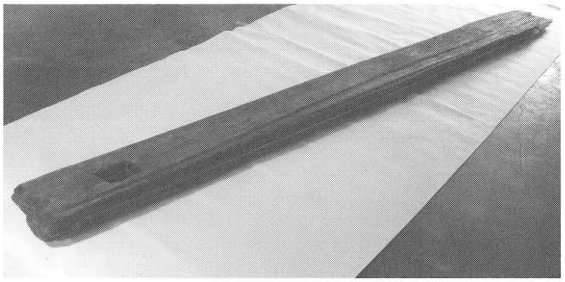


1. d類接合状況（全体）

2. d類接合状況（木口）

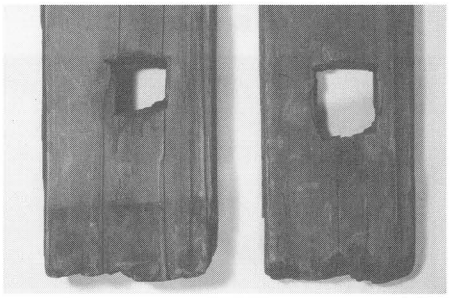


3. d類下端部

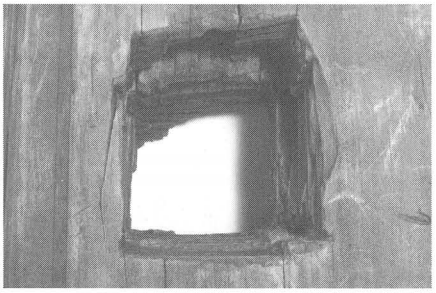


4. e類接合状況（全体）

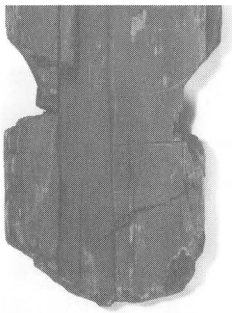
5. e類接合状況（木口）



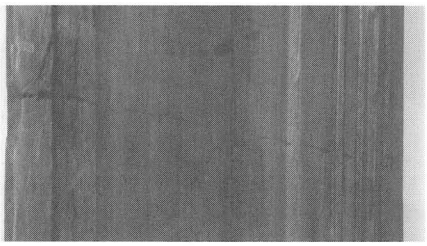
6. e類下端部



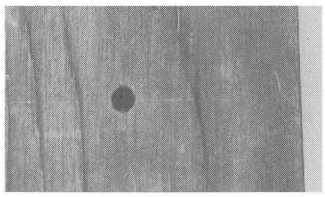
7. e類筏穴



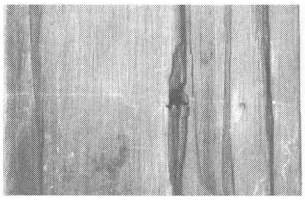
8. W13下端部加工



9. W17長側面の抉りと木表の線刻



木裏



木表

10. W27穿孔

11. W28穿孔

図33　縦板詳細②

第３章　その他地区の調査

第１節　試掘・確認調査の概要

１．三朝宿泊所増築および高圧線・電話線切替工事に伴う試掘・確認調査

ａ．調査の成果

三朝地区におけるこれまでの調査には、周辺の分布調査[1]（1989年実施）、福呂遺跡第１・２次調査[2]（1997年実施）がある。発掘調査の結果、縄文時代、弥生時代、中世の遺構・遺物を豊富に確認していた。

今回の調査地点は福呂遺跡の範囲からは外れており、遺構・遺物や遺物包含層を確認するにはいたらなかったが、三朝地区の東端、南端の状況を一部明らかにすることができた。三朝宿泊所地点では、調査成果に周辺の地形を勘案すると、北東から南西に緩く傾斜して下がり、尾根の東側を通る谷状地へと連なる地形になると考えられる。高圧線・電話線切替工事地点は、三朝地区の南側を西流する三徳川の河岸段丘にあたり、河床とみられる礫層を確認した。なお、1997年の立会では、礫層の直上に近世の包含層が堆積していることを確認しており、今回の調査で確認した土層についても、近世以降の堆積層であると考えられる。

今回と1997年の立会調査の成果を合わせて考えるならば、三朝地区では病院より南の河岸段丘面上には、遺跡は存在しない公算が大きいと考えられる。今後はそれ以外の範囲での遺跡の有無を明らかにしていく必要がある。特に北からのびる尾根の裾部や福呂遺跡の位置する最も高い段丘面については注意が必要であろう。

ｂ．調査の経過

①　調査に至る経緯

2004年になって地区東端の三朝宿泊所の増築計画が具体化した。また、地区の南を東西に通る県道でバス停の引き込みが計画され、それにともなって敷地内の高圧線・電話線を切替える必要が生じた。これらの工事計画地点と、福呂遺跡との位置関係については、三朝宿泊所地点が福呂遺跡の位置する段丘面の東に谷を挟んだ尾根の東側裾部に、高圧線・電話線切替工事地点は、福呂遺跡の南の段丘崖を一段下がった段丘面に位置する（図38）。工事予定地は同遺跡からは離れた位置になるが、遺跡の有無を確認するために、工事対象地域内において試掘・確認調査を行うこととした。

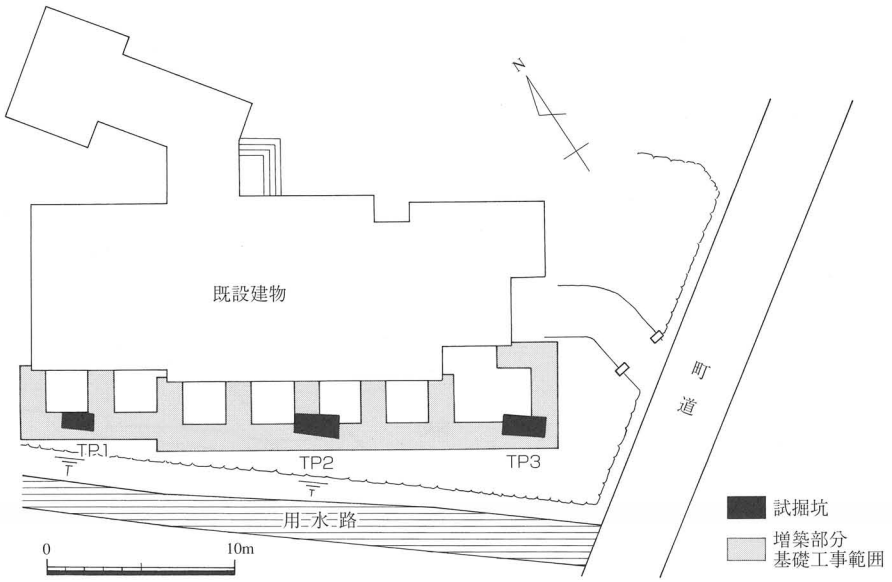


図34　宿泊所増築工事地点位置図（縮尺１/400）

② 調査の経過

試掘・確認調査は2004年９月21・22日の両日で実施した。三朝宿泊所の増築範囲は東西約28.5m、南北約3.6～5.6mであり、東から西に下がる地形に沿って設計されていた。増築範囲の東西端と中間の位置に３ヶ所の試掘坑を設定し西からＴＰ１、ＴＰ２、ＴＰ３とした。なお、工事予定地内には既設の雨水排水や電気配線が通り、攪乱を受けていることが予測されたため、それらを避けて試掘坑を設定した。また、高圧線・電話線切替工事地点ではハンドホール新設予定地点に試掘坑を設定した。いずれも重機によって掘削し、砂礫層を確認したところで掘削を終了したが、遺構・遺物・遺物包含層を確認するに至らず、記録をとって調査を終了した。

c．調査の概要

① 三朝宿泊所増築工事地点

調査地点は階段状に造成されており、現状での地表の標高は、TP１が53.9m、TP２が54.4m、TP３が54.7mである。掘削の結果、遺構・遺物・遺物包含層は確認されなかったため、層序と地形について記しておく。

層序　土層図は、設定した３ヶ所の試掘坑の北壁断面を並べたものである。３ヶ所の試掘坑にみられた堆積層のそれぞれの対応関係は土層番号によって示している。掘削深度は約1.1～1.3mで、層序は次のとおりである。

１層は造成土である。２層は淡黒灰色砂質土で、１～４cm大の礫を多く含む。３層は暗灰茶褐色砂質土で、１cm大の礫が多い。４層は淡黄褐色砂質土で、１cm未満の礫を多く含み、白色微砂を帯状に含んでいる。土石流や洪水による堆積層と考えられる。５層は淡黒褐色砂質土で、礫は少なく、炭粒を含んでいる。６層は黄褐色砂で、マサ土である。７層は灰黄色礫混じり砂である。いずれの土層も今回初めて確認されたもので、出土遺物はなく時期は不明である。

地形　７層上面は東側のTP３では標高53.5mであるが、西側のTP１では標高52.8mである。７層上面では東から西に下がる地形を想定することが可能である。上層もこの地形に規制されて同様の地形を反映している。なお、調査地点周辺についても踏査したところ、調査地の東は北東から南西に緩く下がる傾斜を有していることを確認した。

② 高圧線・電話線切替工事地点

試掘坑は、周囲には大型の攪乱もあり、上端は約３×３ｍとなったが、造成土以下は１×1.5mの平面規模となった。

層序　掘削深度は約１ｍで、層序は次のとおりである。１層は造成土である。２層は暗褐色～暗茶褐色を呈する砂質土で旧表土と考えられる。３層は茶褐色～灰褐色砂質土である。砂粒は細かく礫は少ない。４層は明黄褐色粗砂である。鉄分の沈着が著しい。河道堆積物であると考える。５層は灰褐色粗砂～礫層である。段丘礫層

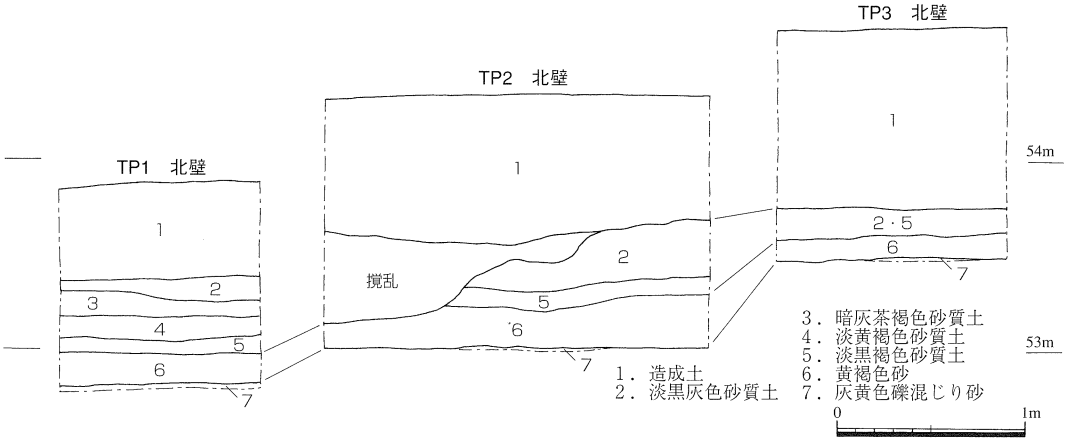


図35　宿泊所増築工事地点土層柱状図（縮尺１/40）

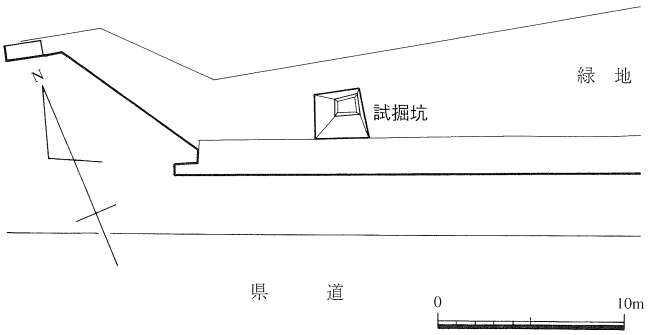
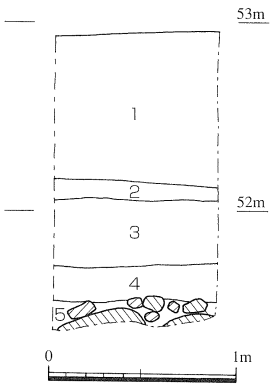


図36　高圧線・電話線切替工事地点位置図（縮尺１/400）



１．造成土
２．暗褐色～暗茶褐色砂質土
３．茶褐色～灰褐色砂質土
４．明黄褐色粗砂
５．灰褐色粗砂～礫層

図37　高圧線・電話線切替工事地点土層柱状図　（縮尺１/40）

～河床礫と考えられる。

結果　掘削の結果、遺構・遺物・遺物包含層は確認されなかった。最下層で確認した段丘礫層（５層）については、今回と同一の段丘面を掘削した1997年の立会の際にも認められており、この段丘面は基本的には同じ状況を示すものと考えられる。２～４層の堆積時期については、1997年の立会調査成果から、近世以降と考えられる。　（野崎貴博）

註（１）石坂俊郎1990「分布調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』７、p.23、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
（２）野崎貴博編2000『福呂遺跡１』、岡山大学構内遺跡発掘調査報告第15冊、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

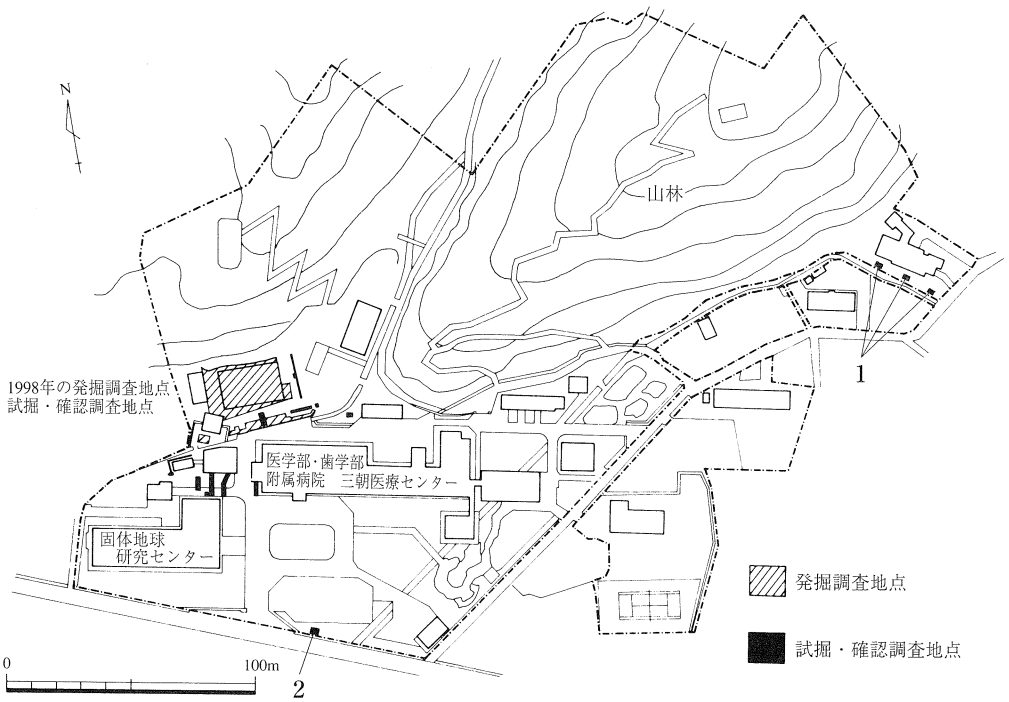


図38　2004年度の調査地点【３】ー三朝地区ー（縮尺１/2500）

表７　2004年度三朝地区調査一覧

番号	種類	調査地区	所属	調査名称	調査期間	掘削深度（GL-m）	内　容
1	試掘確認	三朝	固	三朝宿泊所増築工事	9.21	1.3	３箇所、いずれの箇所でも遺跡包含層は未確認
2	〃	〃	〃	高圧線・電話線切替工事	9.22	1.0	造成土以下、近世以降の土層３枚と最下層の礫層を確認。遺構・遺物なし

第４章　調査資料の整理・研究および公開・活用

第１節　調査資料の整理

１．調査資料の整理

2004年度の調査資料の整理は鹿田遺跡第13次・14次調査、津島岡大遺跡第26・28次調査の整理作業を中心に行い、また報告書作成作業に関しては『津島岡大遺跡15』（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第20冊）・『津島岡大遺跡16』（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊）の二冊を刊行した。

『津島岡大遺跡15』は事務局本部棟新営に伴う第26次調査の成果報告書である。2000年度に実施した発掘調査であり、縄文時代中期～近世における土地利用形態の推移を明らかにすることができた。また古墳時代後期から中世にかけての「柵列」・溝状遺構に着目した考察を掲載した。

『津島岡大遺跡16』は環境理工学部校舎新営に伴う、第17次（1996年度調査）・22次（1998～1999年度調査）の二期にわたる発掘調査の報告書である。津島岡大遺跡のなかでも、特に縄文時代において最も遺構密度の高い地点の調査報告である。第17次調査地点の大半を占めるようにひろがる微高地での集落の実態とその北側の斜面部での状況を明らかにした。また縄文後期を中心とする遺物は、土器・石器ともに豊富であり、遺物の面からは、土器の型式学的検討、石器の特徴、縄文時代の石製収穫具に関する考察を、また遺構の面からは、条里の溝に関する考察を掲載した。

自然科学分析では、報告書作成にも関わるものとして、放射性炭素年代測定、樹種同定を行った。それぞれの分析結果については次項で報告している。（岩崎）

２．調査資料の分析

(1)　放射性炭素年代測定

本年度は表８に挙げたように、14件の試料の放射性炭素年代測定を行っている。１～３は津島岡大遺跡第17次調査土坑９及び竪穴住居址１炉１の試料であり、詳細な結果は報告書に掲載している。４～10は、2003年度に国立歴史民俗博物館に資料提供をおこなった試料７点である。その内訳は、土器付着炭化物４点（津島岡大遺跡第３・５・15次調査）と堅果類３点（津島岡大遺跡第３・15次調査）である。11～14は前述の４～７の試料について古環境研究所で分析を行ったものである。

表８　放射線炭素年代測定資料一覧表

	出土地点	遺　構	対象資料	分析法	分析機関	備　考
1	津島岡大第17次調査	土坑９	炭化物	AMS	（株）古環境研究所（Beta 社）	『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第５冊に報告
2		土坑９	炭化物	AMS		
3		住居址１炉１	土壌	AMS		
4	津島岡大第３次調査	13層	土器付着炭化物	AMS	国立歴史民俗博物館	平成13～15年度科研費基盤研究Ａ「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」（研究代表者：今村峯雄）
5	津島岡大第５次調査	SP１	土器付着炭化物	AMS		
6	津島岡大第15次調査	貯蔵穴 SP13	土器付着炭化物	AMS		
7		谷部	土器付着炭化物	AMS		
8	津島岡大第３次調査	貯蔵穴 SP１	アラカシ	AMS		
9	津島岡大第15次調査	貯蔵穴 SP13	ドングリ	AMS		
10		貯蔵穴 SP19	ドングリ	AMS		
11	津島岡大第３次調査	13層	土器付着炭化物	AMS	（株）古環境研究所（Beta 社）	
12	津島岡大第５次調査	SP１	土器付着炭化物	AMS		
13	津島岡大第15次調査	貯蔵穴 SP13	土器付着炭化物	AMS		
14	津島岡大第15次調査	谷部	土器付着炭化物	AMS		

(2)　樹種同定

本年度の整理作業に伴い、津島岡大第22・26次調査および鹿田遺跡第７次調査の木製品・流木について、森林総合研究所、能城修一氏に樹種同定を依頼し、有益な教示を得た。主な内容は表９の通りであり、詳細な結果については、正式報告書を参照されたい。

表９　樹種同定一覧

調査地点	分析機関	点数	主な出土遺構	報告
津島岡大遺跡第22次調査	森林総合研究所　能城修一	55	古代溝	『津島岡大遺跡16』
津島岡大遺跡第26次調査	森林総合研究所　能城修一	28	近世溝	『津島岡大遺跡15』
鹿田遺跡第７次調査	森林総合研究所　能城修一	27	中世・古墳井戸	『鹿田遺跡５』（編集中）
鹿田遺跡第13次調査	（株）吉田生物研究所	2	中世井戸	
鹿田遺跡第14次調査	（株）吉田生物研究所	3	中世井戸	

３．調査資料の保存処理

(1)　木製品の PEG 保存処理作業

表10　第６期保存処理工程

処理回数	年月日	作業内容
第６期	2002／11／12	濃度40％開始
	2003／４／18	濃度50％へ
	2003／５／29	濃度60％へ
	2003／８／25	濃度70％へ
	2003／９／30	濃度80％へ
	2003／11／10	濃度90％へ
	2004／２／４	濃度95％へ、蓋空け
	2004／８／４	引き上げ

2002年11月より行ってきた第６期保存処理作業を継続して実施した。対象資料は津島岡大遺跡第19次・22次調査および鹿田遺跡第７次調査の出土品である。昨年度２月に濃度95％に達した後、蓋を開けて100％に上昇させている途中であった。今年度当初からも引き続き処理を継続していたが、８月４日に引き上げを行い、この日をもって第６回処理を終了した。

処理槽より引き上げた木器については、洗浄、乾燥、ラベル付けを行った後、収納した。なお、引き上げ後の一連の作業を岡山大学の博物館実習に取り入れ、岡山大学文学部の実習生の協力を得た。

表11　これまでの保存処理工程

期	期間	処理内容	処理期間
第１期	1992年２月～1993年11月	鹿田第１次（附属病院外来診療棟）・第２次（NMR-CT 室）	１年９ヶ月
第２期	1994年６月～1996年８月	鹿田第３次（医学部短期大学部校舎本体）・第４次（医学部短期大学部校舎周辺配管）・第５次（附属病院管理棟）、津島岡大第３次（男子学生寮）・第５次（大学院自然科学研究科棟）・第６次（生物応用工学科棟）	２年２ヶ月
第３期	1996年12月～1999年６月	鹿田第３次（医学部短期大学部校舎本体）、津島岡大第３次（男子学生寮）・第６次（生物応用工学科棟）	２年７ヶ月
第４期	1999年７月～2000年12月	鹿田遺跡第３・４次、津島岡大遺跡第３次	１年５ヶ月
第５期	2001年１月～2002年３月	鹿田遺跡第３・４次、津島岡大遺跡第３次、第９次（生体機能応用工学科）・第10次（保健管理センター）・第12次（附属図書館）・第13次（福利厚生施設北棟）	１年２ヶ月
第６期	2002年11月～2004年８月	鹿田第７次（医学部基礎医学棟）、津島岡大第19次（コラボレーションセンター）・第22次（環境理工学部棟Ⅱ期）	１年10ヶ月

(2)　外部委託による木製品の保存処理

本センターでは構内遺跡出土木製品について、多くはセンター内での保存処理を実施しているが、製品の素材や状態に依り、外部委託による保存処理を実施している。

本年度は下記の３件の遺物について、外部委託による木製品の保存処理を実施した。対象資料は下表の通りである。なお資料４の漆椀については、あわせて漆膜分析も行った。

表12　外部委託による保存処理遺物一覧

番号	遺物	調査次	出土遺構	時期	処理法	処理機関
1	漆椀	鹿田第９次	土坑墓	中世	アクリル樹脂法	（財）元興寺文化財研究所保存科学センター
2	木簡	鹿田第14次	井戸	中世	高級アルコール含浸	（株）吉田生物研究所
3	櫛	鹿田第14次	井戸	中世	高級アルコール含浸	（株）吉田生物研究所
4	漆椀	鹿田第14次	ため池状遺構	近世	高級アルコール含浸	（株）吉田生物研究所
5	曲物	鹿田第13次	井戸	中世	高級アルコール含浸	（株）吉田生物研究所
6	曲物	鹿田第13次	井戸	中世	高級アルコール含浸	（株）吉田生物研究所

第２節　調査成果の公開・活用

2004年度は、津島キャンパスにおいてキャンパス発掘成果展を開催した。また大学生の博物館実習や中学生の職場体験受け入れのほか、総合学習時間を利用した小学生の見学に対する説明など、学校教育現場との連携も積極的に行った。

１．公開・展示

(1)　第８回キャンパス発掘成果展

概要：津島キャンパスでは2000年度以降、毎年秋に定期的に展示会を開催しており、今年度は８回目にあたる。第８回のテーマは『土・技・心』との副題を設定し、土器の観察・製作技法の紹介をメインとした展示と、「分銅形土製品」を粘土で製作する体験コーナー等を設けた。開催期間は10月26日～31日までの６日間である。

会場は例年通り、埋蔵文化財調査研究センター収蔵庫２階展示室を使用した。見学者数は延べ253名であった。

内容：『土・技・心』というテーマのもと、主となる展示では土器の時代による形・技法等の移り変わりを、縄文時代～中世にいたる煮沸具の変遷、弥生時代の高杯の変遷を通じて、観察したり、実際に触れることで体感してもらうことを目指した。特別展示としては弥生時代の「顔」の表現を、岡山大学考古学研究室収蔵の人形土製品を中心に、構内で出土した分銅形土製品・人面線刻土器の展示によって示した。

図39　津島キャンパス展示会風景

恒例となっている体験コーナーでは、展示品と関連して「分銅形土製品」を作るコーナー、縄文土器の文様つけコーナー（貝殻・縄・ヘラ等）、ロクロ切り離しコーナーを設定した。様々な文様の付け方や、成形技法を実際に行ってみることで、展示品を観察する際にもまた異なる視点が持てるという相乗効果もあった。

見学者253名、アンケート回収は88枚であり、回収率は34％であった。来場回数をみると、55％にあたる48名が初めての見学者であり、２回、３回以上というリピーターの割合は45％を占めている。リピーターの割合は年々着実に増加の傾向にある。また日別の来場者数では、開催初日にメディアで紹介されたことが功を奏し、水曜・木曜といったこれまでは来場者数の延びない平日の見学者増につながったものと考えられる。

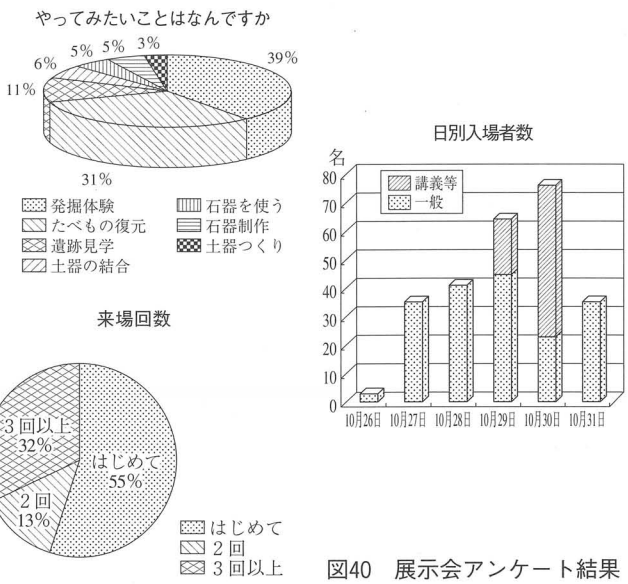


図40　展示会アンケート結果

最も印象に残ったものとしては、分銅形土製品作成を挙げた方が25名と最も多く、縄文土器の文様付け（８名）、土器に直接触れたこと（８名）が続いた。その他に「体験」、「土器の変化」、「土層の剥ぎ取り」、「土壙墓」といった項目が挙がっており、今回の展示の目的に沿う結果が得られ

た。また、直接出土遺物に触れることや、各種の体験への関心の高さを実感する結果であった。このことは、「やってみたいことはなんですか」との問いに対する回答のうち、発掘体験（39%）・石器を使う（５%）・石器作成（５%）・土器つくり（３%）というように体験に関係するもので半分を占めていることからも窺える。

課題：津島キャンパスでの展示会開催も2000年度から継続して５回目となり、毎年確実にリピーターを獲得し、好評を得ている。またアンケートの結果をみても強調したい部分に対する反応がよく、意図を伝えるという点は一定の成果があったと思われる。その一方、今回は目の不自由な方の見学もあり、見学施設としての安全性や利便性について考える良い機会ともなった。いわゆるバリアフリー対策として階段の傾斜や通路の通りやすさ等に配慮することも今後の検討課題である。

成果：今回は初めて目の不自由な方からの見学希望があり、盲導犬同伴で見学された。本センター展示室ではほとんどすべての展示品に直に触れることができ、何よりもその点が、目の不自由な方にも体感していただけたことで、展示する側もよい刺激を受けられた。

このような「実物に触れる展示」は、見学者に対して、予想以上に強い印象を与え、歴史を体感することに繋がる。しかし、通常の博物館等では様々な制約もあり、本センターのような小規模展示施設であるからこそ、実現できる部分も多い。このことが、本センターの展示会の大きな特色のひとつとなっている。

今後も展示方法・内容について意欲的な検討を加えて実践していくとともに、業務全体の中でのバランスにも配慮した取り組みとなるよう、公開・啓発活動の主幹として展示会を継続していきたい。

２．資料・施設等の利活用

(1)　教育機関への支援（授業などの受け入れ）

①　博物館実習：（8/3～8/10）

岡山大学文学部が実施している学芸員資格取得のための授業（博物館実習）の受け入れを行った。期間は８月３日から10日の中の６日間である。全体を３グループに分け、それぞれ２日間を受講日程とした。昨年までは、受講期間中に発掘調査を実施していたことから、発掘調査参加も組み入れた日程としていたが、本年度は調査がなく、本センター施設内で、埋蔵文化財が出土してから展示されるまでの一連の作業工程を組み込んだ体験を実施することとした。

一日目にセンター展示室を利用して、構内遺跡の概要説明、センターの業務内容説明を行った後、出土遺物の注記作業を実施した。二日目は木製品の保存処理工程の一部を体験するということで、処理済みの木器引き上げ、ラベル付け、収納作業のほか、処理前の木器の計測等の作業を実施した。

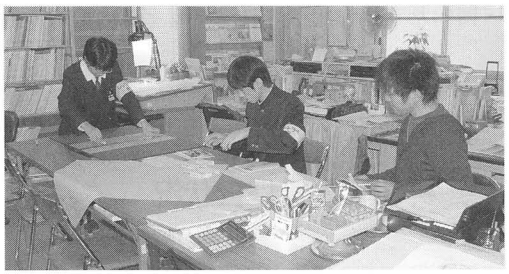


図41　職場体験〈高松中学校〉

②　中学生の職場体験：竜操中学（11/16～18）、**高松中学**（11/19）

岡山市内の公立中学校２校より、職場体験の生徒各３名、計６名の受け入れを実施した。昨年度も受け入れを実施した岡山市立竜操中学校と岡山市立高松中学校の２校である。期間は竜操中学校が11月16日～18日の三日間、高松中学校が11月19日１日であった。

職場体験の内容は、遺物の注記・接合作業体験、種子の顕微鏡写真撮影、蔵書整理、清掃のほか、図版・写真のカバーかけ

図42　職場体験〈竜操中学校〉

といった報告書作成に関わる諸作業である。

今年度は発掘調査のない時期の、博物館実習・職場体験の受け入れとなった。そのためいずれの取り組みでも、発掘調査後の埋蔵文化財の取り扱いが中心となる作業となった。木製品の取り扱いでは、特に本構内遺跡に特徴的な作業を経験するという意味で貴重な体験ともなったといえる。

③　小学生総合学習：津島小６年生

小学校の総合的学習の時間を利用して、身近な遺跡を調べるために津島小６年生が当センターを訪れた。常設展示室の展示説明を中心に、職員が説明を行い、児童からの質問に答えた。

(2)　調査・研究への支援

①　資料見学・提供

- 短甲（鹿田１次調査）：１件
- 猿形木製品（鹿田７次調査）：１件
- 縄文早期土器（福呂遺跡第１次調査）：１件
- 中世土器（鹿田遺跡１・２・５・６次調査）：１件（胎土分析用）
- 弥生時代中期土器（鹿田遺跡第１次調査）：１件
- 石斧（津島岡大遺跡）：１件

②　図書の外部貸し出し：18件（岡山大学文学部学生他）

(3)　資料の貸し出し

①　出版物の資料提供

- 鹿田遺跡現地説明会資料（2003年10月18日実施）「月刊文化財発掘出土情報」2004年７月号掲載
- 津島岡大遺跡第３・21次調査石庖丁状石器写真２点「古代を考える　吉備」吉川弘文館

②　他機関の展示・公開支援

- 岡山県立博物館　　『津々浦々をめぐる考古学』鹿田遺跡出土資料（７／12～11／25）及び図録掲載写真提供

第３節　2004年度調査研究員の個別研究活動

１．科学研究費採択状況

岩崎志保：平成16年度科学研究費（若手研究Ｂ）「東周時代墓葬の比較考古学的研究」：研究代表者

光本　順：平成16年度科学研究費（若手研究Ｂ）「弥生時代から古墳時代における刀剣副葬に関する集成的研究」：研究代表者

２．論文・資料報告

山本悦世：山本悦世・杉山一雄（共著）「岡山県域」『中津式の成立と展開』集成資料集　中四国縄文土器研究会「集落からみた山地域と沿岸域」日本考古学協会2004年度広島大会研究発表資料集　日本考古学協会2004年度広島大会実行委員会

「備前における９・10世紀の様相」第４回山陰中世土器検討会資料集『平安時代前期の土器様相』山陰中世土器検討会
「縄文時代後期の集落構造とその推移」『紀要2003』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岩崎志保：『津島岡大遺跡16』（編集）
「条里の溝について」『津島岡大遺跡16』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
「鹿田遺跡第14次調査出土木簡について」『紀要2003』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
「岡山・鹿田遺跡」『木簡研究』第26号

野崎貴博：「津島岡大遺跡第17・22次調査出土縄文土器の型式学的検討」『津島岡大遺跡16』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

光本　順：『日本古代の身体表現に関する考古学的研究』（岡山大学大学院文化科学研究科提出博士学位論文）
『近現代考古学の射程』六一書房（共著、執筆箇所「身体の近代と考古学」）
『津島岡大遺跡15』（編集）
「古墳時代後期から中世における遺構群の変遷」『津島岡大遺跡15』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
「クイア考古学の展開」『ジェンダーの多様性・普遍性・可変性の分析および独自のジェンダー教育プログラムの立案を含む学際的研究』「ジェンダーの多様性・普遍性・可変性の分析および独自のジェンダー教育プログラムの立案を含む学際的研究」グループ

高田貫太：「垂飾付耳飾からみた朝鮮半島の対倭交渉」『古墳出土金工製品の日韓比較研究』㈶大阪府文化財センター

３．研究発表等

山本悦世：津島やよい講座『弥生時代のくらしを考える』（岡山県教育委員会主催）コーディネーター（10月２日）
岡山大学文学部公開講座　講師「縄文から弥生へ－津島岡大遺跡に刻まれた縄文人の選択－」（10月23日）
「集落からみた山地域と沿岸域」日本考古学協会2004年広島大会（11月６・７日）
「備前における９・10世紀の様相」山陰中世土器検討会（１月22・23日）

光本　順：New direction in the archaeology of human body in Japan and its application to the social body in the Kofun Period, The Society for East Asian Archaeology, Chungnam National University, KOREA（６月17日）

高田貫太：「朝鮮半島大加耶地域の対倭交渉経路」考古学研究会岡山例会発表（７月）
「垂飾付耳飾からみた朝鮮半島の対倭交渉」近つ飛鳥博物館シンポジウム（３月６日）

４．資料収集・実態調査

山本悦世：中世土器・猿形木製品に関する資料調査（大分県教育庁文化課）

岩崎志保：東周～漢代青銅器・墓葬に関する資料調査（出光美術館・国立国際美術館ほか）

野崎貴博：天狗山古墳出土挂甲の調査（東京国立博物館）

光本　順：刀剣、絵画資料、人物埴輪に関する資料調査（滋賀県、福岡県、群馬県）
弥生遺跡の実態調査（長崎県）

高田貫太：古墳時代金工品の資料調査（奈良県、大阪府、岐阜県）

第５章　2004年度における調査・研究のまとめ

調査　2004年度に実施した発掘調査は鹿田遺跡第16次調査１件である。鹿田キャンパスの北東部の立体駐車場新営に伴う調査であり、エレベーターピット部分のごく小規模な範囲であったが、これに伴う試掘調査・立会調査の成果も併せ、鹿田地区の北部の土地利用状況等に関して貴重な知見を得ることができた。津島地区においては、昨年度のような比較的規模の大きい立会調査はなかったものの、保健管理センター東側での立会調査（調査６）に示されるように、小規模なものであっても既調査部分の状況との比較検討により、有意義な成果を得ることができ、またこれまでの成果を補足するデータの蓄積もできた。また今年度は三朝地区においても試掘調査を実施した。同地区での調査の実施は1997年来である。今回の調査地点ではいずれも遺構・遺物包含層は確認されなかったが、同地区における土層堆積状況の確認及び旧地形の復元に際して新たな知見を得た。

研究　今年度は『津島岡大遺跡15』と『津島岡大遺跡16』の二冊の発掘調査報告書を刊行した。前者は事務局本部棟の新営に伴う発掘調査（第26次調査地点）、後者は環境理工学部棟の新営工事に伴う発掘調査（第17・22次調査地点）の成果である。まず、『津島岡大遺跡15』では縄文時代中期から近代に至る各時期の遺構・遺物が報告され、中でも縄文時代中期の遺構・遺物は津島岡大遺跡の中でも最初期の資料として注目される。隣接する第27次調査地点の成果とも併せ、当該時期の土地利用の実態をつかむ成果を得ることができた。また考察では、古代～中世における柵列遺構・溝状遺構の解明に向けた検討がなされた。『津島岡大遺跡16』では、縄文時代における津島岡大遺跡の中心的な活動域の状況、弥生時代以降の水田畦畔・用水路等の耕作域の状況、さらに古代以降近代までの条里に関わる溝の状況等を報告した。特に縄文時代後期の遺構・遺物の内容は質・量ともに既調査地点のうちで際だって密度の高いものであり、竪穴住居・土坑・溝から構成される集落のあり方や周辺の土地利用状態についての貴重な成果を得ることができた。考察では、遺物の分析として縄文時代後期土器の型式学的検討、石器の出土状況と打製石器の機能に関する考察、遺構の点からは、津島地区の北側を東西に走る条里の溝についての分析・検討がなされた。

そのほかにこれまでに構内遺跡に関して実施してきた自然科学分析について、これまでの成果をまとめて本紀要に掲載した。具体的には年代測定・花粉分析・植物珪酸体分析・樹種同定・種子同定の結果である。その中でも、津島岡大遺跡の放射性炭素年代測定の成果をとりあげ、掲載している。同じく本紀要では鹿田遺跡の研究として、第５次調査井戸６の井戸枠材についての分析をとりあげた。当該井戸は既に正式報告済みのものであるが、2005年度の展示会の際に保存処理を施した部材を確認したところ、いくつかの点で新たな知見が得られた。このように報告書作成中だけでなく、保存処理・展示公開等の取り組みの中で得られた新たな情報や知見について様々な視点から検討していくよう、努力していきたい。

展示・公開　第８回岡山大学キャンパス発掘成果展の開催のほか、博物館実習・職場体験の受け入れといった教育現場との連携を継続して行った。展示会では着実にリピーターが増加している。特に体験型展示や実際の遺物に触れられる展示方法が、好評であることは毎回実感として受けとめられるが、一方で開催場所のわかりにくさ等、広報活動や、よりわかりやすい展示方法の模索等、改善すべき点も多く、今後も改善を加えながら、様々な形での展示・公開活動に取り組んでいきたい。

2004年度は国立大学法人化して最初の年にあたり、本センターも法人理事がセンター長を兼務し、副センター長職を設けて新たな体制での運営がスタートした。上記の活動のほか、特に安全衛生の観点からの施設・設備の点検・整備にも力を入れた。設備面の充実に努力するとともに、専任職員の意識の向上、調査・研究面での内的な質の向上にも尽力していきたい。　（岩崎）

付　編

岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

1．岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程

(1)　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

（平成16年４月１日 岡大規程第93号）

（趣旨）

第１条　この規程は、国立大学法人岡山大学管理学則（平成16年岡大学則第１号。以下「管理学則」という。）第26条の規定に基づき、管理学則第21条の規定により学内共同利用施設として置かれる岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

（目的）

第２条　センターは、岡山大学（以下「本学」という。）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

一　埋蔵文化財の発掘調査に関すること。

二　発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。

三　埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。

四　その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項。

（自己評価等）

第３条　センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

２　前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けることを原則とする。

（教育研究等の状況の公表）

第４条　センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

（センター長）

第５条　センターにセンター長を置く。

２　センター長は、国立大学法人岡山大学役員規則（平成16年岡大規則第３号）第５条第１項第５号に規定する財務・施設担当理事をもって充てる。

３　センター長は、センターを代表し、その業務を総括する。

（副センター長）

第６条　センターに副センター長を置く。

２　副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。

３　副センター長は、センター長の職務を助ける。

４　副センター長の任期は、２年とし、再任を妨げない。

（調査研究室）

第７条　センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

２　調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。

３　室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

４　室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。

５　室長の任期は、２年とし、再任を妨げない。

６　調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

（調査研究専門委員）

第８条　センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

２　専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

3　専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

（管理運営の基本方針等）

第9条　センターの管理運営の基本方針等は、役員会で審議する。

（運営委員会）

第10条　センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2　運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。

（事務）

第11条　センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

（雑則）

第12条　この規程に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項は、別に定める。

附　則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

(2)　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会内規

（平成16年4月1日
学　長　裁　定）

（趣旨）

第1条　この内規は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（平成16年岡大規程第93号）第10条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第2条　運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

（組織）

第3条　運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

一　埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二　埋蔵文化財調査研究センター副センター長

三　岡山大学の教授のうちからセンター長の命じた者若干名

四　センターの調査研究専門委員のうちからセンター長の命じた者1人

五　センターの調査研究室長

六　施設企画部長

2　前項第3号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

（委員長）

第4条　運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2　委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3　委員長に事故があるときには、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

（委員以外の者の出席）

第5条　委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

（事務）

第6条　運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

附　則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

2．2004年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織

(1) センター組織一覧

〈埋蔵文化財調査研究センター長〉阿部　健：併、財務・施設担当理事
　運営委員会
〈副センター長〉稲田孝司：併、大学院文化科学研究科教授
〈調査研究専門委員〉
沖　陽子：環境理工学部教授
今津勝紀：文学部助教授
鈴木茂之：大学院自然科学研究科助教授
〈調査研究室長〉山本悦世：専・埋文センター助教授
〈調 査 研 究 員〉岩崎志保・高田寛太・野崎貴博・光本　順・横田美香（2004年５月まで）：専・埋文センター助手
〈非 常 勤 職 員〉景山明香：技術補佐員
井口三智子・片山純子・黒藪美代子：補助員

(2) 運営委員会

【委　員】

阿部　健　財務・施設担当理事（センター長）
稲田孝司　大学院文化科学研究科教授（副センター長）
新納　泉　文学部教授
久野修義　文学部教授
大塚愛二　大学院医歯学総合研究科教授
柴田次夫　大学院自然科学研究科教授
沖　陽子　環境理工学部教授（調査研究専門委員）
山本悦世　埋蔵文化財調査研究センター助教授（調査研究室長）
斎藤健次　施設企画部長

【2004年度協議・決定事項】

第55回　2004年６月７日
- 平成15年度決算について
- 平成16年度事業計画について
- 平成16年度予算について
- その他

第56回　2005年１月11日
- 平成17年度予算について
- 平成16年度発掘調査の報告について
- 平成17年度埋蔵文化財調査研究センター事業計画について
- 助手の後任について

3．岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

平成12年５月15日
埋蔵文化財調査研究センター長
施　設　部　長

Ⅰ．請負業者が留意すべき事項

1．請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
2．発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること。

3．工事用電力の保安責任者をおくこと。
4．非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。
5．重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

Ⅱ．発掘現場で注意すべき事項

1．服装・装備・用具等
1）安全で機能的な服装にする。
2）平坦面から２m以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
3）ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
4）グラインダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
5）スコップ・草削りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。
2．掘削
1）のり面の角度
造成土：通常の土壌の場合は50～60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。
堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。
発掘区の壁際を深さ1.5m以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の巾は、60cm以上とする。
2）のり面の保護
のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。
3）深い遺構（深さ1.5m以上の遺構）
遺構掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。
なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。
3．高所（高さ２m以上の場所）での作業
1）作業中には安全帯を使用する。
2）架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
3）２段以上の架台は、分解して移動させる。
4．発掘用機械類の操作
（ベルトコンベアー・ポンプ等）
1）調査用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
2）ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。
3）ベルトコンベアーを重ねたつなぎ目の部分には、なるべく土が落ちないような措置をする。
4）原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
5）ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。
（重機関係）
1）重機の免許所有者以外は運転しない。
2）運転者は、周囲の安全に注意する。
3）稼働中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。
5．健康管理
1）作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

Ⅲ．その他

1）作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
2）調査区の状況や遺構などの特殊性・重要性等により、上記の２の１）～３）どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

付　　表

付表１　1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）

年度	地区名		種類	所属	調査名称	調査組織	調査面積（㎡）	文献	備考
1980	鹿田		立会	歯	同附属病院棟新営	岡山市教育委員会	8		
1981	津島南	BD26	〃	農	寄宿舎新営	〃			
	津島北		〃	文法	合併処理槽施設	〃			
	津島北		〃	文法経	合併処理槽施設	〃			
	津島南	BD09、BC09～11	〃		基幹整備（共同溝取付）	〃			
	津島南	BD～BE04～07	〃		陸上競技場改修（配水管施設）	〃			
	鹿田		〃	医病	高気圧治療室新営	〃			
	〃		〃	〃	動物実験棟新営	〃 岡山県教育委員会			大学が市教委への確認調査の依頼をせずに掘削。その後、岡山市・岡山県教委が残存壁面等の調査を実施
	〃		〃	〃	病理解剖体臓器処理保管庫新営	岡山市教育委員会			
	〃		〃	医	運動場改修	〃			
1982	津島	AV06・10、AW05・14、AX08、BD07、BE10	試掘		排水基幹整備	〃			津島AW14区で弥生時代包含層確認、協議→津島岡大遺跡第１次調査へ
	津島北	AW14	発掘	法文	排水集中槽（NP－１）埋設	岡山大学	24.0	3	**小橋法目黒遺跡：津島岡大第１次調査**
	津島南		試掘	学	武道館新営	岡山市教育委員会	2.3		
	津島北	AY15・16	〃	法経	校舎新営	〃	7.0		
	鹿田		〃	医	標本保存庫新営	岡山県教育委員会	8.0		
	〃		〃	医病	外来診療棟新営	〃 岡山市教育委員会	4.0	2	
	〃		立会	医	動物実験施設関連排水管・ガス管埋設	岡山県教育委員会		1	
	鹿田	AE～AN22、AE22～26	〃	歯	電話ケーブル埋設	〃 岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室			

文献

１．光永真一　1983「岡山大学医学部附属病院動物実施設新営工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　岡山県教育委員会
２．河本　清　1983「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　岡山県教育委員会
３．吉留秀敏　1985『岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第１集　岡山大学埋蔵文化財調査室

付表２　2003年度以前の構内主要調査（1983～2003年度）

＊凡例・総合番号：調査の地区別通し番号（立会調査は選択的に保存）
立会調査で、付表に保存する基準
①中世土層以下を確認した調査②明確な遺構・遺物を確認した調査
発掘調査には番号に○を付している。
確認調査で、その後の発掘調査範囲内に入ったものは、範囲内の番号記載を省き、全てが範囲内のものには総合番号に（　）を付している。
・番号：年度別報告番号

付表２－(1)　発掘調査

〈津島地区：津島岡大遺跡〉

総合番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積（㎡）	概要	文献
＊1	1982	－	AW14	文	小橋法目黒遺跡（津島岡大遺跡第１次調査）：排水集中槽（NP－１）埋設	82.10.28～11.24	24	弥生時代中期・古代溝	3
①	1983	11	BE14・18、BF17・18、BG14、BH14・15	農	津島岡大遺跡第２次調査：排水管埋設	84.1.9～3.5	265	弥生時代早～前期集落	4
②	1983	12	BH13	農	津島岡大遺跡第２次調査：合併処理槽埋設	11.14～11.22 84.1.9～3.5	276	弥生時代早～前期水田関連遺構（溝他）	4
⑮	1986 1987	2 1	AV00、AW00・01	学	津島岡大遺跡第３次調査：男子学生寮	12.1～87.6.18、8.24～9.5	1550	縄文時代後期～弥生時代早期の貯蔵穴と河道および集落、弥生時代の前期～近代の水田・溝、古代の条里関連溝	19
⑯	1986	3	BF・BG09	学	津島岡大遺跡第４次調査：屋内運動場	87.1.19～1.22	70	弥生時代前期の溝、中世河道	6

総合番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積(㎡)	概要	文献
㉖	1988	1	AY06～08、AZ06・07	大自	津島岡大遺跡第５次調査：自然科学研究科棟	6.27～89.3.19	1537	縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴と河道・弥生時代末～近世の水田関連遺構	27
㉗	1988 1989	2 1	AV・AW04・05	工	津島岡大遺跡第６次調査：生物応用工学科棟	9.20～89.5.31	600	縄文時代後期の貯蔵穴と河道、古代条里関連溝、弥生時代前期～近世の水田・溝	35
㉘	1988	3	AV・AW05・06	工	津島岡大遺跡第７次調査：情報工学科棟	10.12～89.3.31	800	縄文後期集落、弥生時代前期～近世水田	35
㉙	1990	1	AY・AZ08	大自	津島岡大遺跡第５次調査：自然科学研究科棟	4.3～4.21	90	古墳時代後期の溝	27
㊹	1991	2	BD18・19	農・薬	津島岡大遺跡第８次調査（A地点）：遺伝子実験施設	7.23～12.25	650	縄文時代の土坑、弥生時代～近世の溝	32
㊺	1991	3	BH13	農・薬	津島岡大遺跡第８次調査（B地点）：合併処理槽	7.23～12.2	140	弥生時代溝、古代～近世水田	32
㊿	1992	1	AU～AW04	工	津島岡大遺跡第９次調査：生体機能応用工学科棟	7.1～93.1.29	650	縄文時代後期の貯蔵穴と河道、弥生時代～近世の水田址	47
㊿①	1992 1993	2 1	BB～BC10～11	保	津島岡大遺跡第10次調査：保健管理センター	93.2.1 ～ 3.31、4.17～7.31	400	弥生時代後期～古墳時代集落、近世耕作関連遺構	64
㊿④	1993	2	AV～AW11～12	情	津島岡大遺跡第11次調査：総合情報処理センター	9.14～94.1.11	640	縄文後期遺構	36
㊿⑤	1993 1994	3 1	AV～AW13～14	図	津島岡大遺跡第12次調査：図書館	94.2.9 ～ 3.31、4.1～11.30	1472	弥生時代前期水田、弥生時代時代中期～古墳時代溝、古代～近世溝（条里関連）	64
㊿④	1994 1995	2 1	AW～AX11～12	事	津島岡大遺跡第13次調査：福利厚生施設北棟	10.6 ～ 11.30、95.7.10～10.4	816	縄文時代後期ピット、弥生時代水田、弥生～古墳時代溝、近代耕作面	41
㊿⑨	1995	2	BB～BC12・13	事	津島岡大遺跡第14次調査：福利厚生施設南棟	10.25～96.2.14	856	弥生時代前期水田、弥生～古墳時代の溝	46
㊼⓪	1995 1996	3 1	AW00・01	サ	津島岡大遺跡第15次調査：サテライトベンチャービジネスラボラトリー	96.1.16～4.25	1600	縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴と河道、縄文時代後期集落、弥生時代前期水田、古墳～中世水田・溝	38 72
㊼④	1996	2	BD19～20	農薬	津島岡大遺跡第16次調査：動物実験棟新営	96.5.7～15	30.3	A地点：縄文時代と古墳時代の土坑、B地点：中世の溝、古代の柱穴列、弥生時代の水田	44
㊼⑤	1996	3	AW02～04	環	津島岡大遺跡第17次調査：環境理工学部新営	96.5.21～1.9	1451	縄文時代後期の集落、弥生時代の溝・水田、古代の水田	44
㊽⑤	1998	2	BB11	事	津島岡大遺跡第18次調査：福利施設（南）新営に伴うポンプ槽取設	98.4.7～4.10	16	古代の溝状遺構	53
㊽⑥	1998	3	AZ09・10	理	津島岡大遺跡第19次調査：コラボレーションセンター	98.7.27～99.2.18	1019	縄文後期遺構、弥生前期の河道、古墳時代・中世の溝、近世道路状遺構・溝	65
㊽⑦	1998	5	AY07	環	津島岡大第20次調査：校舎（Ⅰ期）新営に伴うポンプ槽取設	98.10.19～28	16	黒色土上面に溝、中世溝	53
㊽⑧	1998	6	AX09	工	津島岡大遺跡第21次調査：エレベーター設置	98.11.6～24	30.2	縄文時代中期土坑、弥生時代早期～前期溝、古代土坑・溝	65
㊽⑨	1998 1999	8 2	AW02・03	環	津島岡大遺跡第22次調査：校舎（Ⅱ期）	1999.3.1～7.12	773.5	縄文後期河道・集落、弥生時代河道・水田畦畔、古墳時代溝、古代～近世溝（条里関連）・水田畦畔	53
⑩	1999 2000	5 1	AZ15・BA14	大文	津島岡大遺跡第23次調査：総合研究棟	00.2.3～7.28	1339	縄文時代後期河道・杭列、弥生前期河道・堰・溝、弥生中期～近世溝	56
⑪	2000	3	AZ14	大文	津島岡大遺跡第24次調査：総合研究棟渡り廊下建設	00.12.5～14	34.2	縄文時代後期河道・杭列	61
⑫	2000	4	BA15	農	津島岡大遺跡第25次調査：散水施設設置	01.1.29～31	20.0	中世～近世の溝・杭	61
⑬	2000 2001	5 1	BC～BD14～15	事	津島岡大遺跡第26次調査：事務局	01.3.26～9.30	1550	縄文～弥生時代の河道・貯蔵穴・土坑・炉、近世の溝・堰	56 61
⑫①	2001 2002	2 1	BB～BC14～15	－	津島岡大遺跡第27次調査：創立50周年記念会館	02.2.1～6.24	1648	縄文時代後期の炉、弥生時代・古墳時代の溝、中世の畦畔（条里関連）	66 68
⑫②	2002	2	AW～AY06～O8	大自	津島岡大遺跡第28次調査：自然科学系総合研究棟	4.30～9.20、11.28～03.1.15	1798	弥生時代前期の畦畔、中世～古代の畝・溝	71
⑫③	2002	4	BF16	農	津島岡大遺跡第29次調査：共同溝	02.9.18～10.3	62.6	弥生～古墳時代の溝・ピット	71

〈鹿田地区：鹿田遺跡〉

総合番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積(㎡)	概要	文献
①	1983 1984	9	AU～BD28～40	医病	鹿田遺跡第１次調査：外来診療棟	7.27～11.22 84.1.9～8.31	2188	弥生時代中期後半～中世集落	7
②	1983	10	BG～BI18～21	医病	鹿田遺跡第２次調査：NMR-CT室	8.1～12.30	176	弥生時代後期～中世集落	7
⑩	1986	1	CN～CU27・28、CT～CY19～27、CX～DD16～25、DD～DG22・23	医短	鹿田遺跡第３次調査：校舎	6.2～11.29	2390	中世の集落、古代の河道と橋脚	10
⑫	1987	3	DD～DF25、DG～DI27・28	医短	鹿田遺跡第４次調査：校舎周辺の配管	11.2～11.21	30	古代の河道	10
⑬	1987	2	BB～BH35～42	医病	鹿田遺跡第５次調査：管理棟	10.6～88.3.2 88.3.23～3.31	1192	弥生時代中期後半～中世の集落	24

総合番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積(㎡)	概要	文献
⑯	1990 1991	2 1	BW～CC67～71	ア	鹿田遺跡第６次調査 ：アイソトープ総合センター	11.20～91.6.30	690	弥生～古墳時代の集落、中世集落	40
㉕	1997 1998	4 1	BR55～BX61、 BY56～57	医	鹿田遺跡第７次調査 ：基礎医学棟	98.2.27～8.6	829	古墳時代初頭・中世の集落、近世の水田・溝	50 53
㉗	1998	4	BP～BS30～32	医病	鹿田遺跡第８次調査：RI治療室	98.7.28～9.1	165	古墳時代溝・中世溝	53
㉘	1998 1999	7 1	CD33～37、 CE・CF28～37、 CG～CJ20～37、 CK・CL25～37	医病	鹿田遺跡第９次調査 ：病棟	98.11.27～ 99. 5.11	2088	弥生時代水田・溝、中世～近世集落	53
㉛	1999	3	CD・CE10～12、 DD～DF16～22	医病	鹿田遺跡第10次調査 ：共同溝関連	99.5.7～99.10.14	244.1	古代の杭列（河道内）、弥生時代ピット、近世溝	56
㉜	1999	4	CD～CM19～42	医病	鹿田遺跡第11次調査 ：病棟	99.8.19～12.22	2020	弥生時代水田畦畔、古代池状遺構、中世～近世集落	56
㊵	2000 2001	2 －	CO～CV35～44、 CN・CM38～41、 CN28～38	医病	鹿田遺跡第12次調査 ：エネルギーセンター	00.10. 2～ 01.05.10	1897	弥生時代溝・河道、古墳時代・中世集落、近世土坑・溝	56 61
㊻	2002	3	BL～BR46～51	大医歯	鹿田遺跡第13次調査 ：総合教育研究棟	02.4.30～10.25	934	弥生時代の溝、古墳時代の土器溜まり・溝、中世の集落、近世土坑群	71
㊺	2003	1	CD～CM12～20	医病	鹿田遺跡第14次調査 ：病棟（Ⅱ期）	03.7.31～12.17	1331	弥生～古墳時代の畦畔・溝、中世の井戸・土坑・溝・近世のため池・土坑	74
㊻	2003	2	BQ～BS45・46	大医歯	鹿田遺跡第15次調査 ：総合教育研究棟外構工事	03.10.16～10.29	30.4	古墳時代初頭の井戸・溝、中世溝群	74

〈三朝地区：福呂遺跡〉

総合番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積(㎡)	概要	文献
①	1997	1・2	－	固	福呂遺跡第１次調査 ：実験研究棟	97.5.10～20、 7.28～31	269	縄文時代早期・弥生時代中期・中世・近世集落	55
②	1997	3	－	固	福呂遺跡第２次調査：実験研究棟新営に伴う工事スロープ部分	97.11.25～12.5	120	近世・中世・古代の集落	55

付表２－(2)　試掘・確認調査

〈津島地区：津島岡大遺跡〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
(3)	1983	1	BH13	農	合併処理槽予定地	2.5	－	→津島岡大第２次調査：1983年度	1
4	1983	2	BF17	農	排水管中間ポンプ槽予定地	3.5	－	－	1
5	1983	3	BE～BG14、 BE・BH15、 BE18、BF16～18、 BC18	農	排水管埋設予定地	2.0	－	29ヶ所で試掘→津島岡大第２次調査：1983年度	1
6	1983	4	BF22・23	農	農場畜舎新営予定地	2.0～3.0	0.6	２ヶ所、土器片〈1987年度工事立会〉	1
(7)	1983	5	BC・BD15	事	大学事務局新営予定地	2.0～3.0	0.9	２ヶ所、→津島岡大第26次調査：2000年度	1
(8)	1983	6	BB10	保	保健管理センター新営予定地	2.0～3.0	0.8	→津島岡大第10次調査：1999年度	1
9	1983	7	BI16	事	津島宿舎新営予定地	0.9	0.9	土器片〈1987年度工事立会〉	1
10	1983	8	AW05	工	校舎新営予定地	3.0	1	土器片	1
12	1985	1	BE08	教養	講義棟予定地	3.5	1.2	遺構など未確認〈1986年度工事立会〉	5
13	1985	2	AX02	教育	研究棟予定地	2.6～3.4	1.2	３ヶ所、縄文～弥生土器出土	5
14	1985	3	AV・AW99～01	学	男子学生寮新営予定地	2.0～3.0	1	→津島岡大第３次調査：1986年度	5
(17)	1986	3	BF・BG09	学	屋内運動場新営予定地	2.4、1.2～1.7	1.1	→津島岡大第４次調査：1986年度	6
(18)	1986	4	AY・AZ07	大自	自然科学研究科棟新営予定地	1.6～3.2	0.6～0.8	→津島岡大第５次調査：1988年度	6
22	1987	4	AP02（土生地区）	事	外国人宿舎建設予定地	2.2～2.8	－	縄文時代・弥生時代・近世の遺構面	8
(23)	1987	5	AV11	情	総合情報処理センター新営予定地	2.0～3.0	2	→津島岡大第11次調査：1993年度	8
24	1987	6	AY09	理	身体障害者用エレベーター建設予定地	3.0～3.5	約1.0	中世・近世の遺物、古代・中世の水田〈継続して調査〉	8
25	1987	7	BD09	教養	身体障害者用エレベーター建設予定地	2.5	0.7	縄文時代遺構、縄文・中世・近世土器〈継続して調査〉	8
29	1988	17	AX04･06、AW04	工	校舎建設予定地	2.0～3.5		→津島岡大第６・７次調査：1988年度	11
30	1988	19	BD18・19	農･薬	動物実験飼育施設・遺伝子実験施設	2.3	1.1～1.2	→津島岡大第８次調査：1991年度	11
31	1988	20	BC29	事	国際交流会館	2.5	1.2	中世・近世の遺物出土〈1988年度工事立会〉	11
33	1989	2	AZ・BA05	教育	身体障害者用エレベーター	2.5	0.8	縄文時代後期・弥生時代早期の落込み、縄文時代後期～中世土器片〈継続して調査、面積38.5㎡〉	14
34	1989	3	AZ17	大自	合併処理槽設置予定地	4.0	1.6～2.0	中世～明治の水田の畦畔・溝〈1989年度工事立会〉	14
35	1989	4	BD02	学	学生合宿所予定地	2.0～3.2	1	弥生時代早・前期の畦畔〈1989年度工事立会〉	14
(36)	1989	5	AV・AW13	図	図書館新営予定地	3.0	1.4～1.6	→津島岡大第12次調査：1993年度	14
40	1990	3	BC02	学	学生合宿所ポンプ槽予定地	2.5	1.1	弥生時代前期畦畔、中世土器片	18
41	1990	6	AW・AX11	事	福利厚生施設予定地	3.9	1.4～1.6	→津島岡大第13次調査：1994年度	18

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
56	1993	3	BE～BF22～23	農	農学部汎用耕地実験実習施設	1.5		中～近世耕作土	30
65	1994	3	BD20	農・薬	動物実験施設	2.0	0.9	GL－1.4mで黒色土、縄文土器1点出土〈盛り土保存〉	33
71	1995	4	BE26	事	国際交流会館新営予定地	4.1・2.4	1.6	明治～中世の土層確認、以下は湿地状態、遺構・遺物無し（明治畝のみ）〈工事立会〉	38
72	1995	5	AW02・03	環	環境理工学部新営	2.4	1.2	→津島岡大第17次調査：1996年度	38
73	1995	6	BF07	学	ボクシング部ボックス移設	3.0	3	標高2.5mで黒色土、弥生～古墳時代の溝2条、古代溝1条	38
(90)	1998	9	AZ09	理	コラボレーションセンター新営に伴う試掘調査	2.7～3.4	1.3	→津島岡大第19次調査：1998年度	53
(91)	1998	10	AW02・03	環	校舎（Ⅱ期）新営に伴う調査	4.5	1.2	→津島岡大第22次調査：1998年度	53
92	1998	13	AW04	工	システム工学科棟新営に伴う調査	2.8	1.0	GL－1.8mで黒色土、縄文後期の遺構	53
93	1998	14	AU02・03・06、AV03	事	遺跡保護区整備に伴う調査	2.4～3.8	0.8～1.6	5カ所、TP1・3・5：微高地状、TP2・4は低湿地状、TP1で弥生溝、TP3で弥生溝・ピット、TP4で中世溝	53
(105)	1999	6	AZ15、BA14	文法経	総合校舎新営に伴う調査	2.7、3.5	0.8 1.1	→津島岡大第23次調査：1999年度	56
106	1999	7	AV08	工	電波暗室新営に伴う調査	1.2	0.2	現表土以下、基盤となる岩盤層	56
114	2000	6	AV00、AX00・02・03、AZ06、AW08	－	縄文～弥生時代における環境復元に伴う調査	2.6～3.2	1.7～0.9	6カ所掘削、縄文・弥生時代の微高地、古代溝を確認	61
115	2000	7	BB14	－	創立50周年記念館新営に伴う調査	2	0.8	→津島岡大第27次調査：2001年度	61
129	2002	5	BD15	事	事務局旧本部棟移転に伴う調査	2.1		黒色土の落ち検出	71

〈鹿田地区：鹿田遺跡〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
(4)	1984	1	BU30・31	医病	西病棟北側受水槽予定地	1.4	0.5～0.7	中世土器・包含層確認〈盛土保存〉	2
(5)	1984	2	CT・CU25、CZ19・20・23・24	医短	医療短期大学部校舎新営予定地	2.7	0.8～1.0	→鹿田第3次調査：1986年度	2
6	1985	4	AJ33、AI40、AJ・AK26	医病	外来診療棟環境整備工事に先立つ範囲確認調査	2.2～3.0	0.9～1.4	弥生時代～中世の遺物	5
(17)	1990	5	BY・BZ68	ア	アイソトープ総合センター予定地	2.3	1.2～1.3	→鹿田第6次調査：1990年度	18
(26)	1997	8	BT57	医	基礎医学棟	2.2	0.9	→鹿田第7次調査：1997年度	50
29	1998	11	CF・CG43・44、CH25・26、CK35・36、CK15	医病	病棟新営に伴う調査	2.0～2.4	1.0	→鹿田第9次調査：1998年度	53

〈倉敷地区〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
1	1990	4	－	資生研	資源生物科学研究所遺跡確認調査	2.5	0.7	中世後半以降の土器片	18
2	1998	12	－	資生研	バイオ実験棟新営工事に伴う調査	1.5	0.4	近世干拓地内、遺構未確認	53

〈三朝地区：福呂遺跡〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
3	1997	5・6	－	固	実験研究棟新営工事に伴う試掘調査	1.66～2.1	0.8	2カ所→福呂第2次調査：1997年度	50

付表2－(3)　立会調査

〈津島地区：津島岡大遺跡〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
11	1984	20	BI15～17	事	南宿舎合併処理槽関係配水管埋設	1.0～2.2	1.0	溝・土坑、弥生土器・須恵器	2
19	1986	12	BE08・09	教養	校舎新営	2.3	1.3	中・近世の溝・土器	6
20	1986	21	BG08	学	ハンドボールコート新設	0.2～2.0	0.8	黒色土確認	6
21	1986	26	BF07・08	教養	校舎新営に伴う電気配管	1.8	0.9	中世包含層	6
32	1988	17	BG10・11	教養	テニスコート夜間照明施設	2.2	1.5	GL－約2mで黒色土、西に向かう落ちを推定	11
37	1989	8	AZ08	大自	自然科学研究科棟新営：工事用道路	1.4		弥生時代後期水田・溝	14
38	1989	10	AU05	工	校舎新営に伴う電柱架設	1.9	1.0	黒色土確認	14
42	1990	16 19	AV04～10	事	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事Ⅰ：電柱移設	0.4～3.0	0.6～1.4	5ヶ所、黒色土、条里南北溝	18
43	1990	20	BC02～04、BD03・04	事	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事Ⅰ：学生合宿所給排水管設置	2.3	1.2	GL－2.3mで黒色土	18
46	1991	9	BC18	農・薬	防火用水撤去	2.0	0.8	基盤層まで掘削、石鏃出土	21
47	1991	17	BB16	事	津島地区基幹整備（電気）：ハンドホール・アース板	1.7～1.8	0.5	2ヶ所、明治層～淡灰色粘土層	21
48	1991	19	BD15	事	津島地区基幹整備（電気）：アース板	1.7	1.0	GL－1.5mで黒色土	21
49	1991	40	BC・BE・BF12	事	南北道路街灯設置	1.5		3ヶ所、GL－1.4mで古代層	21
52	1992	15	BD18	農・薬	遺伝子実験施設ハンドホール設置	1.5	0.75～1.1	縄文後期層まで掘削、溝2本検出	25
53	1992	34	AV12	事	附属図書館北側駐車場整備	3	1.7	造成土以下は粘土層	25

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
57	1993	17	BB～BC10～12	保	保健管理センター新営に伴う外構工事ほか：電気配線	1.8	0.6～0.7	保健管理センター本調査と同じ層序、黒褐色土はGL－1.15～1.7m、その直下に基盤層	30
58	1993	19	BB11	保	保健管理センター新営に伴う旧棟改修：電気配線	1.1	0.8	弥生土器片、工法変更	30
59	1993	23	BA07	事	津島地区基幹整備：RI共同利用施設排水処理施設他設置	3.2	－	明治～中世層・暗褐色土層、古代溝？、縄文晩期？土器片	30
60	1993	28	BD～BE13	事	津島地区環境整備：南北道路沿水路ボックスカルバート敷設	1.5	1.0	近世～中世層を確認	30
61	1993	33	BB～BG12～13	事	津島地区環境整備：水銀灯設置	1.8	0.5～1.2	10ヶ所、近世～中世層まで掘削、一部で暗褐色土層を確認	30
62	1993	34	BD～BE12・13	事	津島地区環境整備：信号機設置	1.6	1.0	近世から中世層、一部で暗褐色土層	30
63	1993	39～41	BB05～07、BC05・41	学	野球場バックネット・防球ネット改修	2.0～3.2	1.0	GL－1.2～2.0m付近で黒色土、以下は黄色砂～青灰色粘土	30
66	1994	9	BD·BE·BF04～07	事	陸上競技場照明灯設置	2	0.96	オーガー掘削（径80cm・深さ10m）、GL－1.92～2.0mで黒色土	33
67	1994	13	AV10、AW10、AU11	情	総合情報処理センター新営電気工事	2.2	1.5	近世2面、中世（近世か？）1面、GL－1.7mで黒色土、近世溝	33
68	1994	20	BD20	農	焼却場	2.2	1.5	GL－1.9mで黒色土	33
76	1996	4	BC18	農薬	動物実験棟新営に伴う造成土取り	2.2	1.9	黒色土層付近まで掘削	44
77	1996	5	BD16～19	農薬	動物実験棟新営に伴うハンドホール設置工事	1.3	－	4ヶ所、造成土以下に5層確認	44
78	1996	12	AV02、AV03、AV04、AV99、AW02、AW04	サ	サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営：外灯設置工事	1.0～1.5	0.76～1.1	6ヶ所、明治層2面・近世層2面・中世層？1面・弥生層？1面	44
79	1996	13	AV03～AW03	サ	サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営：配管設置工事	2	0.95	弥生時代層まで掘削、古墳時代前期の遺構・遺物	44
80	1996	18	AW03	環	校舎新営予定地電柱移設工事	2	－	黒色土まで掘削	44
81	1996	25	AV13	図	附属図書館新営：雨水桝・外構工事	1.3	1.0	造成土以下に青灰色粘質土・黄褐色粘質土・灰褐色粘質土	44
82	1997	16	BB13～BH13	事	南北道路ガス管埋設工事	1.5	－	中世層まで掘削	50
83	1997	19	AW11～BA13	事	南北道路ガス管埋設工事	1.5	－	中世層	50
84	1997	24	BC12	事	福利厚生施設新営に伴う共同溝新設工事	2.0	0.8	GL－1.65mで黒色土、古代～近世の溝	50
94	1998	15	BA09	事	構内外灯設置工事	1.47	1.0	GL－1.42mで黒色土	53
95	1998	22	AZ09、BA09	理	コラボレーションセンター支障配管布設替工事	1.4	1.0	GL－1.4mで黒色土	53
96	1998	24	BB12、BC12	事	南福利街灯設置工事	1.4	0.95	中世層まで掘削	53
97	1998	31	AY06	環	校舎新営に伴うガス管埋設工事	1.2～1.4	0.65～0.95	中世層まで掘削、10ヶ所	53
98	1998	34	BC10	事	学生会館改修に伴うトラップ桝撤去工事	2.2	1.45	GL－1.7mまで灰褐色粘土層、GL－2.2mまで青灰色粘土層	53
99	1998	35	BA00	事	NTT電柱移設工事	1.5	0.9	造成土以下に褐色系粘質土	53
100	1998	41	AX03～AY07	環	実験排水管埋設工事	1.4	0.6～1.4	10ヶ所、5地点で中世層、2地点で古代層、1地点で古墳時代層まで掘削	53
101	1998	42	AU02	環	馬場移設に伴う樹木移植	2.2	1.1～1.3	GL－2mで弥生後期層、GL－2.2mで縄文基盤層	53
102	1998	44	AV03、AW03	環	校舎新営に伴う生活排水桝設置工事	1.97	1.4	古墳時代層まで掘削、須恵器・土師器	53
103	1998	48	AW03	環	校舎新営に伴うガス管埋設工事	1.45	1.0	中世層まで掘削	53
107	1999	8	AY00、AZ01・03	施	構内外灯設置工事	1.15～1.35	0.5～1.2	3ヶ所で黒色土（GL－0.85～1m）確認	56
108	1999	12	AZ08・09	理	コラボレーションセンター新営工事に伴うハンドホール	1.48～2.1	1.03～1.16	2ヶ所、1ヶ所で古墳時代層まで掘削	56
109	1999	13	AW02	環	校舎（Ⅱ期）新営に伴うスロープ設置工事	3.5	1.2	調査面積25㎡、黒色土下面まで調査、近代土坑・古代溝・縄文後期ピット	56
110	1999	42	AZ09	理	コラボレーションセンター新営に伴う排水桝	1.0～1.2	0.8～1.0	6ヶ所、1ヶ所で黒色土対応層まで掘削	56
116	2000	17	BA12	事	津島地区電柱工事	1.6	1.0	造成土下に灰色粘質土・暗茶褐色粘質土層	61
117	2000	23	AY09	理	校舎改修工事：理学部本館基礎補強工事	1.3	0.9	造成土下に暗青灰色粘質土・褐色粘質土・灰色粘質土	61
118	2000	28	AX10、AY10	理	校舎改修機械設備工事：電気	0.85～1.60	0.8～1.1	南側ハンドホールはGL－1.6mまで掘削、GL－1.52mで中世溝検出、南東から北西方向に向かって走行	61
119	2000	42	AW08、AX08	工	精密応用化学科棟都市ガス改修工事	1.6～2.05	1.45	GL－1.82mで明灰褐色粘土（中世？）	61
120	2000	44	BA16	大文	総合研究棟仮設電柱建柱工事	1.5～1.7	1.0	GL－1.4mで中世層？、軍庭園の築山、土塁を一部掘削	61
122	2001	4	AZ10	理	校舎改修電気設備工事	1.6	1.0～1.2	ハンドホール部分で中世溝	66
123	2001	11	BB～BC16	事	本部棟電柱設置工事	1.5～2.1	1.2～1.4	2ヶ所、GL－1.4mで灰色粘土、GL－2.1mまで谷部か？	66
124	2001	27	BB・BC13	事	本部棟車庫移設工事	0.5～1.6	1.0	2ヶ所、中世層まで掘削	66
125	2001	30	BB14	事	本部棟樹木移植	1.6	0.65～0.8	GL－1.4mに灰色粘質土層（古代）を確認	66

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
126	2001	31	BB14	事	本部棟車庫移設工事に伴う旧変電室基礎解体工事	1.05	0.45~0.75	12ヶ所掘削、中世層まで掘削	66
130	2002	29	BE15	農	校舎改修電気設備工事	1.8	1.5	3ヶ所、古代・古墳層まで掘削	71
131	2002	34	BC13~15	事	本部棟新設工事：排水桝・管路	1.2~2.5	0.7~1.2	突帯文土器・石器がまとまって出土、近世溝・弥生溝	71
132	2002	51	BB13	事	本部棟新営その他工事：雨水排水桝・管路	1.57	0.8	中世層と古代・古墳層を確認	71
133	2002	54	BB13・BD14	事	本部棟新営その他工事：外灯	0.95~1.9	0.8	2ヶ所で中世層と古代層まで掘削、GL−1.3mで黒色土	71
134	2002	55	BC07・09	教養	一般教育棟B棟外灯設置工事	1.0~1.26	0.95	4ヶ所、中世層まで掘削	71
135	2002	57	BB~BC14~15	事	創立五十周年記念館新築工事：汚水排水	1.0~2.3	0.85~1.0	一部黒色土上面まで掘削	71
136	2003	1	BB13~15	五十	創立五十周年記念館新築に伴う掘削（雨水排水桝・管埋設工事）	GL−1.3m	0.7~0.8	中世層まで掘削	74
137	2003	4	AX06	工	総合研究棟新営機械設備工事（ガス配管埋設工事）	GL−1.4m	0.9	古代層？まで掘削	74
138	2003	6	BC15	事	旧事務局庁舎改修電気設備工事	GL−2.43m	0.85	GL−1.9mで黒色土、GL−2.1mで縄文基盤層確認	74
139	2003	7	BB,BC18	農	農学部総合研究棟改修電気設備工事（仮設電力・電話引き込み建柱工事）	GL−1.7m	0.7	径0.5m、GL−1.2m前後で黒色土層、GL−1.5~1.6m前後で縄文後期基盤層確認	74
140	2003	8	AX06~BA06	工	総合研究棟新営その他工事（雨水排水）	GL−1.7m	0.7~0.8	標高3.3~3.4mで黒色土、弥生~古代の東西溝多数、近世・近代の東西溝・畦畔確認	74
141	2003	14	AW,AX06,07	工	総合研究棟新営電気設備工事（外灯）	GL−1.4m	−	中世層まで掘削	74
142	2003	15	AW~AX06~07	工	総合研究棟新営その他工事（排水）	GL−0.5~2.5m	1.6	桝で縄文基盤層まで掘削した箇所あり、弥生溝確認	74
143	2003	17	BC~BD15	事	旧事務局庁舎改修電気設備工事（外部給水・消火配管）	GL−2.75m	1.1	桝で、縄文基盤層確認	74
144	2003	21−1	BG~BH13	事	公共下水桝接続工事No.1区間 農学部合併処理槽	GL−1.8m	0.9	縄文基盤層まで掘削	74
145	2003	21−2	BE~BG10	事	公共下水桝接続工事No.2区間 体育館東~武道場西	GL−1.95~2.25m	0.8~0.9	桝で縄文基盤層、管路で弥生早・前期まで掘削、弥生溝・縄文土坑確認	74
146	2003	21−4	AZ16	事	公共下水桝接続工事No.4区間 文・法・経2号館西	GL−2.45m	1.5	縄文基盤層まで掘削、弥生溝確認	74
147	2003	21−5	BA10	事	公共下水桝接続工事No.5区間 理学部	GL−1.9m	0.7	中世頃の座主川を確認	74
148	2003	21−6	BG22	事	公共下水桝接続工事No.6区間 農学部4号館東	GL−1.5~1.9m	0.9~1.4	縄文基盤層まで掘削、弥生~古墳初頭ピット、近代畦畔状遺構確認	74
149	2003	21−7	BI16	事	公共下水桝接続工事No.7区間 津島宿泊所	GL−1.15~1.3m	0.8	中世層まで掘削	74
150	2003	21−8	BI15	事	公共下水桝接続工事No.8区間 南宿舎	GL−2.0~2.45m	1.1	縄文基盤層まで掘削	74

〈鹿田地区：鹿田遺跡〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
3	1983	23	AO~AW22	医病	外来診療棟蒸気配管埋設	1.3	−	弥生時代後期土器・分銅形土製品、貝集積	1
7	1985	6	AW ~ BH 23、BH・BI24	医病	外来診療棟関係屋外排水管埋設	1.3~1.7	0.7~1.3	中世・弥生の遺構・遺物	5
8	1985	12	AG31、AG24、AF23	医病	基幹環境整備緑化工事：電気配線ハンドホール掘削	1.2~1.7	0.9~1.3	3ヶ所、中世包含層・ピット	5
9	1986	9	BI~BN4	医病	記念館東側汚水管改修工事	0.8~1.3	0.8	中世包含層、土器出土	6
11	1986	24	CL~CR12、CR~CX13、CX~DA14	医短	護岸及び囲障工事	2	0.8~1.0	中世包含層	6
14	1987	8	BC37	医病	管理棟新営に伴う基礎杭確認	2.5		弥生時代包含層・遺構確認	8
15	1989	46	CE30・37・44、CJ・CK45、CL28・29	医病	旧管理棟跡地環境整備：外灯基礎	1.2~1.5	0.7~1.0	2ヶ所、中世層を確認	14
18	1992	29	BW71	ア	アイソトープセンターL形側溝・集水枡	1.4~1.5	0.9	中世溝1条	25
19	1992	41	CI73	医	テニスコート脇電柱埋設	1.2	1.0	古代土器1点	25
20	1994	5	DH60~62	医	護岸改修工事	1.5	0.8	近世層以下はすべて遺構埋土の可能性あり、溝3条・ピット9基	33
21	1995	11	BG・BI18	医病	鹿田地区基幹整備：附属病院連絡通路新設	1.5	1.0	造成土以下に茶褐色土・青灰色粘質土層、遺物なし	38
22	1995	14	CD07・08	医病	鹿田地区基幹整備：液酸タンク設置工事	2.3	1.0	中世2面確認、溝3条、溝内から中世・古代の土師器出土	38
23	1995	17	CD08~CC11	医病	鹿田地区基幹整備：附属病院液酸タンクU字溝埋設工事	1.23	0.85	包含層確認、中世土器細片、既設管・工事基礎などで区間全長の1/2程度は破壊	38
24	1995	23	DF56~67	医	防球ネット取設工事	3	0.8	径60cmを12ヶ所、その内4ヶ所で土器片・石器出土、調査区西寄りは、GL−2m以下は旧河道か。	38
30	1998	36	BV73、CN78	医	校舎新営に伴う仮設電柱工事	1.2	1.0	中世層まで掘削	53
33	1999	15	BV65~71	医	研究棟新営に伴う給排水桝・管路	1.2~1.4	0.9	中世層まで掘削	56

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
34	1999	18	BU65	医	研究棟新営に伴う検水槽	2.2	1.1	面積8.2㎡、近世溝、中世溝・ピット	56
35	1999	27	BY42・43、BI43・44	医病	基幹整備（電気設備）：地中配管	1.25～1.45	0.45～0.5	2ヶ所、中世層まで掘削、時期不明の遺構	56
36	1999	41	CF21～28、CF～CL28、CD～CF28～33	医病	病棟新営に伴う共同溝解体	1.7	－	面積18㎡、鹿田11次調査3区南側部分で中世ピット確認	56
37	1999	46	CN46～DE49	医病	病棟新営に伴う汚水桝・管路	2.3	1.2	古墳時代の井戸1基・土坑1基・中世溝等	56
38	1999	47	CM・CN・CP・CR・CT58、CV・DA・DC・DD・DF59	医	グラウンド防球ネットポール	2.0～2.3	－	11ヶ所、南側6ヶ所は河道、7～10ヶ所付近は微高地、最北端は河道	56
39	1999	48	BT51	医病	病棟新営に伴う汚水検水桝	2	1	造成土以下7層確認、古墳時代層まで掘削か。	56
41	2000	25	CD41～CN45	医病	病棟新営その他工事：管路・雨水桝	1.6～1.8	－	溝と思われる遺構など確認	61
42	2000	26	CN15・21・27、CO31・42、CS45、DV45	医	電柱及び外灯の埋設工事	1.6	－	7ヶ所、灰白色土層・淡褐色砂質土層・暗褐色砂質土層を確認、微高地部か。	61
43	2000	29	DI27	医	医学部ガス配管切り離し用バルブ取付工事	0.8～1.15	0.7	GL－0.85mで黄灰色粘質土	61
44	2000	47	DG～DJ28～67	医病	鹿田団地南側用水路境界擁壁改修	2.1～2.3	1.3～1.5	幅120mの壁面調査、古代の遺構・河道確認	61
45	2001	37	BR～CA43、CA43～55、CA44～CL45、BR～CA55	医	総合教育研究棟埋蔵文化財発掘調査に伴う機械設置工事	1.65	0.7～0.9	中世層まで掘削、中世土器が多数出土した地点あり。	66
47	2002	10	CH11～CN22	医	鹿田団地ガス配管埋設工事	1.0～1.3	0.87	中世層まで掘削	71
48	2002	19	BT・BU11	医病	鹿田団地ガス配管埋設工事	0.5～1.8	－	2ヶ所、GL－1.22mまで掘削した地点で中世または古代層確認	71
49	2002	22	CQ41～42	医病	エネルギーセンター棟新営その他工事：共同溝排水管	1.5	－	1ヶ所、包含層まで掘削	71
50	2002	25	CG41、CO34、CF43、CO38	医病	エネルギーセンター棟新営その他工事：外灯	1.47～1.66	－	4ヶ所、中世層まで掘削	71
51	2002	27	CV36～45	医病	エネルギーセンター棟新営その他工事：外溝	0.9～1.9	0.9	中世の井戸・柱穴・溝	71
52	2002	36	BI～BS45～53	大医歯	総合教育研究棟新営その他工事	1.85～2.0	0.8～1.0	5ヶ所、中世層まで掘削	71
53	2002	52	DC67	事	本部棟新営その他工事：植採移植	1.25	－	中世層	71
54	2002	56	BG18	医病	旧混合病棟グリーストラップ改修	1.68	－	底面で弥生～古墳層、土器小片	71
55	2003	5	BS～BZ45、CA～CO46、CO45	医	総合教育研究棟新営その他工事（屋外排水）	1.7	0.7～1.0	弥生中期？包含層まで掘削、近世土坑・中世ピット多数確認、低地部確認	74
56	2003	9	BL～BS45～53	医	総合教育研究棟外構工事（雨水・汚水・実験排水）	0.8～1.75	0.7～0.9	弥生中期包含層まで掘削した箇所あり、古墳時代溝、中世井戸、近世土坑等を確認	74
57	2003	10	BR～BS50～54	医	総合教育研究棟給水配管埋設工事	1.33	0.8	一部で中世層確認	74
58	2003	13	BR53、BL54	医	総合教育研究棟外構工事（外灯）	1.4	0.8	中世層まで掘削	74

〈東山地区〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
1	1983	13	－	教育	附属中学校新営	4.0～5.0	－	シルト層中	1
2	1997	29	－	教育	附属小・中学校他囲障改修工事	1.2	0.79	GL－1.1mで近世水田層、溝1条	50

〈三朝地区：福呂遺跡〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
4	1997	18	－	固	実験研究棟新営に伴う電気埋設管路工事	1.0	－	GL－1.0mで中世包含層は東に向かい上昇	50

付表３　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要（2003年度現在）

所属	種類	調査名・地区名	箱数（１箱：約30リットル）							備　考（主要時期・特殊遺物）	文献
			総数	土器	石器	木器＊	種子＊	その他	サンプル＊		
医病	発掘	鹿田第１次調査（外来診療棟）	598	493	15.5	60	0.5	1	28	弥生中期～中・近世、木製短甲・人面線刻土器・ガラス滓等	7
〃	〃	鹿田第２次調査（NMR-CT 室）	118.9	94	0.4	20	0.5		4	弥生後期～中世、田舟・木簡等	〃
医短	〃	鹿田第３次調査（校舎）	131.6	36	0.3	90	0.3		5	古代～中世、石帯	10
〃	〃	鹿田第４次調査（配管）	3.5	2	0.3		0.2		1	古代、鹿角製品	〃
医病	〃	鹿田第５次調査（管理棟）	130	87	2.5	20	1.5		19	弥生後期～中・近世	24
ア	〃	鹿田６次調査（アイソトープ総合センター）	62	59	0.5	1	1.5			中世、青銅製椀	40
医	〃	鹿田第７次調査（基礎医学棟）	81	66		10		1	4	弥生～近世、猿形木製品	53
医	〃	鹿田第８次調査（RI 治療棟）	8	8						弥生～中世	53
医病	〃	鹿田第９次調査（病棟Ⅰ期）	120.1	96	0.1	13		9	2	弥生～近世、木簡３点	56
医病	〃	鹿田第10次調査（共同溝）	2	2						古代～近世	56
医病	〃	鹿田第11次調査（病棟Ⅰ期）	74	66		4		2	2	弥生～近世、木簡１点	56
医	〃	鹿田第12次調査（エネルギーセンター）	147	77	1	54			15	弥生～近世、櫛	61
医病	〃	鹿田第13次調査（総合教育研究棟）	254	211	5	10			28	弥生～近世	71
医病	〃	鹿田第14次調査（病棟Ⅱ期）	66	54		3			9	中世～近世	74
医	〃	鹿田第15次調査（総合教育研究棟関連）	4	4						古墳初頭・中世	74
大医	〃	鹿田第16次調査（立体駐車場エレベーター他）	1	1						弥生～近世	本紀要
全	〃	津島岡大第１次調査（NP－１）	5	0.5	0.5	4				弥生中期～古代	3
農	〃	津島岡大第２次調査（農学部合併処理槽・配管）	17.5	12	1.5				4	弥生早期～弥生前期	4
学生	〃	津島岡大第３次調査（男子学生寮）	67	49	1.5	2	4.5		10	縄文後期～古墳初頭、古代～近世　石製指輪、蛇頭状土器片	19
〃	〃	津島岡大第４次調査（屋内運動場）	1	1						弥生早期～弥生前期〈試掘調査遺物を含む〉	6
大自	〃	津島岡大第５次調査（大学院自然科学研究科棟）	82	68	3	1	8		2	縄文後期～古墳、古代～近世、耳栓・木製櫛（縄文）、堅果類	27
工	〃	津島岡大第６次調査（生物応用工学科棟）	49	33	1	9	6			縄文後期～近世、人形木器、アンペラ、人形土製品	35
工	〃	津島岡大第７次調査（情報工学科棟）	31.5	10	0.5	1			20	縄文後期～近世	35
全	〃	津島岡大第８次調査（遺伝子実験施設）	11.5	10	0.5				1	縄文後期～近世	32
工	〃	津島岡大第９次調査（生体機能応用工学科）	50.5	30	2.5	3			15	縄文後期～近世	47
全	〃	津島岡大第10次調査（保健管理センター）	87	78		7			2	弥生前期～近世	65
〃	〃	津島岡大第11次調査（総合情報処理センター）	5.5	3	0.5				2	縄文後期～近世	36
〃	〃	津島岡大第12次調査（図書館）	55	24	1	20			10	縄文後期～近世	65
〃	〃	津島岡大第13次調査（福利厚生施設　北）	12.5	12	0.5					縄文後期・古墳前期・中世	41
〃	〃	津島岡大第14次調査（福利厚生施設　南）	13	12					1	弥生～古墳	46
〃	〃	津島岡大第15次調査（サテライトベンチャービジネスラボラトリー）	68	14	10	20			24	縄文後期～中世、縄文後期・弥生早期遺物、アンペラ、堅果類	72
農薬	〃	津島岡大第16次調査（動物実験棟）	0.3	0.3						縄文後期・弥生～中世	44
環	〃	津島岡大第17次調査（環境理工学部校舎Ⅰ期）	85	62	11				12	縄文後期～近世	77
全	〃	津島岡大第18次調査（南福利ポンプ槽）	1	1						縄文後期～近世	53
	〃	津島岡大第19次調査（コラボレーションセンター）	31	21	1	4		2	3	縄文後期～近世	64
環	〃	津島岡大第20次調査（環境理工学部ポンプ槽）	1	1						縄文後期～近世	53
工	〃	津島岡大第21次調査（工学部エレベーター）	7	5	2					縄文中期～近世	64
環	〃	津島岡大第22次調査（環境理工学部校舎Ⅱ期）	37	26	4	3		1	3	縄文後期～近世、古代堰部材、曲げ物	77
文法経	〃	津島岡大第23次調査（総合研究棟）	127	29	1	90	2		5	縄文後期～近世、石棒、杭	56
文法経	〃	津島岡大第24次調査（総合研究棟渡り廊下）	2.1	1	0.1	1				縄文後期～近世	61
農	〃	津島岡大第25次調査（農学部散水施設）	0.3	0.1		0.2				中・近世	61
事	〃	津島岡大遺跡第26次調査（事務局本部棟）	33	17		5		1	10	縄文後期～近世	76
事	〃	津島岡大遺跡第27次調査（創立五十周年記念館）	15	14	1					縄文中期～近世	68
工	〃	津島岡大遺跡第28次調査（自然科学系総合研究棟）	17	15	2					縄文後期～近世	71

所属	種類	調査名・地区名	箱数（1箱：約30リットル）							備　考（主要時期・特殊遺物）	文献
			総数	土器	石器	木器＊	種子＊	その他	サンプル＊		
農	発掘	津島岡大遺跡第29次調査（農学部共同溝）	2.1	2	0.1					縄文後期～近世	71
固	〃	福呂遺跡第1次調査（実験研究棟）	9	8					1	縄文早期・弥生中期・中世	55
固	〃	福呂遺跡第2次調査（実験研究棟スロープ）	2.1	2				0.1		中世～近世	55
医病	試掘確認	鹿田（駐車場）	1	1						弥生～中世	5
学生	〃	津島北（男子学生寮）	1	0.7	0.3					縄文後期～弥生前期	〃
大自	〃	〃　（自然科学研究科棟）	1	1						縄文後期～弥生前期	6
事	〃	津島土生（外国人宿舎）	1	1						縄文～中世	8
理	〃	津島北（身障者用エレベーター）	0.3	0.3						中・近世	〃
教養	〃	津島南（　〃　）	0.7	0.7						縄文・中世	〃
工	〃	津島北（校舎）	1	1						縄文～近世	11
農薬	〃	津島南（動物・遺伝子実験施設）	0.7	0.7						縄文～弥生、中・近世	〃
事	〃	津島南（国際交流会館）	0.3	0.3						中世	〃
大自	〃	津島北（合併処理槽）	0.2	0.2						中・近世	14
学生	〃	津島南（学生合宿所）	0.4	0.2					0.2	中世	〃
教育	〃	津島北（身障者用エレベーター）	0.3	0.3						縄文	〃
図	〃	〃　（図書館）	0.8	0.8						古墳～中世	〃
学生	〃	津島南（学生合宿所ポンプ槽）	0.4	0.4						縄文～中世	18
資生	〃	倉敷（資源生物科学研究所）	0.1	0.1						近世	〃
ア	〃	鹿田（アイソトープ総合センター）	1	1						中世～近世	〃
事	〃	津島北（福利厚生施設）	0.5	0.5						弥生？～中世	〃
農	〃	津島南（動物実験施設）	0.1	0.1						縄文？～近世	33
環	〃	津島北（環境理工Ⅱ期）	0.1	0.1						－	53
工	〃	津島北（システム工学科棟）	0.1	0.1						－	53
全	立会	83年度	2	2						分銅形土製品	1
〃	〃	84年度	1	1						－	2
〃	〃	85年度	1	1						－	3
〃	〃	86年度	0.5	0.5						－	6
〃	〃	87年度	0.5	0.5						－	8
	分布	89年度　三朝・本島	0.3	0.3						－	14
全	立会	91年度　92年度	0.3	0.3						－	21・25
〃	〃	93年度～99年度	0.8	0.8						－	30・33 38・44 50・53 56
〃	〃	00年度	3	3						－	61
〃	〃	02年度	8.5	2.5	6					弥生早期土器、中世、礎石	71
〃	〃	03年度	2	2						－	74
〃	〃	04年度	1	1						－	本紀要
総　箱　数			2757.9	1941.3	77.1	455.2	25	17.1	242.2		

＊　木器・種子・サンプルの箱数は、資料整理が進むにつれて収蔵形態が変化するため、特に箱数の変動が大きい。
文献は付表4・5の番号に対応する。

付表4　埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名　称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報1　1983年度	1985年2月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報2　1984年度	1985年3月
3	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第1集	1985年5月
4	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告Ⅱ（農学部構内BH13区他）　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第2冊	1986年3月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報3　1985年度	1987年3月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報4　1986年度	1987年10月

付表5　埋蔵文化財調査研究センター刊行物　（2004年3月まで）

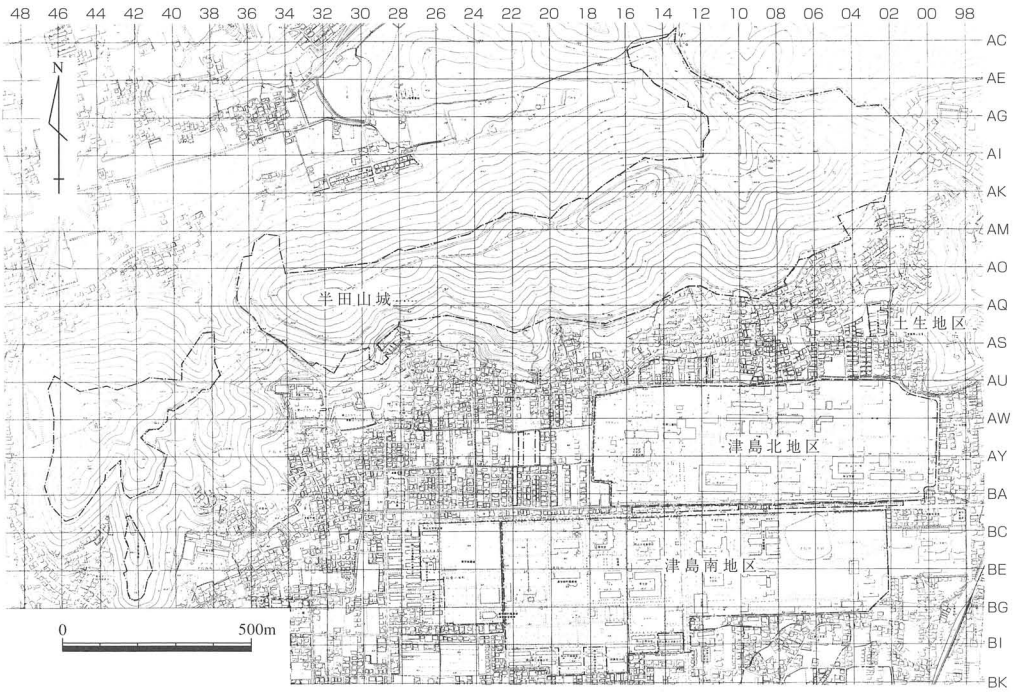
番号	名　称	発行年月日
7	鹿田遺跡Ⅰ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第3冊	1988年3月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報5　1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第1号	1988年10月
10	鹿田遺跡Ⅱ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第4冊	1990年3月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報6　1988年度	1989年10月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第2号	1989年8月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第3号	1990年2月

番号	名　　称	発行年月日
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報７　1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第４号	1990年７月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第５号	1991年３月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第６号	1991年８月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報８　1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡３　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第５冊	1992年３月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第７号	1992年３月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報９　1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第８号	1992年８月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第９号	1993年３月
24	鹿田遺跡３　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第６冊	1993年３月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報10　1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第10号	1993年11月
27	津島岡大遺跡４　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第７冊	1994年３月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第11号	1994年３月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第12号	1994年10月
30	岡山大学構内遺跡調査研究年報11　1993年度	1995年２月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第13号	1995年３月
32	津島岡大遺跡５　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第８冊	1995年３月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報12　1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第14号	1995年10月
35	津島岡大遺跡６　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第９冊	1995年12月
36	津島岡大遺跡７　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第10冊	1996年２月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第15号	1996年３月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報13　1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第16号	1996年10月
40	鹿田遺跡４　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第11冊	1997年３月
41	津島岡大遺跡８　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第12冊	1997年３月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第17号	1997年３月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第18号	1997年９月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報14　1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代　岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月
46	津島岡大遺跡９　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第13冊	1997年12月
47	津島岡大遺跡10　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第14冊	1998年３月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第19号	1998年３月
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報15　1997年度	1999年１月
51	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第21号	1999年３月
52	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第22号	1999年９月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報16　1998年度	2000年１月
54	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第23号	2000年３月
55	福呂遺跡Ⅰ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第15冊	2000年３月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報17　1999年度	2000年８月
57	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第24号	2000年９月
58	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第25号	2001年３月
60	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第26号	2001年８月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報18　2000年度	2001年10月
62	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第27号	2002年３月
63	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第28号	2002年９月
64	津島岡大遺跡11　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第16冊	2003年３月
65	津島岡大遺跡12　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第17冊	2003年３月

番号	名　　称	発行年月日
66	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要　2001	2003年３月
67	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第29号	2003年３月
68	**津島岡大遺跡13　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第18冊**	2003年５月
69	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第30号	2003年８月
70	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第31号	2004年２月
71	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要　2002	2004年３月
72	**津島岡大遺跡14　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第19冊**	2004年３月
73	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第32号	2004年９月
74	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要　2003	2004年12月
75	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第33号	2005年３月
76	**津島岡大遺跡15　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第20冊**	2005年３月
77	**津島岡大遺跡16　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第21冊**	2005年３月

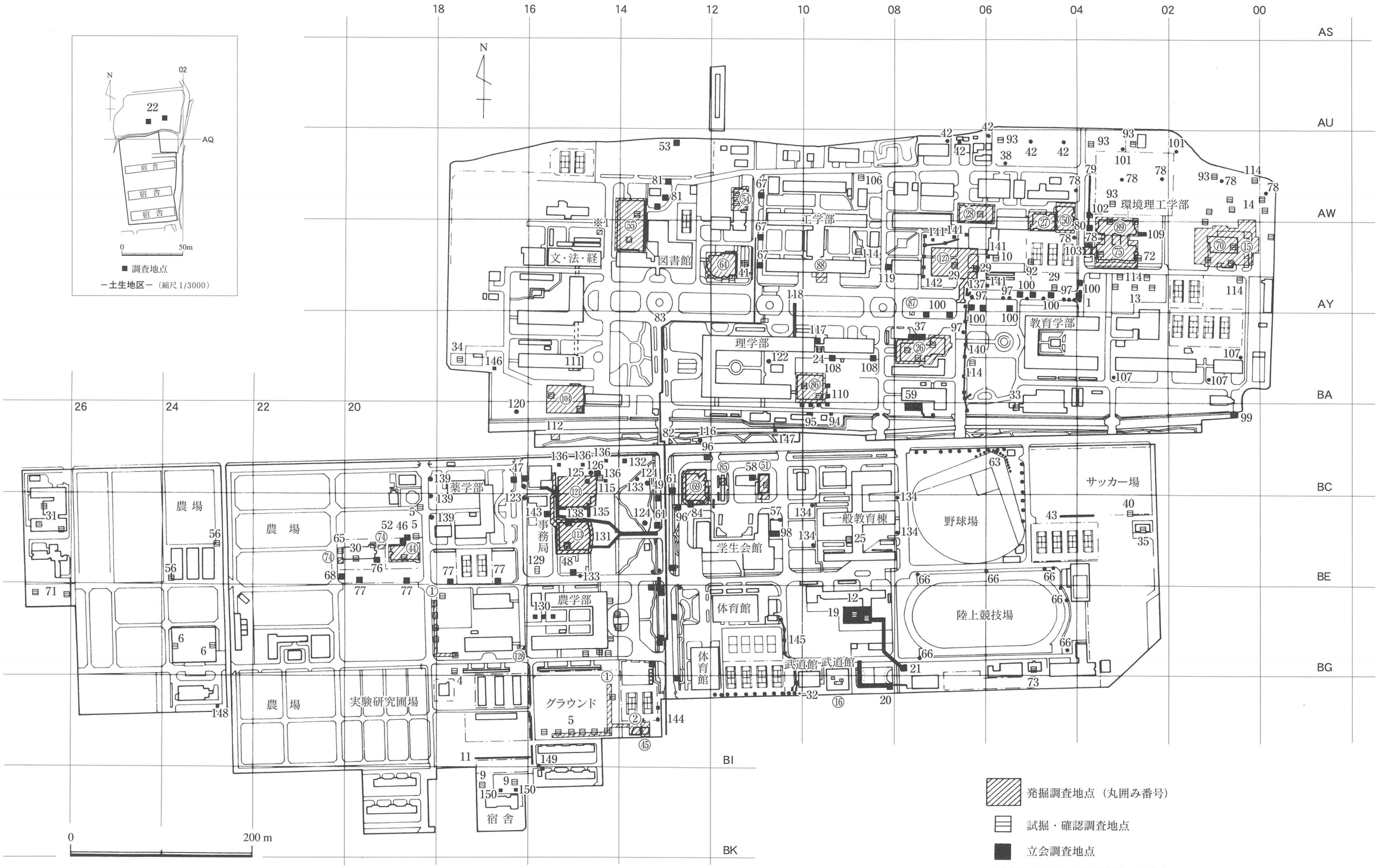
発掘調査報告書は太字

付　図

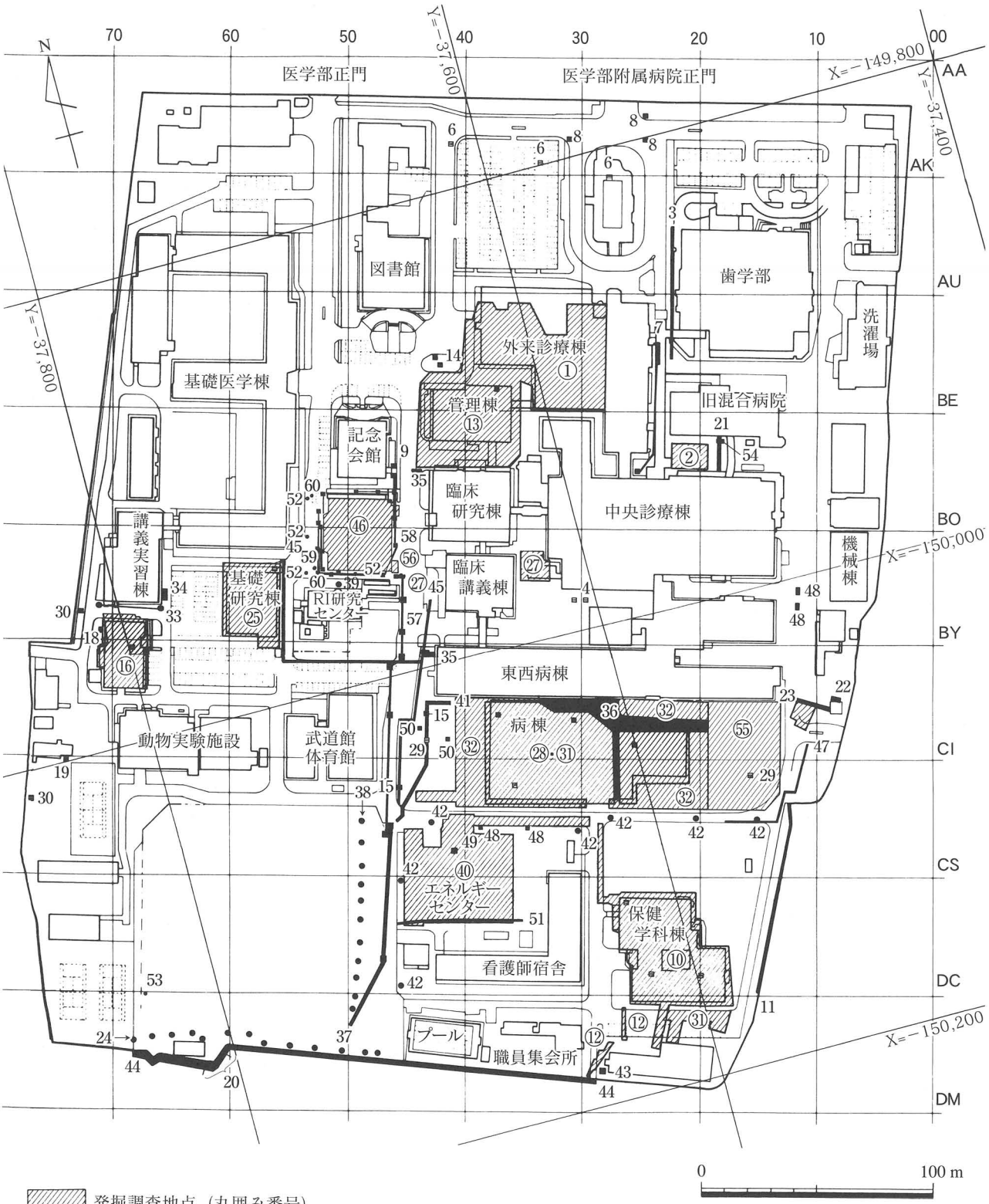


付図１　津島地区全体図（縮尺１/20,000）

－土生地区－（縮尺 1/3000）



付図２　2003年度までの調査地点【１】－津島地区－（縮尺１/4000）



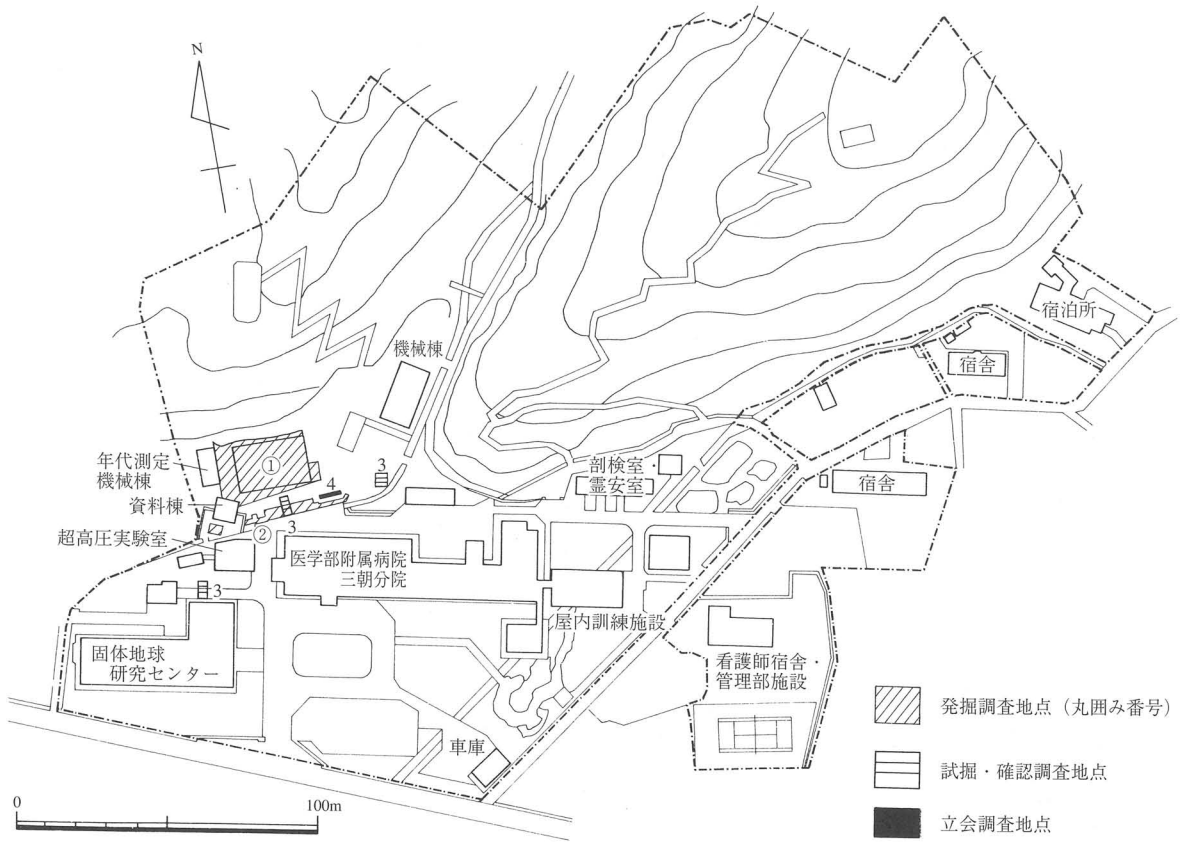
▨ 発掘調査地点（丸囲み番号）

目 試掘・確認調査地点

■ ● 立会調査地点

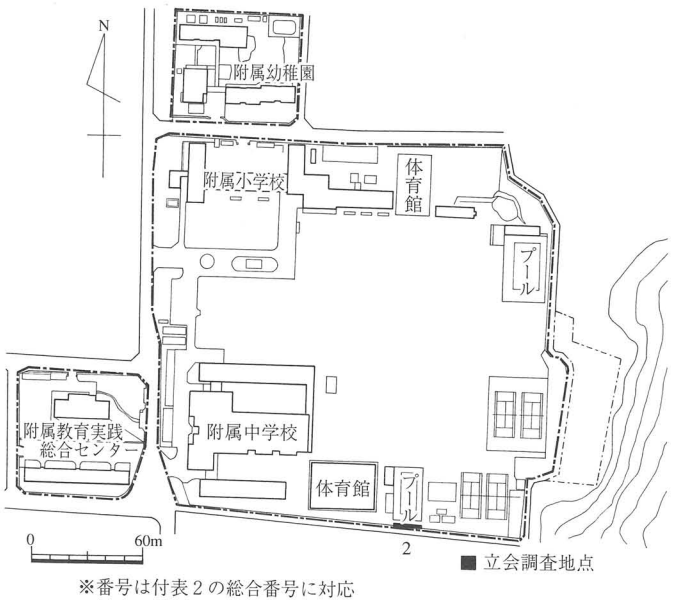
※ 番号は付表２の調査番号に対応する。

付図３　2003年度までの調査地点【２】ー鹿田地区ー（縮尺１/2500）



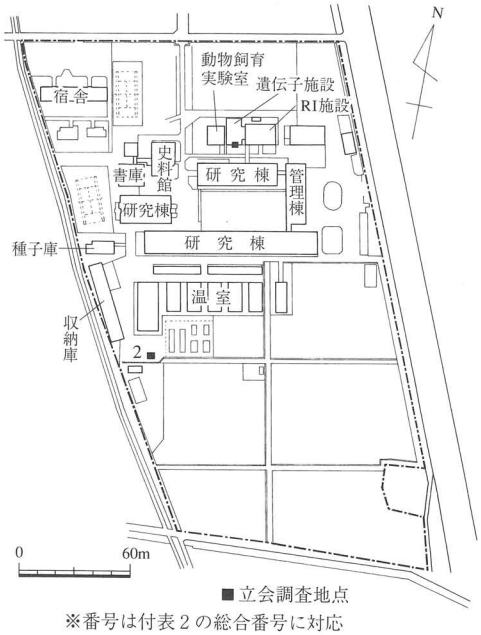
※番号は付表２の総合番号に対応

付図４　2003年度までの調査地点【３】－三朝地区－（縮尺１/2500）



※番号は付表２の総合番号に対応

付図５　2003年度までの調査地点【４】－東山地区－
（縮尺１/4000）



※番号は付表２の総合番号に対応

付図６　2003年度までの調査地点【５】
－倉敷地区－（縮尺１/4000）

Copyright©Archaeological Research Center, Okayama University
Printed in Okayama, Japan

2006年３月15日　印刷
2006年３月15日　発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要
2004

編集・発行　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市津島中三丁目１番１号
（086）251－7290
印刷　西日本法規出版株式会社

BULLETIN of Archaeological Research Center Okayama University 2004

Archaeological Research Center, Okayama University
3-1-1 Tsushima-Naka Okayama-city, 700-8530 Japan
http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html